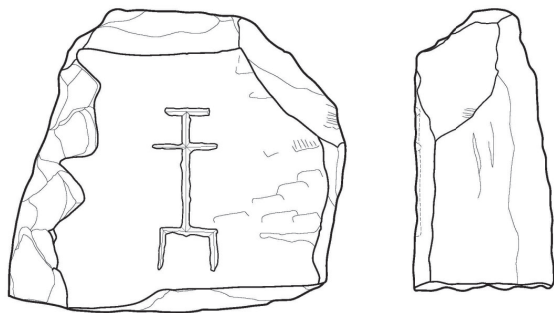
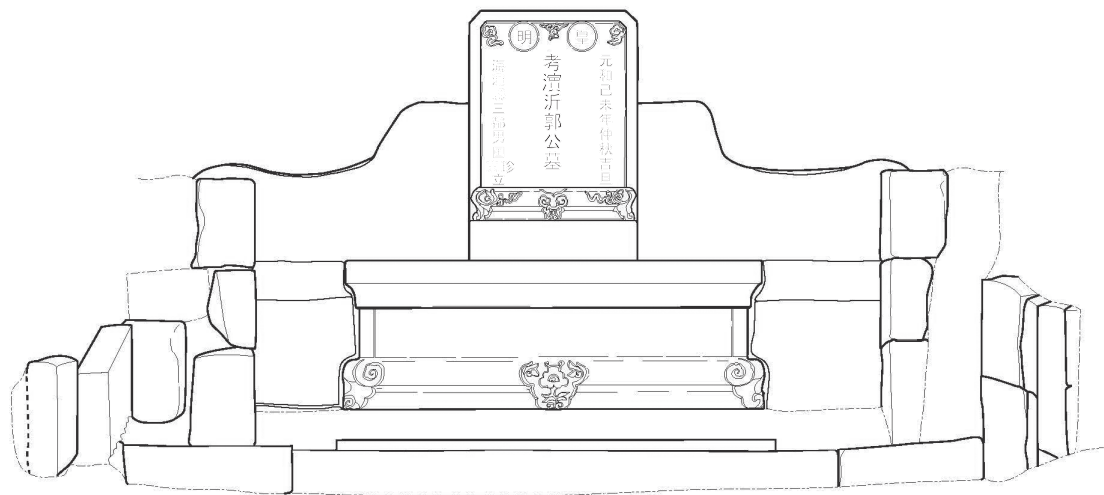


キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の 外来墓制に関する基礎的研究

A Basic Research on the Tombs of Foreign Origin in Japan during the Age of the Great Voyages
: Christian Tombs and Chinese Tombs



大分県臼杵市豊後大野市 西寒田クルスバ十字架碑



熊本県玉名市郭濱沂墓

2014年3月

研究代表者 田中 裕介
Research leader Tanaka Yūsuke

別府大学 文学部
Beppu University, Faculty of Humanities



大分県臼杵市・豊後大野市 西寒田クルスバ遺跡十字架碑



大分県豊後大野市 岡ナマコ墓



長崎市稲佐悟真寺墓地M地区唐人墓群



岡山県津山市千年寺鐵堂和尚墓



熊本県玉名市伊倉 郭瀆沂墓



墓碑



熊本県玉名市天水町林均吾墓全景

例 言

本書は科学研究費補助金（研究活動スタート支援）の交付を受けて実施した研究成果の報告書である。

1. 研究課題名 キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究
2. 課題番号 24820071
3. 研究期間 平成24（2012）年度～25（2013）年度
4. 研究組織 研究代表者 田中 裕介（別府大学文学部）
研究協力者 大石 一久（長崎歴史文化博物館）
 〃 李 桓（長崎総合科学大学）
 〃 橋口 旦（鹿児島県南さつま市教育委員会）
 〃 三谷 紘平（大分県中津市教育委員会）
 〃 竹田 宏治（熊本県玉名市役所）
 〃 荒木 隆宏（ 〃 ）
 〃 末永 崇（熊本県玉名市教育委員会）
 〃 田中 康雄（ 〃 ）
 〃 池田 朋生（熊本県立装飾古墳館）

調査にあたっては、悟真寺、菩提寺および土地所有者各位、熊本県玉名市教育委員会、玉名市立歴史博物館ころピア、鹿児島県南さつま市教育委員会、臼杵市教育委員会、豊後大野市教育委員会、神田高士、高野弘之、後藤乾彦、諸岡郁、安藤恒美、竹田市教委、佐伯治、津山市教委、豊島雪絵、津山市長継山千年寺北川艶香、宇治市黄檗山万福寺、塔頭万寿院住職泰山智深師、瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）、佐伯信行（浦添市教委）、平岡隆二（熊本県立大学）、原田昭一、大分県教育庁埋蔵文化財センター、長瀬雅彦（長崎市役所）、別府大学付属図書館、豊後大野市図書館、別府大学教員、院生、学生、職員の協力を得た。とくに付属図書館萩尾美香、調査事務については、畑中美智子、矢野史、大町玲子、佐藤さくら氏に感謝したい。実測図の浄書には奥彩香、馬場晶平、崎谷雄紀、北原美希、佐藤理恵の別府大学大学院生と阿部みゆき（雅企画）による。記して感謝する。

5. 研究経費 平成24（2012）年度 1,170,000円（直接経費 900,000円、間接経費270,000円）
平成25（2013）年度 1,300,000円（直接経費1,000,000円、間接経費300,000円）
合計 2,470,000円（直接経費1,900,000円、間接経費570,000円）

6. 本書の編集は、田中裕介が担当し、執筆者は、目次および各文文頭に記した。共同して調査にあたった林均吾墓については荒木隆宏氏に、坊津泊の唐人墓と長崎市東海墓については、先行業績のある橋口旦氏与李垣氏に各々執筆をお願いし、仏教系の唐人墓については仏教資料に造詣の深い三谷紘平氏に、全体を通じて協力していただいた大石一久氏は唐人墓についての石造物とは異なる視点から、まとめの一文をいただいた。

目 次

序 章 はじめに

第1節 問題の所在と研究史	田中 裕介 ……	1
第2節 調査経過		2

第1章 キリシタン墓地の調査

第1節 大分県臼杵市豊後大野市西寒田クルスバ遺跡の石造物	田中 裕介 ……	4
第2節 大分県豊後大野市岡なまこ墓の調査		9

第2章 唐人墓地の調査

序 節 唐人墓について	田中 裕介 ……	14
第1節 長崎市菩提寺の唐人墓	田中 裕介 ……	16
第2節 長崎市悟真寺の唐人墓	田中 裕介 ……	17
第3節 熊本県玉名市の唐人墓		
1 謝振倉墓	田中 裕介 ……	26
2 郭瀆沂墓（肥後四官墓）	田中 裕介 ……	28
3 林均吾墓	荒木 隆宏 ……	32
第4節 鹿児島県南さつま市坊津町泊の唐人墓	橋口 亘 ……	37

第3章 華南様式の墓地

第1節 黄檗宗の墓地	三谷 紘平 ……	40
第2節 長崎市における唐通事の墓	李 桓 ……	44

終 章 総括

第1節 唐人墓とその造営	大石 一久 ……	48
第2節 キリシタン墓地と中国人墓その接点	田中 裕介 ……	51

序章 はじめに

田中 裕介

第1節 問題の所在と研究史

研究目的 古代以来の日本の墓制は中世を通じて仏教化し、墓上に設ける施設は仏教的な供養塔から個人を供養する墓碑に次第に変化した。近世になると被葬者一人一人に戒名と没年銘を刻んだ墓石に変質し、その墓石が林立する日本独特の近世墓地が成立する。

そのような経過のなかにあって「鎖国」以前の16世紀後半から17世紀前半の大航海時代には、キリスト教布教に伴うキリシタン墓と、中国人の渡航定住に伴ういわゆる唐人墓が九州を中心に造られる。いずれも日本の仏教的在来墓制とは大きく異なることが近年の調査で判明しつつある。この時代の東アジアではイエズス会によるカトリック布教が盛んに行われた浙江省から福建省にかけての華南沿海部と、九州を中心とした西日本は、ともに華南出身の中国人海商が活動した地域であり、一見無関係に見えるキリシタン墓と唐人墓であるが、イエズス会宣教師と中国人海商の活動地域は重なっているのである。地域・宗教や民族性が大きく異なるにもかかわらず、石造墓碑の一部にその類似性が指摘されている。

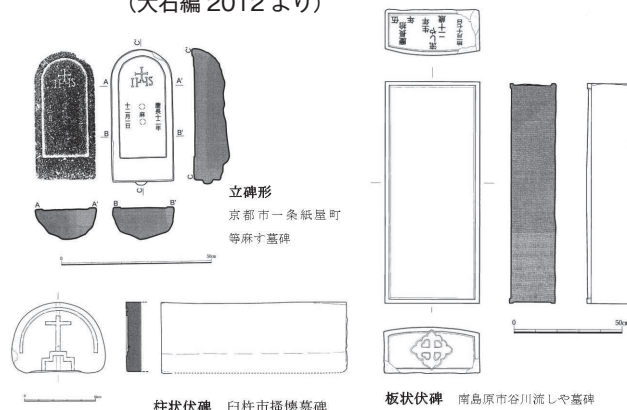
そこで16世紀から17世紀代のキリシタン墓地と、日本国内の中国人墓地の資料調査と集成をおこない、近世日本の伝統墓地と考古学的に比較研究する基礎資料を得ることを目的として調査研究をおこなった。

研究の背景 16世紀の中国人海商は明の海禁政策にもかかわらず、東南アジア・インド交易に従事し、1530年代に日本において大森銀山の本格的操業が始まると銀を求めて多数の海商が渡航し交易に従事するようになる。その一部は日本各地の戦国時代に「唐人町」と呼ばれる中国人居住区を形成した。彼らの居住の実態は不明な部分が多いが、墓制については17世紀になると華南に起源するいわゆる「亀甲墓」(写真1)が東南アジア一帯から日本の九州に造られていることが考古学の立場から指摘されてきた⁽¹⁾。また文献史学からは朱印船貿易家の墓地として熊本県玉名市の唐人墓が注目されている⁽²⁾。その形態は当時の日本人の伝統的墓制とは異なり、中国浙江省から福建省沿岸部にかけて分布する墓碑を中心に前面に前庭部、背後の墓丘とそれを取り巻く半円形あるいは馬蹄形の構造物からなる華南様式の墓地である。

いっぽう同時代の日本の墓碑とは異なる形態のキ

リシタン墓碑が存在することは古くから指摘され⁽³⁾、その後片岡弥吉の研究⁽⁴⁾により、日本国内の現存資料の大半が確認され、キリシタン墓碑は「立碑形、蒲鉾形(=柱状伏碑)、伏碑形(=板状伏碑)」の大別3形式(図1)が存在することが明らかとなった。しかしキリシタン墓碑に年代を与えるために墓碑の考古学的研究がおこなわれたのは最近のことである。その背景には1999年の高槻城キリシタン墓地の突然の発見とその発掘調査以来、江戸、豊後府内などでキリシタン墓地の埋葬遺構調査が次々とおこなわれ⁽⁵⁾、日本人キリスト教徒の墓地が日本の仏教的伝統的墓制と大きく異なっていることが墓地の埋葬形態や空間構成の面でも明らかになってきたという事情もある⁽⁶⁾。

図1 石造キリシタン墓碑の基本3形式
(大石編 2012 より)



田中は2002年以来、長崎歴史文化博物館の大石一久氏と共同でキリシタン墓碑の実測図作成と形式分類の作業をおこない、従来からキリシタン墓碑とされてきた石材の表面を研磨整形した整形墓碑について1580年代から1620年代にかけて5期区分が可能であり、初期の形式および関西の例ほど在来の仏教墓碑からの影響が大きく、17世紀初頭に九州を中心に外来的な意匠が伝播していく過程をしめした⁽⁷⁾。

そうしたなか2011年から大分県臼杵市下藤^{しもふじ}キリシタン墓地の調査(臼杵市教委)が行われた。そこは以前から「蒲鉾形」の整形墓碑と十字架碑が採集された墓地であって、キリシタン墓地の下部構造と墓碑などの地上遺構をセットとして解明できる初めての調査と



写真1 「亀甲墓」
(悟真寺墓地I地区 12号墓)



写真2 石組遺構
(神田 2012 より)



写真3 粗製切妻屋根型伏碑
(下藤キリシタン墓地)

なった。下藤墓地では高槻城キリシタン墓地と同様な埋葬施設と空間構成をとる下部遺構とともに、地上標識となる石組遺構（写真2）と従来キリシタン墓碑とは見なされてこなかった未整形の切妻屋根型伏碑（写真3）が用いられていた⁽⁸⁾。この石組遺構は長崎県北部のキリシタン墓にみとめられ、その由来が問題となっている。また切妻屋根型伏碑は、長崎県地域に類似の遺構が認められる。

またキリシタン墓碑の起源の問題については、かつて片岡弥吉によって、最近では長崎純心大学によって、整形キリシタン墓碑の各形式の源流をもとめてヨーロッパの墓碑と対比する研究が行われてきた⁽⁹⁾。しかしヨーロッパの同時代のカトリック墓地の墓碑には、日本のキリシタン墓碑と直接型式学的にたどれるものは明確ではなく、インド、東南アジア、マカオなどキリスト教が大航海時代に布教がおこなわれた都市や地域で日本のキリシタン墓碑の祖形となる墓碑がなお見出されていない。

以上のようにこれまで日本に存在する唐人墓とキリシタン墓は別個に研究されてきた。しかし古く濱田耕作によって半円柱形柱状伏碑（文献3の蒲鉾形）のキリシタン墓碑が、中国北京の柵欄のマテオ・リッチ墓（写真4、1611年建碑）などのイエズス会宣教師墓地の墓碑形態に類似すること⁽³⁾や、切妻屋根形の板状伏碑が長崎市内各所とくに悟真寺の唐人墓の墓碑（写真5）に類似の形態の存在が既に指摘されていた⁽¹⁾。日本のキリシタン墓の形式に大陸のキリシタン墓碑や唐人墓の中に祖形を求めうる可能性の指摘である。



写真4 マテオ・リッチ墓
(北京行政学院2011「青石存史」より)



写真5 唐人墓 (悟真寺)

日本の伝統に根差さない外来的墓制である大航海時代に伝播したキリシタン墓碑の祖形をイペリア・イタリアなどのカトリックの故地に直接求めるのではなく、いったん東アジアの墓制のなかに影響関係を探っていくことが、将来ヨーロッパとの関係を突き止めるためにも必要であると考えられる。

以上のようにキリシタン墓碑は整形墓碑に関しては在来墓制との関係が解明されつつあるが、新たに確認された石組遺構や粗製屋根型伏碑からなる墓地の実態と、中国人墓碑との影響の可能性は新たに提起された問題である。このような大航海時代に日本に移入された外来墓制の実態を究明し日本の墓制への影響を検討するための基礎資料を、考古学的方法を用いて作図・

記載を行い集成し、変遷と年代を明らかにすることがまず最初の課題である。

- (1) 坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」『九州考古学』76 九州考古学会
- (2) 中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館
- (3) 新村出・浜田耕作ほか1923『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学考古学研究報告7
- (4) 片岡弥吉1942「長崎県下キリシタン墓碑総覧」『キリシタン研究』1 キリシタン文化研究所
- (5) 今野春樹2004「キリシタンの葬制」『キリシタン文化研究会報』123、田中裕介2008「イエズス会豊後府内教会と付属墓地」『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院
- (6) 田中裕介2012「キリシタン墓地の構造」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』
- (7) 大石一久編2012『キリシタン墓碑総覧』南島原市教委
- (8) 神田高士2012「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」『大分県地方史』214 大分県地方史研究会
- (9) 片岡弥吉1976「キリシタン墓碑の源流と墓碑型式分類」『キリシタン研究』16、片岡瑠美子編2012『キリシタン墓碑の調査』長崎純心大学

第2節 調査経過

研究の方法 唐人墓の実測図を含む資料の集成をおこない、その日本化の過程と、キリシタン墓碑との混交現象と指摘されている粗製屋根型伏碑の墓碑の実態をあきらかにし、同時にキリシタン墓地に見られる地上標識の石組遺構の基礎資料作成のため分布調査と実測調査を実施した。

実測調査については、キリシタン墓地では豊後大野市岡なまこ墓、臼杵市豊後大野市西寒田クルスバ遺跡をおこなうとともに、臼杵市野津町神野家墓地・波津久クルスバ遺跡、豊後大野市大飼町栗ヶ畑亀の甲墓地の踏査をおこなった。

唐人墓については、熊本県玉名市の2例、長崎悟真寺の墓碑群の実測調査、長崎市崇福寺ほか、東海の墓、長崎市深堀菩提寺の唐人墓、鹿児島県南さつま市坊津泊唐人墓を踏査した。また関連する黄檗宗の中国人僧侶墓や近世の儒教墓の中で形態の類似する墓地の踏査を行った。

2012（平成24）年

7月28日 長崎市内の唐人墓地調査。悟真寺、深堀菩提寺（写真8）、東海の墓を予備調査。（大石、田中、三谷、長瀬）

11月3日 熊本県玉名市の3カ所の唐人墓地調査の打ち合わせと現地踏査をおこない、石材と矢穴痕を観察し、今後の実測をおこなう計画を協議する。（田中、三谷、竹田、荒木、末永、池田）石材と矢穴技法ともに在地のものではないことが問題となる。

11月4日 長崎市崇福寺墓地（黄檗宗）の唐人墓調査（田中、三谷）。崇福寺の僧侶の墓地は華南様式の影響が強く、一般の唐人墓は17世紀後半から18世紀の清年号をもつ中国人船員の墓地が中心である。

12月から翌年3月まで断続的に豊後大野市・臼杵市の西寒田クルスバ遺跡の石造物実測調査を別府大学の学生を中心に実施。

12月2日 臼杵市で開催されたおおいた石造文化研究会臼杵大会シンポジウム「石塔はなぜ破壊されたのか」に、豊後大野市・臼杵市大字西寒田（御霊園）クルスバ遺跡の調査経過と調査の現状を報告。

12月3日 大分県臼杵市下藤キリシタン墓地遺跡石造物調査（田中）。

12月16～17日 熊本県玉名市林均吾墓と郭濱沂墓の調査（田中、三谷、竹田、荒木、末永、池田）

2013（平成25）年

1月27～28日 津山市教委（担当豊島雪絵）の紹介により岡山県津山市黄檗宗千年寺および本光寺調査（沙門北川艶香氏）。千年寺第2代鐵堂道融和尚墳墓と本光寺の立地が風水思想に基づく選地が行われていることに感動を覚えた（田中）。墓碑の周囲は華南の唐人墓様式で作られている。

2月3日 西寒田クルスバ遺跡の石造物実測中に十字架碑を発見。

2～7月断続的に大分県豊後大野市岡なまこ墓の石造物実測調査を実施（写真6）。

2月16～17日 熊本県玉名市林均吾墓（写真7）と郭濱沂墓の実測調査（田中、三谷、竹田、荒木、末永、平岡）、前川清一氏より教示を得る。

3月2～4日 沖縄本島の「^{かめこうぼ}亀甲墓」を瀬戸哲也・佐伯信行両氏の案内で調査、特に1525年銘の那覇市上里墓の墓碑と九州の唐人墓の墓碑本体の類似に驚く。（田中、三谷）

3月9日 大分県臼杵市中央公民館で開催された臼杵史談会年次大会の講演「日本のキリシタン墓研究の現状」のなかで、西寒田クルスバ遺跡の調査成果を紹介した。

5月8日、25日大分県豊後大野市犬飼町栗ヶ畑亀の甲墓地調査（田中、諸岡、安藤恒美：豊後大野市文化財保護員）岡なまこ墓16号墓と同じ形式の石組遺構の上に平形の板状伏碑をのせた墓碑が存在する。

5月25日 大分県臼杵市野津町神野家墓地調査（田中、神田、諸岡）栗ヶ畑亀の甲墓地と同じ墓碑が存在するが、ここでは伏碑の上にのちに近世墓石が付加されている。きわめて特異である。

6月8～9日 京都府宇治市黄檗山万福寺を北川艶香氏の仲介で1世隠元和尚墓からまで4世獨湛和尚墓を見学（田中・三谷）。いずれも華南様式の墓地である。

さらに京都市嵯峨野二尊院の墓地に行き、伊藤仁斎・

東涯父子の墓地を調査、周辺の儒教墓にまで華南様式の墓地の影響が認められることを確認した。

8月19～24日 長崎市悟真寺唐人墓地実測調査（田中・大石・李・松園）。猛暑の中17世紀代の銘のある唐人墓碑の実測調査を完了。最古の唐人墓の一群の中にキリシタン墓碑に類似する墓碑があることを確認。

8月25日 長崎市深堀菩提寺唐人墓調査（田中・松園・鮫島）。豪雨のため清掃と写真撮影のみで、実測に至らず。呉三官墓の立碑の石彫は玉名市の郭濱沂墓碑によく似ている。

12月6～7日 鹿児島南さつま市坊津泊唐人墓調査（田中、橋口、大石、李、三谷、荒木、末永）。長崎熊本の唐人墓とは全くことなる中国漆喰製の墓地である。形態は華南様式の範疇に入る。



写真6 岡なまこ墓調査風景



写真7 林均吾墓調査風景



写真8 深堀呉五官墓

第1章 キリシタン墓地の調査

田中 裕介

2011年の臼杵市野津における下藤キリシタン墓地の調査開始以来、キリシタン墓地特有の地上施設として石組遺構と粗製の伏碑形墓碑の存在が明らかとなってきた。ことに前者の長方形に組まれた石組遺構に類似する施設が西日本各地で発見されたことによって、キリシタン墓地を確認するための指標となる遺構とであるという共通認識が生まれつつある。

この遺構を手がかりに、現在長崎県、熊本県、大分県、大阪府などキリシタンの世紀（16世紀後半～17世紀前半）に信徒集団が一定の定着をみた地域でのキリシタン墓地遺構の再検討が行われている。とりわけ2012年に調査された大阪府茨木市千堤寺西遺跡では、著名なキリシタン遺物所蔵家の近世墓地の周辺で、石組遺構を地上施設とする埋葬施設が発見され、さらに北隣の茨木市下音羽地区の近世墓地である大神家墓地のなかや、佐保栗栖山南墳墓群の中世末の墓地にもこのような遺構が発見され、キリシタン墓地においてかなり普及した施設であることが明らかになった⁽¹⁾。

そこで大分県南部のキリシタン遺跡群の基礎調査として粗製の伏碑形墓碑と、石組遺構が分布する墓地の測量および石造墓碑の実測調査を実施した。岡なまこ墓、西寒田クルスバ遺跡などを対象とした。

石組遺構の存在を基準に16世紀後半～17世紀前半の布教期のキリシタン墓地の可能性の高い遺跡が表1である。そのなかで今回石造物の実測調査をおこなった西寒田クルスバ遺跡と岡なまこ墓の調査成果の概要を報告する。

(1) 大阪文化財センター編
2014『発掘！検証！キリシタン墓地』

第1節 西寒田クルスバ遺跡の石造物

当遺跡は大分県臼杵市と豊後大野市の境界にまたがって所在する鎌倉時代末期から江戸時代初期まで存続した宗教遺跡である。所在地は旧豊後国大野郡戸上村大字西寒田のほぼ中央にあたる。クルスバとは「クルス」つまり十字架と「バ」つまり場所の意をあわせて十字架のある場所の意味し、宣教師史料に“Campo de Cruz”として頻出し「墓地」と訳されることが多い⁽¹⁾。

丘陵の山頂部に一辺20数mの方形の造成面が存在し、その平場や周囲に数多くの板碑や宝篋印塔など中世石造物が散乱している。その中に下藤キリシタン墓地と同じ石組遺構が含まれていた。

今回は地上に露出している18基の石造物の実測を行った。調査は2012年12月9日、2013年2月3日に実施し、実測には田中、馬場昌平、権丈和徳、崎谷雄紀（以上別府大学院生）、松浦由佳、宮木貴史、千原和己、

表1 墓碑以外の遺構から確認できる潜伏期以前のキリシタン墓地一覧

所在地	墓地名	基数	石造物	墓碑	地上遺構	地下遺構	石塔・板碑・石造伏碑	板碑・石造伏碑
長崎県平戸市	ウシワキ墓地	1基	—	—	石積遺構	木棺	—	なし
大分県大分市	豊後府内教会付属墓地	17基	—	—	—	木棺等	—	—
臼杵市	下藤キリシタン墓地	54基以上	十字架碑など	1基	石組遺構+粗製伏碑	木棺	有	有
臼杵市	神野家墓地	4基	—	2基(近世墓)	石組遺構+粗製伏碑	—	—	なし
臼杵市・豊後大野市	西寒田クルスバ遺跡	複数	十字架碑	—	石組遺構	—	有	—
豊後大野市	岡なまこ墓	30基	—	—	石組遺構+粗製伏碑	—	有	なし
豊後大野市	栗ヶ畑亀の甲墓地	20基以上	—	—	石組遺構+粗製伏碑	—	—	なし
大阪府茨木市	千堤寺西遺跡ほか	31基	—	(1基)	石組遺構	木棺	—	なし
茨木市	大神家墓地	1基	—	—	石組遺構	—	—	なし
茨木市	栗栖山南墳墓群	20基	—	—	石組遺構	木棺	—	なし
高槻市	高槻城キリシタン墓地	27基	—	—	—	木棺	—	なし
東京都千代田区	東京駅八重洲北口遺跡	10基	—	—	—	木棺+直葬	—	なし



図1 大分県南部のキリシタン墓地遺跡（『大分県の地名 大分県』平凡社の地図に追加）

村田仁志、鮎川和樹（以上別府大学生）があたり、トレースは奥彩香、北原美希（以上別府大学院生）が行った。

（2）五野井隆史2012「葬礼と墓地と墓に関する覚書」『キリシタン墓碑の調査』長崎純心大学

1 立地と遺構

遺跡は、標高約160mの独立丘陵の頂上部に位置している⁽³⁾。

遺構として（図2）、まず一辺25mほどの方形の造成面が存在する。西辺は約23m、北辺は26m、南辺は25m、東辺は土手の内側で約27mとややいびつな矩形平面をなし、丘陵を横切る山路に面する東辺には高さ1m弱の土手があり、北端の一端が幅3mほど途切れて入口になっている。南北の斜面は盛土による造成と丁寧な整形による精美な斜面となり、西側斜面は自然地形がよくのこって法面は低く、中央の平坦面から南北の斜面に、板碑や宝篋印塔、五輪塔など鎌倉～戦国時代わたる仏教石造物の部材が散乱している（写真1）。御霊園集落に下る麓には宝篋印塔の笠部（No.3）が転落しており、クルスバ遺跡の南斜面にある宝篋印塔の基礎（No.2）と同一個体と考えられる。平坦面中央には長方形の石組遺構があり、内部に砂利がまかれていた（No.11など：写真2）。これは臼杵市下藤キリシタン墓地で発見された石組遺構と同一形式の遺構である。そばには石柱状の安山岩石材（No.9：写真3）があり、その近くに正方形の石材（No.9）が存在する。



図2 西寒田クルスバの平面図と石造物の配置（田中 2012 より）

この方形遺構の造成過程を推測すると、まず丘陵中央を削って平坦面をつくり、削った土で方形の地形と土手を造成し、土手の東側は自然地形を残したものと推定される。本来この平坦面には板碑や宝篋印塔、五輪塔など仏教形式の石塔が配置されていたものと推定される。方形遺構の造成と土手は西に正面を向けた堂



写真1 西寒田クルスバ



写真2 No. 11 石組遺構



写真3 No. 9 石柱付近

宇を中心とする仏教の小規模な中世寺院であったと考えられる。

(3) 田中裕介2012「御霊園クルスバ遺跡の調査」『大分県地方史』
214 大分県地方史研究会

2 石造物

現状ではキリスト教十字架碑1基、宝篋印塔1組、小型の宝篋印塔の身らしき石造物2基、板碑4基、「キリシタン墓碑」2基以上、石組遺構3基、さらに正体不明の石柱状石材が発見されている。

最古の石造物は北斜面でみつかった正安二(1300)年銘の板碑である(No.1. 図3)。この板碑は残長1.5m以上で額部以上が欠失し、碑身部に刻まれた梵字種子の上半は失われている。正面を上に向け半ば埋没していた。

表面は、かろうじて文字が読み取れるほどに剥離している。わずかに「正安二」と読み取れ1300年の銘があることが判明した。

南側の斜面中央には造成部を掘り崩した跡があり、そこに14~15世紀の宝篋印塔2組、16世紀の板碑2基以上の破片が散乱していた。宝篋印塔の基礎は、二重の方形輪郭のなかに格狭間が陰刻され、下部には蓮弁六弁を垂下し各蓮弁間に間弁を陽刻する(No.2. 図4)。高

さ52cm、一辺62cm。

この宝篋印塔の笠と推定される石製品が、クルスバ遺跡の南のふもとに逆さに置かれた状態で発見されている(No.3. 図5)。下部二段上部二段で上部一段目に開花弁、二段目に上を向いた蓮弁三弁と間弁を配する。露盤には連子窓が彫られている。一辺70cm。原田昭一氏の研究⁽⁴⁾によると、1380~1400年ごろ製作された玄正(玄聖)系宝篋印塔の新例となり、そのなかでも比較的古いものと推定される。この笠部のもう一つの特徴は破壊の痕跡が明瞭なことである。隅飾りが四隅とも欠け、露盤も大半が損壊している。

もうひとつの宝篋印塔はやはり基礎(No.4)だが、上下に低く格狭間をつぶれたような表現である。

その地点からさらに遺構外に下った所にもう一ヶ所掘り起こされたあとがあり、そこには小型の宝篋印塔の身が二点存在している(No.5 AとB)。これは後世に掘りだされて置かれたようにみえる。表面は丁寧に研磨されているが月輪や梵字は刻まれず、上面に納入孔が彫られている。

さらに大型宝篋印塔のそばには二基の板碑が倒れていた。一基は碑身部中途から折れた板碑の上半部である(No.6. 図6)。残長65cm前後、幅47cmをはかり、やや膨らんで三角形をなす山形部、側面観は頂部が前方に位置する。額部は突出せず二条の凹線で切り込みを表現する珍しい例で、二条は側面まで伸びる。碑身部の月輪は全体

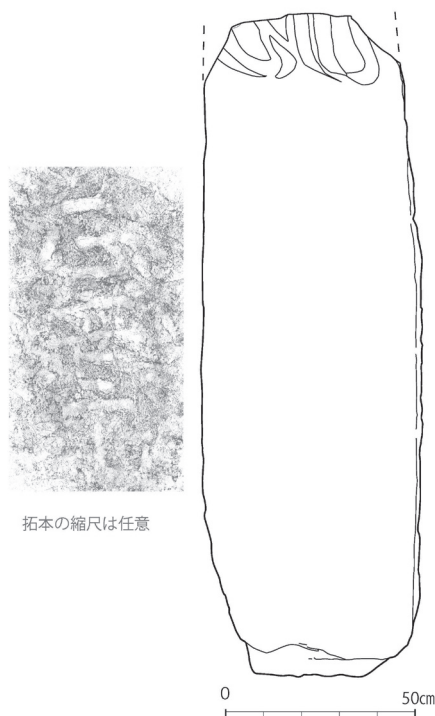


図3 No.1板碑(1:20)

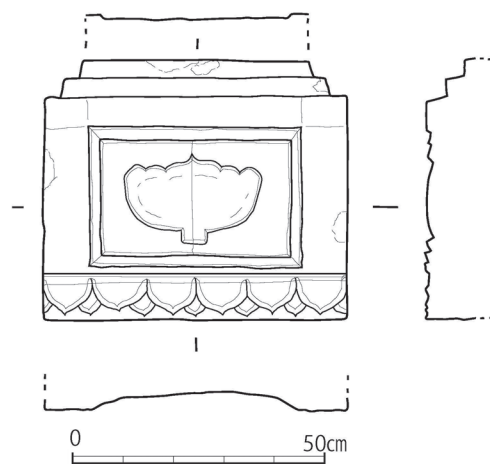


図4 No.2宝篋印塔基礎(1:15)

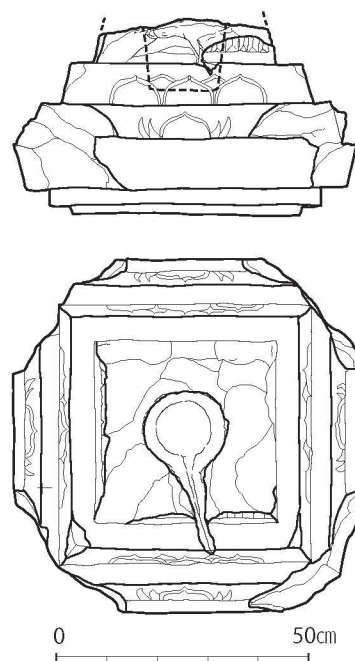


図5 No.3宝篋印塔笠部(1:15)

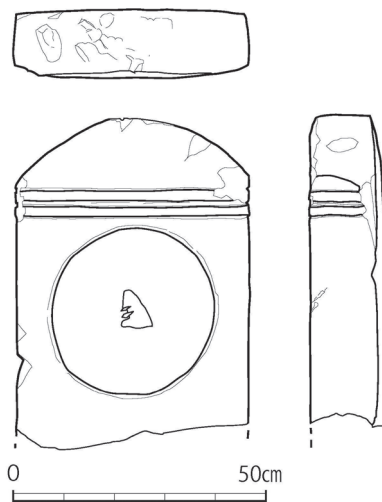


図6 No.6板碑頭部(1:15)

を陽刻で造る。頂部先端にノミ痕が明瞭にはいり、意図的に削られているようである。

もう一基は碑全体が正面を下にして埋もれていたものである（No.7. 図7）が、長さ150cmほど、幅は45cm前後である。額部は突出せず、二条の切り込みはかなり離れ側面まで彫られている。全体に表面の剥離が激しく、本来の研磨面をほとんど残さない。この二基の板碑は原田昭一氏の研究に照らせば、16世紀代の作品で、ともに後半から末の例と考えられる⁽⁵⁾。

以上がクルスバ遺構の周辺斜面およびその延長にあたる場所で見つかった石造物である。宝篋印塔と板碑からなり、いずれも当初の造立位置から移動し、部材が離れ離



写真4 No.8 台石

れに放置されるとともに、人為的な破壊の痕跡と推定される損壊状況を示す例も多い。

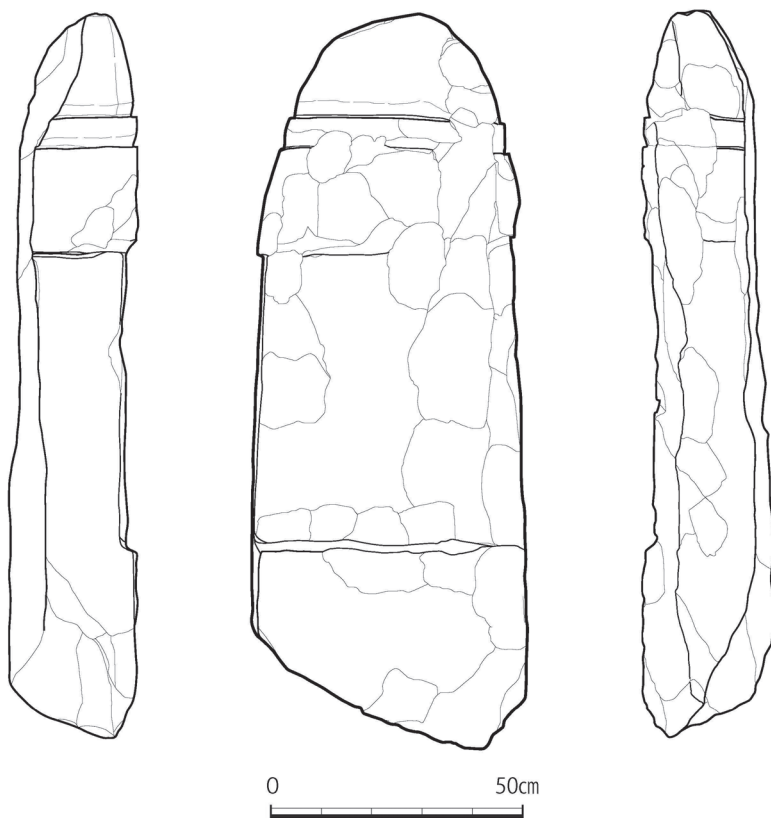


図7 No.7 板碑 (1:15)

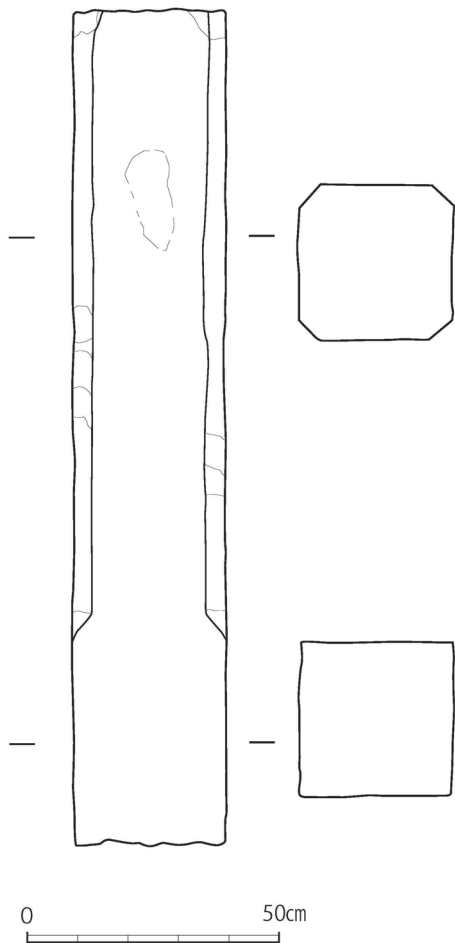


図8 No.9 石柱状石造物 (1:15)



写真5 No.13 板碑



写真6 No.10 伏碑状石造物

平坦面にはまずおよそ120cm四方の大型の方形の整形された一枚石がある（No.8:写真4）。大きさからみて南側斜面の大型宝篋印塔の台石と考えられる。

その北側に石柱状の断面方形で長さ165cmの石造物がある（No.9. 図8）。一辺36cm。途中から四隅の角を削って平面を作りだしている。それに対応するように北側に並行に二本の石材を継ぎ足したように並べた石材がある。周囲には五輪塔の水輪が数点（No.15～16）散在している。

さらにその付近には燈籠の中台のような破片（No.14）があるほか、14世紀代の一部損壊した板碑（No.13:写真5）が残存していたが、完全に地表面に露出しているので、本来の位置は不明である。

平坦面の中央にはキリシタン墓碑にあたる可能性の高い扁平伏碑状の石材（No.10. 写真6）や小型の伏碑が数基以上顔を出しており、墓の上部構造物にあたる下藤キリシタン墓地と同一形式の石組み遺構（No.11:写真2）が複数存在することも判明した。

そのなかで伏碑の破片と考えていた石材を計測のため起こしたところ、下

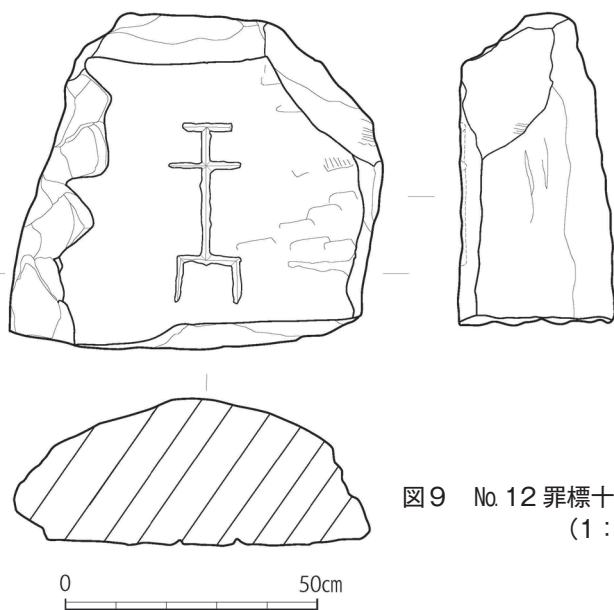


図9 No. 12 罪標十字架
(1:15)

面から薬研彫りで陰刻された罪標十字とその下に台形のカリワリオ（ゴルゴダの丘）を接続した彫出十字架を発見した（No.12：写真7、図9、巻頭図版1上）。一見下部が欠失しているように見えるが、十字架の彫られた位置が中央にあるので、この形を前提に十字架が彫刻されている。高さ66cm、幅70cm、厚さ30センチほどの硬質の凝灰岩を用い側面と背面は荒割の状態で、細かい調整はない。正面はチョウナで平坦に削り出すが、研磨や細かい調整はなく未完成のような印象をあたえる。その正面に罪標十字架が線刻されている。罪標の幅は8cm、その中央から下に伸びる縦木の長さは26.5cm、横木は幅14センチで、罪標から8.5cmの所で交わる。交点から左は8cm、右は6cmと中央ではない。カリワリオは横

表2 西寒田クルスバ石造物一覧表

No.	形式	部位	石材	寸法 (cm)			銘文等	現状	損壊状況	備考
				高さないし長さ	幅	厚さないし奥行				
1	板碑	—	凝灰岩	174以上	52~58	不明 (埋没による)	「正安二」 キリーク	北側斜面に横 倒しに放置。	頭部欠失、表 面剥離激しい。	1300年、頭部正面にキリーク (実測：田中・拓本・松浦)
2	宝篋印塔	基礎	凝灰岩	51	62	62	なし	南斜面に放置	完存	1380~1400年製作の玄正系宝篋印塔 (実測：松浦)
3	宝篋印塔	笠	凝灰岩	39以上	68	70	なし	南斜面に放置	隅飾り欠失、 露盤損壊	1380~1400年製作の玄正系宝篋印塔 (実測：千原、田中)
4	宝篋印塔	基礎	凝灰岩	30	49以上	20以上	—	南斜面に放置	半壊	格狭間あり (実測：千原)
5A	宝篋印塔	塔身	凝灰岩	38	31	29	なし	遺構外	完存	上部に納入孔 (実測：千原)
5B	宝篋印塔	塔身	凝灰岩	39	29	32	なし	遺構外	完存	上部に納入孔 (実測：千原)
6	板碑	—	凝灰岩	65以上	46	11~15	不明	南斜面に放置	下半欠失	16世紀後半~末製作。頭頂部と月輪 中央にノミ痕あり。(実測：宮木)
7	板碑	—	凝灰岩	145	53~54	23~25	不明	南斜面に放置	表面剥離激しい。	16世紀後半~末製作。頭頂部と月輪 中央にノミ痕あり。(実測：田中)
8	不明	台石	凝灰岩	16	120	120	なし	平坦面に放置	完存	宝篋印塔の台石か。(実測：田中)
9	方柱状石 造物	竿?	凝灰岩	164	31	31	—	平坦面中央に 横位に置く。	完存	上部124cmは四隅を落としている。 (実測：田中)
10	伏碑?	—	凝灰岩	30以上	119以上	65	—	平坦面北東部 に放置	半折れ	立碑の可能性もある。(実測：田中)
11	石組遺構	—	凝灰岩	—	80以上	120以上	—	平坦面中央に 設置	一部抜き取り	内部に小円礫散在 (未実測)
12	十字架碑	—	凝灰岩	66	70	30	罪標十字架	平坦面北東部に 正面を下に放置	完存	十字架にはカリワリオの表現あり。 (実測：田中)
13	板碑	—	凝灰岩	77以上	28~33	額部26、 下部23	バン・アーン ク・アン?	平坦面北東部に 正面を下に放置	頭部と基部が 欠失	(実測：権丈)
14	不明	中台?	凝灰岩	22以上	54以上	34以上	—	平坦面に放置	半壊	上下に方形の凹部がある。(実測：崎谷)
15	五輪塔	水輪	凝灰岩	24	28	28	なし	平坦面に放置	完存	16世紀 (実測：村田、鮎川)
16	五輪塔	水輪	凝灰岩	12以上	30	30	—	平坦面に放置	下半欠失	16世紀 (実測：田中)
17	五輪塔	水輪	凝灰岩	20	30	32	なし	平坦面に放置	一部欠失	16世紀 (実測：田中)

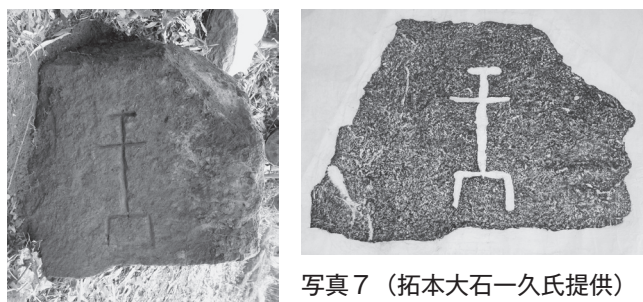


写真7 (拓本大石一久氏提供)

線11cm、縦線はともに8cmである。表面がやや凹凸があるので一見稚拙に見えるが、薬研の底線は直線で丁寧に彫られている。

十字架はラテン十字で、罪標とカリワリオが表現され線刻の末端に装飾がない森脇あけみ分類のI-E1類にあたる⁽⁶⁾。カリワリオの表現のある十字架は九州のみに分布することが森脇氏によって指摘されており、新たに一例を加えることになった。銘文がなくこれまで知られているキリシタン墓碑の型式に類品がなく、あえて分類すれば、自然石立碑にあたるが、十字架碑と墓碑の両面から検討されるべきであろう。

以上の石造物はいずれも凝灰岩製である。斜面に放置された板碑・宝篋印塔の多くは故意に破壊あるいは削り取られた痕跡がある。いっぽう平坦面にのこされた石造物には顕著な破壊の痕跡はなく、そのなかにキリシタン十字架碑と石組遺構の墓地が残されている。

- (4) 原田昭一2005「中世における石造物流通の様相」『日引』
7 石造物研究会
(5) 原田昭一2004「板碑変遷史」『古文化談叢』51 九州古文化
研究会
(6) 森脇あけみ2012「石の十字架」『日本キリシタン墓碑総覧』
南島原教委

第2節 岡なまこ墓の調査

1 経過

岡なまこ墓と呼ばれる墓地が大分県豊後大野市大野町大字岡^{おか}に所在する。大野川の支流 茜川^{あかね}の南、集落背後の丘陵上に位置する。墓地に多数置かれた長円形の石材が『なまこ』のかたちに似ていることからこの名がつき、地元ではキリシタンの墓とつたえられていた。その伝承とその特異な形態から旧大野町時代から史跡に指定され、現在も豊後大野市指定史跡である。しかしこの墓地がキリシタン墓地であるという史料上、考古学上の証拠はなく、キリシタン墓として研究の俎上に上ることはなかったが、墓地内の所在する2基の宝篋印塔は14世紀に豊後国大野郡一帯に分布する石工玄正（玄聖）のデザインを継承する1390年代の頃の作例として紹介されていた⁽¹⁾。

この墓地が注目されたのは2011年4月に行われた臼杵市野津下藤キリシタン墓地の現地説明会の際に、豊後大野市教委の諸岡郁氏が下藤墓地の石組遺構によく似た遺構が、岡なまこ墓のなかに存在するという指摘にはじまる。同年5月25日現地調査を諸岡氏と田中で行い、石組遺構に伏碑をかぶせた墓（15号）を確認し、周囲に20基以上の伏碑が存在することを認めるとともに、宝篋印塔の1基に隅飾りがうしなわれて西寒田クルスバ遺跡の宝篋印塔と同じ破壊を疑わせる痕跡を認めた。石組遺構と多数の伏碑の存在は、キリシタン墓碑そのものや十字架碑などは未発見であるものの、下藤墓地と同一性格のキリシタン時代の墓地であることを示していた。そこで今回旧大野町時代に作成された後藤幹彦・佐藤佑介両氏作成の墓地全体の平面図と豊後大野市合併時の史跡再登録の際の写真の提供をうけて、墓碑および石造物の実測調査をおこなった。

調査は2013年2月11日、7月7・14・22日、8月3日、実測は田中、一瀬勇二（別府大学院生）、竹田奈緒子、久保千明、松浦由佳、宮木貴史、松園菜穂、鮎川和樹、村田仁志、中原彰久、鯨島葵（以上別府大学生）が参加しておこない、トレースは佐藤理恵、北原美希（以上別府大学院生）が行った。調査にあたっては岡地区区長、墓地所有者、豊後大野市教委、高野弘之、諸岡郁、後藤幹彦各機関各個人に協力をえた。

（1）原田昭一2005「中世における石造物流通の一様相」『日引』7
石造物研究会

2 立地と遺構

墓地は、北側に岡の集落を見下ろす尾根上の丘陵頂部に所在し、南側背後に岡集落の産土である岡神社がある。事典類⁽²⁾によれば、墓地の所在する岡村は1593（文禄2）年以来幕末まで中川家岡藩に属し、明治以後大野郡後田村に属す。近世以前は豊後国大野郡井田郷でかつては国衙領であった。17世紀中ごろの正保郷帳によれば、田42石余り、畑36石あまり。村内字

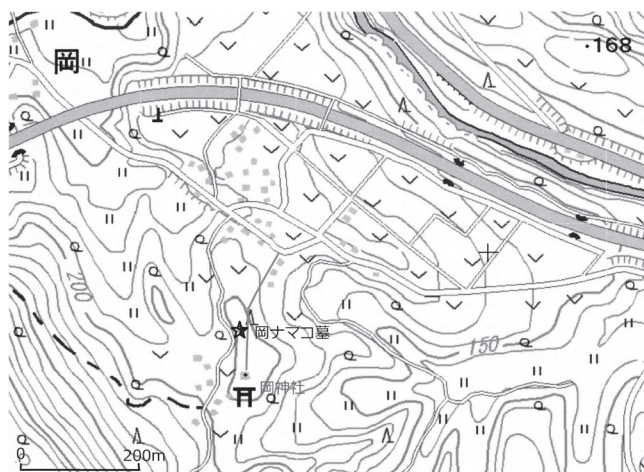


図1 岡なまこ墓の立地（国土地理院2万5千分の1「犬飼」より）

揚弓に所在する岡神社は1728（享保13）年創建で1878（明治11）年岡村神社となる。神社は墓地の南奥にあり、参道が墓地の東に接して集落に下っている（図1）。参道に近い旧家が墓地の所有者の住宅である。岡村の宗教的施設の中心にこの墓地は残されている。ここで注意されるのは岡神社の創建年代である。1728年という記録が正しければ、岡なまこ墓が形成された時代には神社はなかったことになる。

墓地は尾根線に沿って南北20m東西8mほどの長方形の区画をやや掘りくぼめて造成している。現状では北西の一角がやや飛び出し、周囲は土堤上にやや高くなっているが、人工的な造成か、墓前祭祀の経過による堆積なのか不明である。現状では東側に神社参道に連絡する土堤のとざれが存在して入口的に利用されているが、本来の墓域の入口ではない。尾根の緩やかな斜面に位置し南が高く北が低い地形である（図1・2、写真1・2、巻頭図版1下）。

現在墓地には石組遺構に伏碑形墓石をかぶせた墓が1基（15号）、伏碑のみ露出が29基。うち溶結凝灰岩製は2基のみ、残り27基は混礫凝灰岩である。この凝灰岩は風化しやすくもろいため石材として利用される



写真1 岡なまこ墓（豊後大野市提供2007年）



写真2 岡なまこ墓（2011年）

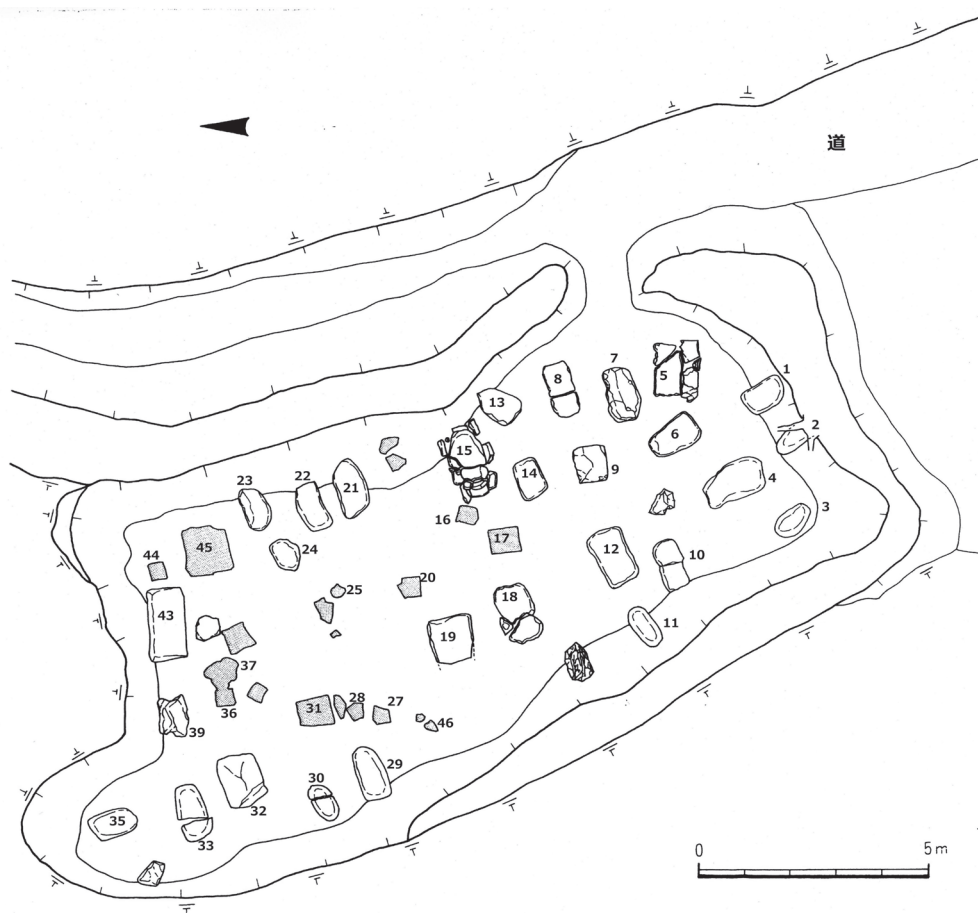


図2 岡なまこ墓 平面図（原図後藤幹彦・佐藤佑介作成、豊後大野市提供）

来小判型の一石であったと考えられる。石材は大半の伏碑と同じく混礫凝灰岩である。伏碑の規模は長さ130cm弱、幅85cm高さ25cmですべて地上に露出している。現状は劣化が進み苔に覆われた状態である。

石組は現状では9個の石材を方形に立てならべたもので、北側面に4石、南側面に3石を縦方向に並べ東西の小口に1石ずつ配置しているが、下半は埋没している、石材は伏碑とは異なり溶結凝灰岩と安山岩の方形石材を用い、中には五輪塔の火輪と地輪が転用されている。その配置は下藤遺跡の石組遺構の神田高士氏による分類のB-3類にあたる⁽³⁾。下藤墓地でも石組遺構の上に伏碑を

ことはほとんどなく、石工に注文した石材と云うよりは、自前で周辺の適地から切り出した可能性がある。

中世石造物は宝篋印塔2基、五輪塔の部材は14点、宝塔の笠1点を見出すことができ、ほかに近世の墓石1基、近代石塔2基が残されている。伏碑は尾根線に対して直交あるいは平行して配置され、直交しておかれるものが多く、墓地の北半中央部には伏碑のない空間がありそこには中世石塔がおおく分布する（図2）。

（2）『大分県の地名』日本歴史地名体系45 1995
平凡社など。

3 伏碑ほかキリシタン墓関係遺構

15号墓 まずこの墓地がキリシタン墓地であることを示唆する15号墓を報告する。この遺構は墓地中央に東寄りに尾根に直交しておおよそ東西方向に設けられた石組遺構の上に小判型の長円形伏碑をかぶせたものである（写真3・4、図3）。石組遺構は長さ150cm、幅100cmの方形に配置されている。

伏碑部分は現在6片に割れているが、本

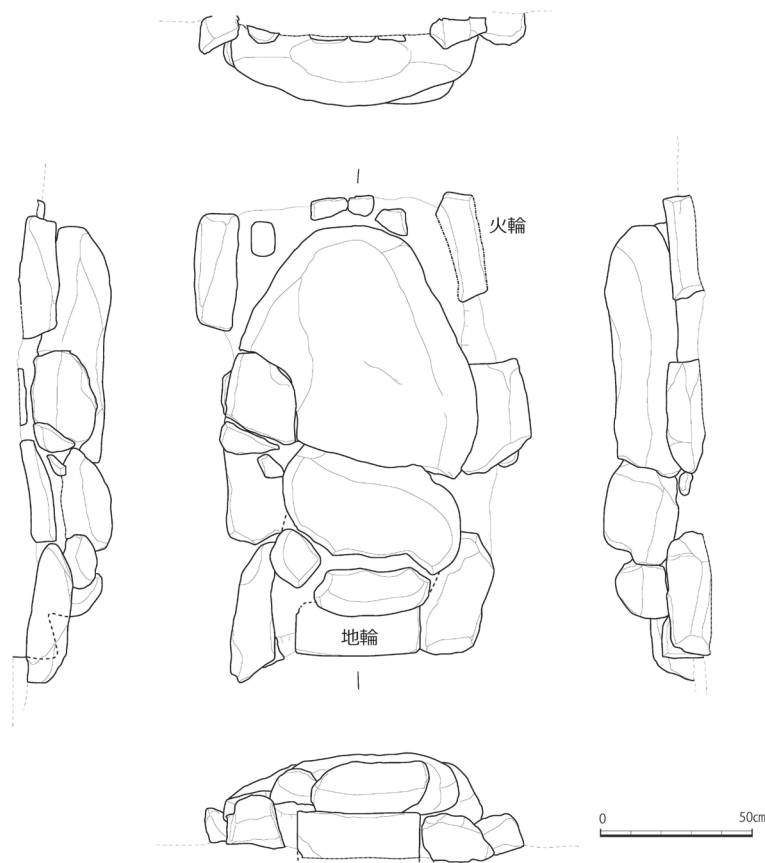


図3 岡なまこ墓 15号墓（1：25）下＝西



写真3 15号墓



写真4 15号墓

かぶせた墓碑の一群が見つかり、同一形式の遺構と判断できることからキリシタン墓であると考えられる。

伏碑（表1） 15号墓を含めて29基の伏碑を確認した。石材を見ると、27基が15号墓の伏碑と同じ混礫凝灰岩で苔に覆われている。2基は中世の石造物と同じ

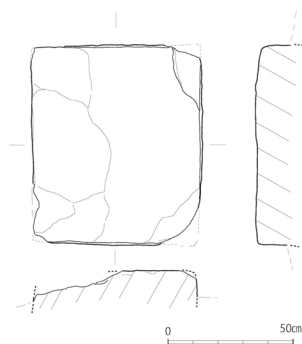


図4 I式 9号 (1:30)

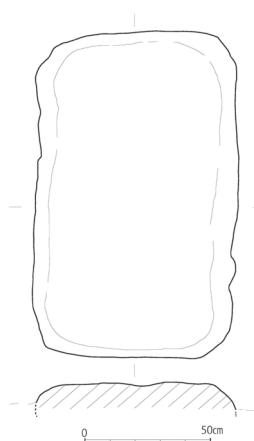


図5 II式 12号

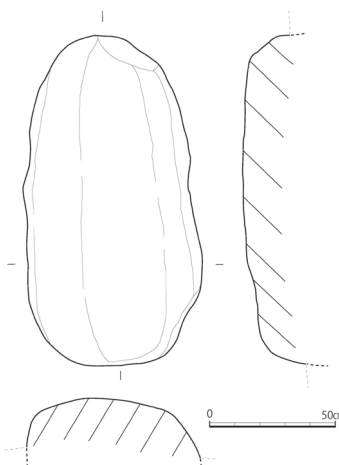


図6 III式 7号

溶結凝灰岩である。伏碑の形態属性としてその小口の平面形から長円形のA類と方形のB類に大別される。断面形は緩い半円形の1類と台形の2類にわけられ、それをもとに分類するとB-2類（7例）とA-2類（4例）さらにB-1類（1例）、A-1類（12例）、AB-1類⁽⁴⁾（1例）、埋没のため形態不明4基になる。これを型式にまとめると長方形の溶結凝灰岩を用いるB-2類の2例をI式（図4）、隅丸長方形で断面は台形のB-2類5例をII式（図5）、平面小判形だが断面が台形のA-2類4例をII亜式、平面が小判形で断面が半円形のA-1類12例をIII式（図6）、断面が半円形のB-1類1例とAB-1類1例の2例をIII亜式とする。

墓群の構成（図2）長方形あるいはなまこ形の長円形の伏碑の配置が地下の棺の方向を反映しているとすれば、岡なまこ墓では、墓のほとんどは尾根に直交し、東西方向に埋葬されたことになる。一方尾根線に平行して南北方向に配列される伏碑が墓地の北端と南端で

見ることができる。これらの中にはいずれも2～3基ほどが側面を並行させて配列する墓群の存在が見て取れる。このような配列は、筆者が側方列状配置をよんでキリシタン布教期の墓地の特徴と同一である⁽⁵⁾。この点からも岡なまこ墓をキリシタン墓地と考える証拠となろう。

墓群の変遷と年代 個別の墓の年代を判定する直接的な手掛

かりはないが、墓地の変遷については、墓域の中心部にI・II式が多く配列され、周辺部にIII式が多いという伏碑の分布状態から考えて、平面長方形で台形断面のIないしII式の伏碑がはじめ使われ、その後平面小判形断面半円形の「なまこ」形のIII式に伏碑は変化したものと推定され、石組を伴う15号墓はIII式の時期に

構築されたものと推定される。15号墓の年代は石組遺構に転用された五輪塔の火輪が16世紀の新しい型式であるから、それより新しく、下藤墓地で同類の石組が使われる確実な年代である17世紀前葉

に平行するものと推定される。伏碑を使用したキリシタン墓地としては、17世紀前葉という年代の前後を含む期間といえるが、その上限と下限を推定するてがかりは今のところない。

- (3) 神田高士2012「下藤地区共有墓地の発掘調査と16・17世紀のキリシタン墓地」『大分県地方史』214 大分県地方史研究会
- (4) 小口の方が長円形のA類だが反対の小口は隅丸方形になる29号をAB類とした。
- (5) 田中裕介2012「キリシタン墓地の構造」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』

4 中世石塔および近世墓碑ほか（表1）

岡なまこ墓には、14世紀にさかのぼる宝篋印塔2基、16世紀代のキリシタン墓地に先立つ石塔群（五輪塔・宝塔）、近世墓1基と近代の石塔2基がある。このうち当初の位置から移動していないと考えられるのは17号の近世墓と44号の近代石塔のみで、そのほかは石塔の部材が散乱あるいは基筒^{こけ}合わせで積み重なった状態

であり、本来の位置は不明である。そこで代表的な石造物を紹介する

1390年代の宝篋印塔 42号は宝篋印塔の笠と塔身である(図7、写真5)。45号は基礎と基壇である(図8、写真6)。42号と45号は塔身と基礎の寸法が合わない
ので同一個体ではない。いずれも溶結凝灰岩製である。原田昭一の研究⁽¹⁾をによれば、「玄正(玄聖)系宝篋印塔」の最末期の作例で1390年代の製品にあたる。詳細は原田の論文に譲るが、付け加えることがあるとすれば、42号の笠の隅飾り突起が4カ所とも破損していることである。ほかの部位には目立つ破損はない。隅飾り突起の欠失は第1節でもふれた西寒田クルスバ遺

跡3号宝篋印塔でも認められる、単なる偶然とは思われず、何らかの作法に従った破壊痕の可能性を指摘しておきたい。また45号の基礎側面上部に「西原村」の銘文を確認した。造立と当初の銘かどう
か確認できないが、風化の度合いからみて最近のものではない。西原村は岡村の南方向の大野川本流南岸に位置する近世村で、三重荘のうち臼杵藩領にあたる

16世紀の石塔 宝塔の笠1点(37号)と宝塔基壇の可能性のある1点(31号下)以外は五輪塔の部材である。内訳は空風輪1点(42号上)、火輪は15号墓の石組遺構に転用されているものを含めて6点、水輪1点、地輪は15号墓に転用されているものを含めて5点

である。いずれも大野郡内で産出する阿蘇溶結凝灰岩製で、小型で扁平化しており16世紀の作と推定される。

近世近代の石塔 近世の仏教的墓石は17号の板碑形墓石が唯一の例である。その銘から1803年の死者の墓石である。被葬者は成人男性で、墓地の所有者の先祖であると伺った。近代の石塔は44号と45号の上に置かれた碑である。

5 まとめ

今回の石造物実測調査による成果をまとめると次のようになる。第1は15号墓のように臼杵市野津下藤キリシタン墓地の発見された石組遺構と同一の様式の遺構が存在することが判明した。中世石塔の部材の転用や配置の方法も含めて酷似する。さらにその上に粗製の伏碑が置かれていることから、この墓がこの地域のキリシタン墓の一形式にあたることは疑いない。

第2に伏碑のみの墓群からなり、側面を並行させながら一定の方向に配列されている墓群構成を看取できる。この点は戦国末期から江戸時代初頭のキリシタン墓地の特徴と共通しており、岡墓地が全体としてキリシタン墓地であったことを示している。

第3に、キリシタン墓地以前にこの場所には14世紀末にさかのぼる宝篋印塔や16世紀の石塔

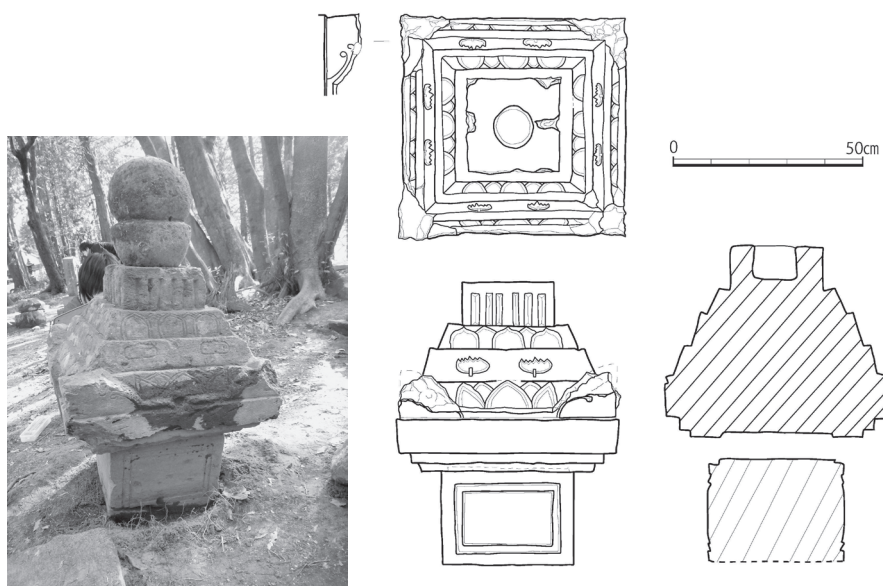


図7 42号宝篋印塔(1:20)



写真5 42号

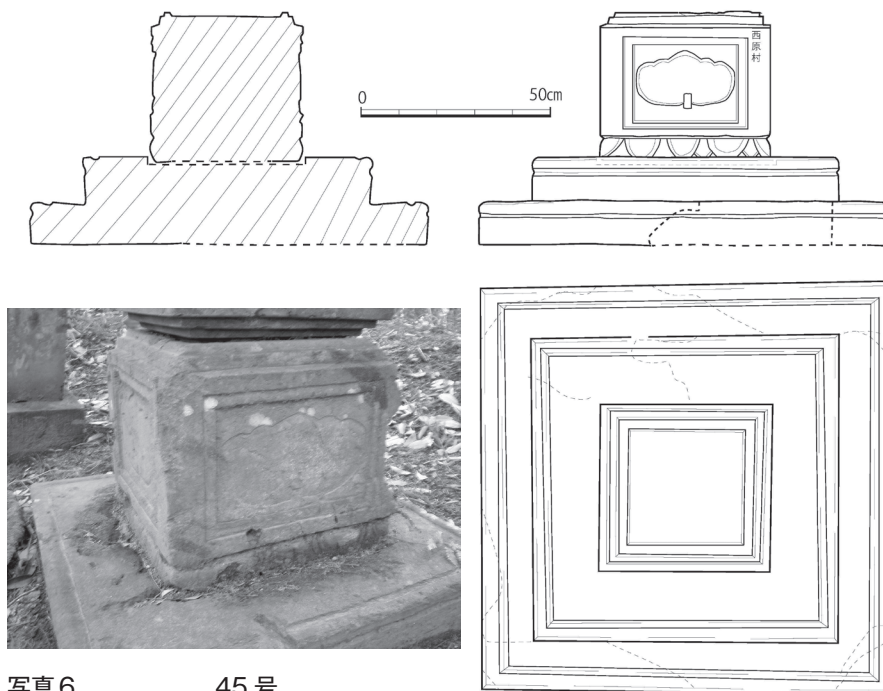


図8 45号宝篋印塔(1:20)



写真6 45号

群が奉献され、この場所が岡集落の宗教的聖地であったことをうかがわせる。その中心となる宝篋印塔に残る隅飾りの欠失を破壊痕と認めてよければ、岡墓地がキリシタン墓地に転換した際に、それまでの石造物を

破壊ないし廃棄したと解釈できる。

以上岡なまこ墓の実測調査の概要を報告した、今回は実測した石造物の一部を速報したにとどまる。あらためて詳細な報告をまとめたい。

表1 岡なまこ墓石造物一覧

No.	形式	属性	型式	石材	寸法 (cm)			銘文等	方向 尾根に対して	現状	損壊状況	備考
					長さ	幅	高さ					
1	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	92以上	66	13以上	なし	平行	半ば埋没	—	(実測：千原)
2	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	—	—	—	—	平行	埋没	—	未実測
3	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	91	59以上	10以上	なし	平行	半ば埋没	—	(実測：松園)
4	伏碑	B-2	Ⅱ式	混礫凝灰岩	135	78	15以上	なし	平行	—	—	(実測：中原、松園)
5	伏碑？	B-2	Ⅰ式	溶結凝灰岩	125以上	100	11以上	なし	直交	—	6片に割れる	台石？ (実測：田中)
6	伏碑	A-2	Ⅱ亜式	混礫凝灰岩	116	68	15以上	なし	平行	—	—	(実測：千原)
7	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	131	69	20以上	なし	直交	—	—	(実測：竹田)
8	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	133	64	25	なし	直交	—	2片に割れる	(実測：一瀬)
9	伏碑？	B-2	Ⅰ式	溶結凝灰岩	80	68	15以上	なし	直交	—	剥離激しい	台石？ (実測：一瀬、松園)
10	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	81	61	9以上	なし	直交	—	2片に割れる	(実測：村田、中原)
11	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	—	—	—	—	直交	埋没	—	未実測
12	伏碑	B-2	Ⅱ式	混礫凝灰岩	130	79	15以上	なし	直交	—	—	(実測：竹田、鮫島)
13	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	102	61	20以上	なし	斜交	—	—	(実測：田中)
14	伏碑	B-2	Ⅱ式	混礫凝灰岩	90	52	15以上	なし	直交	—	—	(実測：田中)
15	石組+伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	150	100	30	なし	直交	—	—	石組には地輪と火輪が使用されている。(実測：田中)
16上	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	39	35	22	なし	—	—	—	16下の上に置かれていた (実測：田中)
16下	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	38	38	27	なし	—	—	—	(実測：田中)
17	近世墓石	—	板碑型	溶結凝灰岩	68	27	20	(正面) 幽嶽宗林信士 (右側面) 享和三癸亥天四月十七日 (左側面) 大神朝臣芦刈薩摩守惟清十六代孫 芦刈左右門大神惟森			—	1803年銘 台石二段総高100cm (実測：村田)
18	伏碑	A-2	Ⅱ亜式	混礫凝灰岩	134	80	20以上	なし	直交	—	3片に割れる。	(実測：田中)
19	伏碑	B-2	Ⅱ式	混礫凝灰岩	85以上	90	18以上	なし	直交	半ば埋没	—	(実測：田中)
20上	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	30	30	25	なし	—	—	—	20下の上に置かれていた (実測：田中)
20下	五輪塔	地輪？	—	溶結凝灰岩	41	41	13以上	10以上	10以上	10以上	—	台石？ (実測：田中)
21	伏碑	A-2	Ⅱ亜式	混礫凝灰岩	120	77	15以上	なし	直交	—	—	(実測：鮎川、田中)
22	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	120	67	13以上	なし	直交	半ば埋没	—	(実測：千原)
23	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	96以上	53	20以上	なし	直交	東端埋没	—	(実測：田中)
24	伏碑	A-2	Ⅱ亜式	混礫凝灰岩	80	58	10以上	なし	直交	—	—	(実測：竹田、鮫島、田中)
25	五輪塔	水輪	—	溶結凝灰岩	31	31	10以上	なし	—	—	上下欠失	(実測：田中)
26	(欠番)											
27	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	40	33以上	22	なし	—	—	周囲欠失	(実測：田中)
28	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	40	38	22	なし	—	—	一部欠失	(実測：田中)
29	伏碑	AB-1	Ⅲ亜式	混礫凝灰岩	130	76	12以上	なし	直交	半ば埋没	—	(実測：千原)
30	伏碑	A-1	Ⅲ式	混礫凝灰岩	—	—	—	—	直交	埋没	—	未実測
31上	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	37	36	23	なし	—	—	—	3つの部材が基筒合わせて置かれる。二段一石 (実測：久保)
31中	五輪塔	地輪	—	溶結凝灰岩	38	37	25	なし	—	—	—	(実測：久保)
31下	宝塔？	基壇	—	溶結凝灰岩	69	69	15	なし	—	—	一部欠失	(実測：久保)
32	伏碑	B-1	Ⅲ亜式	混礫凝灰岩	123	94	15以上	なし	直交	—	—	(実測：久保)
33	伏碑	—	—	混礫凝灰岩	—	—	—	—	直交	埋没	—	未実測
34	(欠番)											埋没して確認できず
35	伏碑	—	—	混礫凝灰岩	—	—	—	—	平行	埋没	—	未実測
36	五輪塔	火輪	—	溶結凝灰岩	38	38	25以上	なし	—	—	一部欠失	(実測：宮木、田中)
37	宝塔	笠	—	溶結凝灰岩	41	36	24	なし	—	—	一部欠失	(実測：鮎川)
38	(欠番)											
39	伏碑	—	—	混礫凝灰岩	—	—	—	—	直交	埋没	—	未実測
40	(欠番)											
41	(欠番)											
42上	五輪塔	空風輪	—	溶結凝灰岩	22	22	36	なし	—	—	—	(実測：田中)
42	宝篋印塔	笠	玄正系 塔身	溶結凝灰岩	59	59	50	なし	—	—	隅飾り欠失	故意の破壊か？原田2005の岡神社1号宝篋印塔 1400年頃製作 (実測：松浦)
		塔身		溶結凝灰岩	36	36	26	なし	—	—	—	
43	伏碑	B-2	Ⅱ式	混礫凝灰岩	162	85	17以上	なし	直交	半ば埋没	—	(実測：竹田)
44	近代石塔	—		溶結凝灰岩				なし	—	—	—	未実測
45上	近代石塔	—		溶結凝灰岩	40	40	86	(正面) 薩摩之神	—	—	—	3石からなる (実測：宮木)
45	宝篋印塔	基礎	玄正系 基壇	溶結凝灰岩	45	44	39	西原村	—	—	—	原田2005の岡神社2号宝篋印塔 1390年代製作 (実測：宮木)
		基壇		溶結凝灰岩	108	105	23	なし	—	—	—	
46	伏碑	—	—	混礫凝灰岩	—	—	—	—	直交	埋没	—	未実測

第2章 唐人墓地の調査

序節 唐人墓について

田中 裕介

中世博多に唐人街が形成されて以来、中国の海商が列島に居住した歴史は長く、彼らが日本に伝えた石造物は宋風獅子や「薩摩塔」として知られている。しかし彼らの墓地は今日まだ知られていない。唐人の墓地が知られるようになるのは近世になってからである。

唐人墓の特徴 明末に列島に渡来居住した唐人の墓の特徴は、①方首あるいは円首の立碑形式の石製墓碑を墳丘の前に建てること。碑文に「～公墓」などの名称を用い出身地を記載することが多い。②墓碑の背後には墳丘をつくり、それが石製の蓋石（円形、長円形あるいは方形）に変化する場合もある。③墓碑の両側には波打ち形の墓耳あるいはそれが退化した脇石をそなえる。④墳丘の周りには半円形あるいは馬蹄形の土手あるいは石垣をめぐる外周施設を設ける。⑤墓碑の前には供物台をおいたり、石段及びコの字形の石垣で囲った前庭を作り、その周りを側壁で囲う。それを図示すると図1のようになり、各部位の呼称はさまざまであるが、さしあたり表1のように整理した。

以上の形式は土饅頭形の墳丘とその前面への立碑（ときに供物台を置く）のみからなる華北の墓地様式とは異なる中国華南地方の墓地様式⁽¹⁾の影響を強く受けている。華南様式の特徴は墓碑と蓋石の背と周囲に半円形・馬蹄形の区画を構築し、前面に方形の前庭と側壁を設ける④と⑤の点にあり、さらに墳丘の代わ

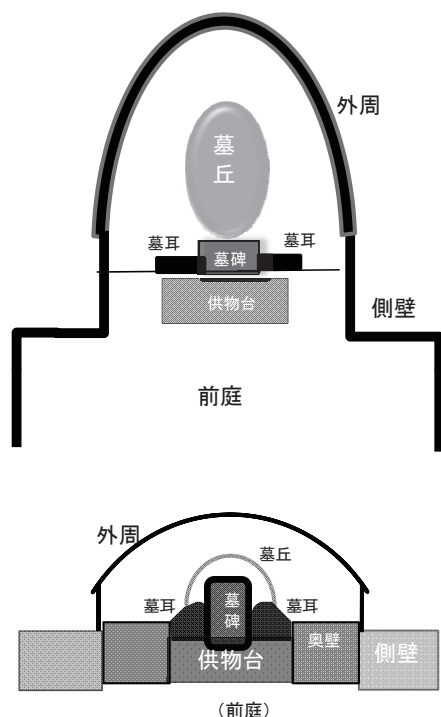


図1 華南様式の唐人墓形態と部位呼称

りに蓋石を置き、時には蓋石を漆喰でつくる点にある。さらに墓碑の両脇の波形の造形をもつ墓耳も特徴である。以上の②～⑤の特徴は華南様式の墓地を判別する指標である。いっぽうキリシタン墓碑との関連で問題となるのは①の墓碑と②の墓碑背後の蓋石である。

琉球の亀甲墓のみならず九州の唐人墓が、以上に整理したような華南様式に由来することは、長崎の墓地については坂井隆⁽²⁾、熊本玉名の墓地については中島楽章⁽³⁾によってすでに指摘されているが、戦国時代1540年代以来日本列島に現れた唐人の出身地が福建省を中心とする点と日本に伝播した唐人墓が華南様式であることとはよく符合する。そこでそれらの墓地を構造物として考古学的に比較して華南様式の墓地の列島への伝播過程を明らかにするために熊本県・長崎県の年代の指標となる唐人墓地の実測調査と、全国的な資料の集成作業をおこなった。

唐人墓の系譜 ところで列島所在の華南様式の唐人墓には大きく四つの由来がある。第1は明末に渡来し唐人町を形成した中国人海商の墓地で、1630年代の長崎集住まで九州各地の唐人町の付近に造られた唐人墓である⁽²⁾。長崎市稲佐悟真寺墓地、長崎市深堀の菩提寺墓地、熊本県玉名市伊倉とその周辺の唐人墓、鹿児島県南さつま市坊津泊唐人墓があげられる。これらの唐人墓地の系譜は、さらに長崎市内の福済寺、興福寺（三江系）、崇福寺（福州系）などの唐寺の墓地さらに唐通事の墓地へと連なっている。

第2は1660年代以後に渡来した黄檗宗の中国人僧侶とその系譜を持つ墓地である。黄檗宗は華南に成立し、中国人僧侶の出身地も華南様式の墓地の分布域と重なる。長崎では崇福寺など重なっていく。各地にひろがった黄檗宗の中でも本山である京都府宇治万福寺の1世隠元（1663年の寿墓）、2世木庵（1675年寿墓）、4世獨湛墓（1705年没）は大規模なものであり、同様な様式をよくとどめるものに岡山県津山市千年寺2世鐵道

表1 華南様式の墓地の部位名称

部位の説明	中国亀穀墓	琉球亀甲墓	九州の唐人墓	呼称案
碑文のある中央の立碑	墓碑	(なし) *1	墓碑、墓誌石	墓碑
立碑の両脇に据える曲面のある脇石	墓耳	(なし)	脇石	墓耳
墓碑背後の墳丘状の土盛りあるいは蓋石	墓堆・墓亀・墓墳・墓土	甲	蓋石	墓丘
墓碑の前のテーブル石	墓桌	(なし)	供物台・祭壇	供物台
墳丘背後の半円形の区画施設	墓垣・墓山・砂手、墓廬	屋形まわり	馬蹄形の囲い・石壁	外周
墓碑前面の広場：礼拝空間	墓庭	墓庭	前庭・(墓庭)	前庭
前庭を取り囲む方形で左右にL字と逆L字の屈折を持つ。	墓手	袖石	側壁	側壁

*1 那覇市上原墓は例外的に墓碑が墓丘に据えられている。

以下の文献を参考にして作成した。

中国亀穀墓：①周星（何彬・小熊誠訳）1996「椅子墳と亀穀墓」『南島文化』18 沖縄国際大学南島文化研究所 ②中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館
琉球亀甲墓：福島駿介2007「建築学から見た銘古墓群」『銘古墓群 重要遺跡確認調査報告書』那覇市教育委員会
九州の唐人墓：①坂井隆1996「港市長崎の考古学」『東南アジア考古学』16 東南アジア考古学会 ②坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」『九州考古学』76 九州考古学会

和尚墓（1702年銘）があり、渡来唐人僧のみならず日本人弟子の墓にも華南様式が用いられている。

第3は儒教を信奉した大名や儒者の墓地に見られるもので豊後岡藩藩主墓地（大船山墓地1660年代と小富士山墓地など）や京都市嵯峨二尊院墓地の伊藤仁斎（1705年没）・東涯（1736年没）・香川修庵（1755年没）の墓地に見ることができる⁽⁴⁾。いずれも墓碑の周囲と背後に半円形ないし馬蹄形の外周石垣と長円形あるいは跳び箱形の石塚ないし砂盛をもつ華南様式の唐人墓の形態を模倣している。

第4は沖縄県本島に主に分布する「亀甲墓」である。九州や日本本土とは別個に伝播したものであるが、初現は1680年代で、九州の唐人墓や黄檗宗の墓地よりやや新しく伝わっている。沖縄の亀甲墓が、中国福建の墓地を類似することは19世紀から20世紀の初めのヨーロッパ人研究者の指摘から始まり、現在では年代観や変遷と階層性が議論されている⁽⁵⁾。その中で例外的に那覇市上原墓（写真1）のみは1529（嘉靖8）年に



写真1 沖縄 上原墓
（亀甲墓の上部にはめ込まれる）

に没した琉球王国の三司官である沢岷親方の墓で、亀甲墓の破風上部にはめ込まれたようにおかれた墓碑は、1525（嘉靖4）年に生前尚真王からたまわった寿墓であることがわかってお

り、当時の福建の墓碑の型式をよく伝える優品である⁽⁶⁾。

以上、今回の調査で筆者らが把握した華南様式の墓地を表2に、その分布を図2に示す。

- (1) 中国における南北の墓地の違いと、浙江省・福建省・広東省を中心に分布する特異な墓地については以下の文献から学んだ。また以上の墓は地域によって形式がことになっており、浙江省では「椅子墳」、福建省や台湾では「亀殻墓」、琉球では「亀甲墓」呼ばれており、ここでは華南様式の墓地、文脈によっては唐人墓と呼ぶ。

何彬1995『江浙漢族喪葬文化』中央民族大学出版（北京）

周星（何彬・小熊誠訳）1996『椅子墳と亀殻墓』『南島文化』

18 沖縄国際大学南島文化研究所

また亀殻墓については19世紀末のオランダの東洋学者デ・ホロートが、福建省南部の墓地として報告している（『中国の宗教制度』第3巻）が、今回の調査ではホロートの研究まで及んでおらず、さしあたり華北との対比のうえで、華南様式の墓地と呼んでおきたい。

- (2) 坂井隆1996『港市長崎の考古学』『東南アジア考古学』16 東南アジア考古学会
坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」『九州考古学』76 九州考古学会
- (3) 中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館
- (4) 松原典明2012『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣 松原氏の研究は、中国明代の朱子家礼に基づく儒教墓制の日本への影響を考古学的に検討した初めての業績である。多くは華北の墓地様式を観念的な祖形とするが、華南様式の墓地の影響も認められる。
- (5) 福島駿介ほか2007『銘苅古墓群』（那覇市文化財調査報告72）那覇市教委
沖縄考古学会編2013『琉球近世墓の考古学』2013年度研究発表会資料
- (6) 瀬戸哲也2011「中世後期の琉球における仏教事情」『博多研究会誌』20周年記念特別号 博多研究会

表2 日本における華南様式の唐人墓一覧

分類	所在地	墓地名	墓名あるいは基数	墓碑銘の年代
第1群 唐人墓	長崎県 長崎市	稲佐悟真寺墓地	300基以上	1627年~現代
		崇福寺墓地	100基以上	1656年~現代
		興福寺墓地	111基以上	1757年~現代
		福濟寺墓地	—	未調査
		聖福寺墓地	—	未調査
		春徳寺墓地	東海の墓	1660~77年造営
		深堀菩提寺墓地	呉三官墓 呉五官墓	1619(元和5)年 1637(寛永14)年
		(西山)	魏之琰墓	1689(元禄2)年没
	熊本県	玉名市伊倉	謝振倉墓	不明
		玉名市天水町	郭濱沂墓 林均吾墓	1619(元和5)年8月 1621(元和7)年
第2群 黄檗宗 僧侶墓	鹿児島県	南さつま市坊津	泊唐人墓	17世紀前葉
	京都府 宇治市	万福寺	開山隠元隆琦塔所 二世木庵性瑫塔所 四世独湛性瑩塔所	1663年寿墓として築造 1680年万寺院開山塔 1692年獅子林院に退隠
	岡山県津山市	千年寺住職墓地	二世鐵道和尚墓	1702年没
	大分県 竹田市	岡藩大船山藩主墓地	中川井津墓 中川清八墓 中川久清墓	1669年没 1675年没 1681年没
第3群 儒教墓	京都府 京都市	嵯峨二尊院墓地	伊藤仁斎墓 伊藤東涯墓 香川修庵墓	1705年没 1736年没 1755年没
	沖縄県	那覇市上原墓	沢岷親方墓	1525年寿墓
		亀甲墓	県内各地に分布	1687年~

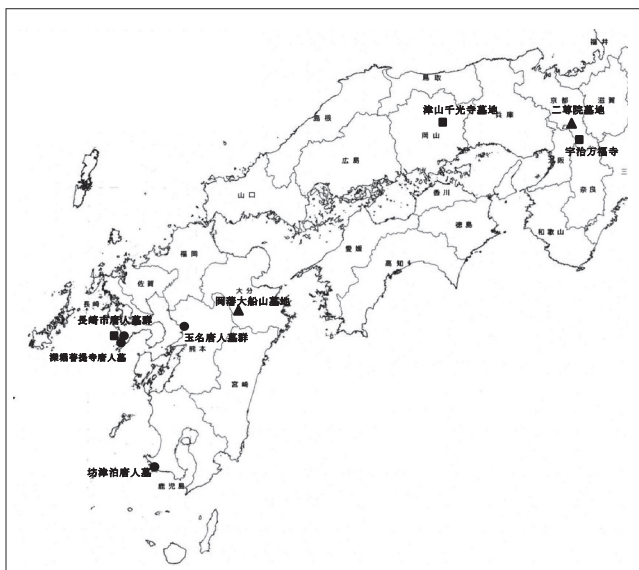


図2 華南様式の墓地の分布（沖縄の亀甲墓を除く）

第1節 長崎市菩提寺の唐人墓

田中 裕介

長崎市深堀に現在2基の唐人墓が現存する。呉三官墓と呉五官墓である。2013年8月25日に調査をおこなったが、豪雨のため実測には至らなかった。調査者は田中、大石、李、三谷、松蘭菜穂、鮫島葵（別府大学生）。菩提寺の御住職ご家族の皆様には調査の御便宜を図っていただいた。感謝します。

深堀は1570年の長崎建設以前から海港として知られていた場所で旧深堀氏領の中心地である。江戸時代には鍋島藩の支藩がおかれ、曹洞宗菩提寺は藩主深堀氏の文字通り菩提寺であった。菩提寺は13世紀中ごろ創建と伝え、鎌倉仏2体が



写真1 菩提寺の呉公位牌

伝わる。墓地には中世の石塔も混じり、現在確認できる最古の石造物は1586（天正14）年銘である。唐人墓2基は菩提寺の境内や墓地の内部ではなく、その端あるいはやや離れて立地している。呉三官墓は小さな谷を見下ろす小規模な尾根の先端に、呉五官墓も海岸に向かって伸びる尾根の先端に造られている。いずれも菩提寺墓地からやや

はなれて風水的選地を行っている。また呉三官、呉五官両名の位牌が菩提寺の本堂におさめられている（写真1）。位牌の正面には上位に「大明呉公」下位に2行にして左に「三官慧林芳智禪定門」右に「五官統室淨連居士」とあり、左行は呉三官墓の墓碑銘と一致する。位牌の背面には「士寛永十四年六月十九日」とあり、呉五官の忌日と推定される。深堀唐人墓については、坂井隆の紹介と研究⁽¹⁾がある。氏の所見を含めて紹介する。

1 呉三官墓

現在の菩提寺墓地の片隅に所在する。



写真2 呉三官墓

台石の上に墓碑のみが現存する。墓碑に柄突起を作って差し込んでいる。背後には墓丘が存在した可能性があるが、現状の位置には墳丘や前庭が存在する余裕がなく、墓碑と付属の石材のみがのちに移動した可能性がある。墓碑は高さ63cm幅49cmの上端の両角を45度に断ち切った隅切方頭立碑である。石材は玉名の唐人墓の石材によく似ており、墓碑下部の雲台の彫刻文様も類似する。中国製あるいは中国石工の手になるものと推定される。墓碑の正面に縁帯を全周させ、その内部に銘文がある。上部右から「長崎」中央に「慧林芳智霊位」右に「故兄権三郎呉君墓」左に「元和五年己未」と記され、1619年に亡くなった長崎に居住する呉三官の墓であったことがわかり、死者には日本風の権三郎と云う名と、仏式の戒名が与えられている。銘文と位牌名から見て坂井氏の指摘するとおり兄の呉三官のために弟の呉五官が建てたものであろう。熊本県玉名伊倉所在の肥後四官墓とならび現存最古の記年銘をもつ唐人墓である。

2 呉五官墓

菩提寺の南門から南にややはなれた低い尾根の先端に作られている。墓地とは離れた位置に単独に選地している。巨大な唐人墓で、両側の墓耳を一体に造り両肩にえぐりに入る二段頂方頭墓碑と背後の石製の亀甲形の蓋石、蓋石の下には平石が方形に敷かれている。それを取り巻く馬蹄形の外周石垣があり、墓碑の前面には供物台がおかれ、前庭は二段の側壁をもち、床も側壁にあわせて2段の階段をもつ。前庭にも石敷きが施されている。墓碑本体には縁帯が全周し、下部には唐草の浮彫がなされている。両側の墓耳正面や供物台の正面にも浮彫文様がある。正面中央に「節川五官墓」とあり、位牌によれば「統室淨連居士」と云う戒名をもち1637（寛永14）年の死去とある。

註（1） 坂井1996、2001前掲



写真3 呉五官墓

第2節 長崎市ごしんじ悟真寺の唐人墓

田中 裕介

1 はじめに

発端 筆者の研究の出発点は、坂井隆氏のキリシタン墓碑と唐人墓の蓋石の類似の指摘にある⁽¹⁾。キリシタン墓の伏碑形墓碑の一形式である切妻屋根形板状伏碑が、長崎市内所在の唐人墓に立つ墓碑の背後におかれた蓋石と石造物としての形態上区別できないこと。それ故、墓碑の中に唐人墓の蓋石が墓碑と遊離した場合キリシタン墓とみなされる可能性がある」と指摘した。その後大石一久氏とともにキリシタン墓碑の全国的な分類を行った際に、この指摘にきづき⁽²⁾唐人墓とキリシタン墓碑の比較研究が必要なことを感じた。

さらにキリシタン墓碑の研究の中で、1917(大正6)年6月に日本国内で初めてキリシタン墓碑が発見されたのは、長崎市悟真寺の半円柱状伏碑であったこと(図1)⁽³⁾、しかしこの墓碑は現在所在を確認できず、悟真寺墓地は出島のオランダ人の墓地、幕末から近代のロシア人イギリス人等の外国人墓地、そして何より長崎最古かつ最大規模の唐人墓地・華僑墓地として知ら

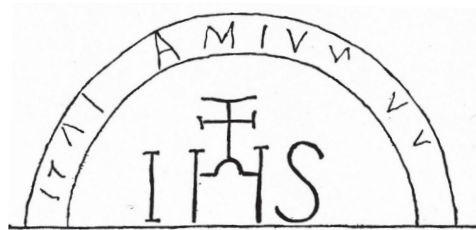


図1 悟真寺のキリシタン墓碑
(新村・浜田 1923 より)

れていた⁽⁴⁾。悟真寺墓地は17世紀前半に開設された長崎唐人墓地の嚆矢であることはすでに知られていた。そこに17世紀初頭のキリシタン墓地が存在しているかどうか、唐人墓碑との関係はどうなっていたのか。その問題に見通しを与えるため、17世紀の唐人墓碑の型式変遷と年代を与えることが重要と考え、17世紀前半の墓地であることが確実な長崎市稲佐悟真寺墓地を調査した。

長崎市内の唐人墓 長崎市内の唐人墓地の分布と全体像を墓地の構造物に注目して考古学的観点から調査した研究として坂井隆氏の研究がある⁽⁵⁾。坂井1996は①まず長崎市街及び郊外の唐人墓地の分布を明らかにした。A長崎外町郊外の中島川流域の春徳寺墓地の東海家墓地、西山墓域の魏之琰墓地。B長崎外町外縁に立地する興福寺、崇福寺、福済寺、皓台寺、C長崎対岸の稲佐悟真寺とその周辺の墓地、さらにD深堀の菩提寺墓碑があり、墓地の分布の状況が明らかになるとともに、いずれも近世仏教寺院の管理の下に置かれていたことに注目した。また墓の形態を、亀甲墓系、蒲鉾型墓形、石塔墓系と分類した。

悟真寺墓地の唐人墓 今回調査した悟真寺墓地はすでに多くの先行研究があり、また長崎在住の華僑の方々の墓地として現在も墳墓の地として関心が高く、今回の調査でも華僑墓地管理委員会の陳東華氏から多くの御教示をえた。

主要な研究を振り返ると、竹内光美・城田征義1990『長崎墓所一覧 悟真寺国際墓地編』は悟真寺墓地の全墓碑の位置を地図に落とし番号づけ、碑文の解読を行う基礎作業をおこない、李献璋1991『長崎唐人の研究』は悟真寺唐人墓地の開設者と伝える欧華字と張敬泉の事績を明らかにした。坂井隆2001「長崎悟真寺の



図2 悟真寺墓地の位置と19世紀初期の長崎町の範囲

唐人墓地」は、それをうけて悟真寺墓地の唐人墓地の変遷を明らかにし、長崎市内各所および東南アジアの唐人墓と比較して、第1期（1627～1688）、第2期（1739～1844）、第3期（1852～現在）に変遷をまとめた。特に第1期の墓が中国風の形式であるにもかかわらず、日本年号を用いること、墓地のなかには外周をもつ華南様式の墓地（坂井は亀甲墓と呼ぶ。）が含まれることを指摘した。

今回の調査はキリシタン墓碑との比較のための基礎資料を作成することを目的として、坂井の第1期の墓地を実測の対象とした（表1）。

唐人墓の実測中、キリシタン墓碑の可能性のある石造物2基（M27とI75）を発見している。かつて京大報告において悟真寺に半円柱形伏碑が存在することが報告されていた。それを合わせて、今回の史料を紹介し、悟真寺にキリシタン墓地が存在したことを推測する。

調査は2012年7月28日に予備調査（大石、田中、三谷、長瀬雅彦）。2013年8月19～24日に実測調査（田中・大石・李・松園）をおこなった。トレースは阿部みゆき（雅企画）に依頼した。猛暑の中17世紀代の銘のある唐人墓碑の実測調査を完了。調査の便宜を図っていただいた悟真寺の皆様と華僑墓地の責任者陳東華氏に特に記して感謝します。

2 悟真寺墓地

長崎市稲佐悟真寺墓地は、長崎市中心部から西の浦上川対岸の稲佐山東麓斜面に位置する（図2）。慶長初年1596年頃筑後国久留米善導寺の僧聖誉玄故が、現在の地に小庵を構えて布教をはじめ、1598（慶長3）年長崎奉行寺沢広高の許可をえて現在の地に終南山悟真寺を創建したと伝える。浄土宗である。この寺院の背後に広がる墓地が悟真寺墓地で、日本人墓地、華僑



図3 悟真寺墓地全図（竹内光美・城田征義 1990『長崎墓所一覧 悟真寺国際墓地編』の付図に加筆）

墓地として現在も使用されている。その中に出島時代以来のオランダ人墓地、幕末開港以来のロシア人墓地、さらに長崎居留地時代の西洋人墓地が各区画ごとに図3のように配置されている。オランダ人以下の西洋人墓地は18世紀以後のものに限られ、当初は唐人墓地が中心であったことが知られている。

墓地の現状と構成

図3に示した墓地全体が現在の悟真寺墓地の大半である。竹内・城田1990によるAからNを付した区画が外国人墓地であり、それ以外は日本人墓地となっているが、南側斜面の陳道隆墓（唐通事 初代頼川藤左衛門 1676年延宝4年没）のように、単独で所在する場合もある。そのうちJ地区は出島居住以来のオランダ人関係者の墓地である。1778年から1870年までの墓碑が残る。K・L・M地区はロシア人墓地で1858年に開設され現在に至る。C地区東半分はアメリカ人イギリス人を中心とする西洋人墓地で、1859から1869年までの死者が葬られている。坂井2001が指摘するように、後発のオランダ人墓地、ロシア人墓地、西洋人墓地の中には多少とも唐人墓が混在する。特にM地区には陳道隆の妻の家族の墓地が残されている（巻頭図版3上）。

それ以外の各地区は現在華僑墓地となっており、出身地別に分けられている。北縁のB・E地区は広東省出身者墓地で、祭祀壇を別に設け墓碑の年号にも江戸時代にさかのぼるものはない。N地区は三江（江蘇省・浙江省・江西省）出身者の墓地で、明治時代以後の墓地である。残るA・C西半・D・F・G・H・I地区は現在福建省出身者の墓地となっており、悟真寺国際墓地の過半の面積を占める。但し実際の墓碑銘を調べると、福建出身者のほかに三江系の墓地も多く、坂井2001は第1期に福建南部閩南系と三江系の出身者によって唐人墓が開設されたと推定した。ただしI地区の墓は時期の異なる墓碑が列をなして配置されており、後世の整理の結果と推定される。

墓地の起源

記録によれば17世紀初頭に華商欧華宇と張敬泉（ともに福建南部出身者）が長崎在住唐人の墓地を求めたことに始まる。その年代は1602年以後1615年頃までの間であったと推定されている（李1991）。碑文によると最古の被葬者は1627（寛永4）年銘であるから、そのころまでには唐人墓地として使用されていたことは間違いない。また開設当初の悟真寺墓地は唐人墓として出発し、その後オランダ人墓地、ロシア人墓地が開設され、さらに南側には日本人墓地が拡大し、唐人墓地の中でも広東系と三江系が分離したという坂井2001の分析は首肯できるところである。

今回の墓碑調査でも坂井第1期にあたる17世紀代の唐人墓の分布を図3のように落とすと、G・F・M・D・I・陳道隆墓というように各地区に1か所ずつ第1期の墓が分布しており（図3の円圏で囲んだ地点）、

当初から唐人墓地は広い空間を占有し、その中に点在するように墓地を設け、その後その間や周囲に墓地が追加されることで、現在のような空間構成の基本が出来上がったものと推定される。

17世紀代の唐人墓

墓の名称は竹内光美・城田征義1990『長崎墓所一覧 悟真寺国際墓地編』にしたがう。今回実測した墓地は、坂井2001論文の第1期の墓碑と、関連する石碑である（表1）。

墓碑の形式分類 悟真寺に所在する17世紀の唐人墓を墓碑の形態に着目して形式分類すると、次の7形式に分類できる。このうちA・B・C形式とG形式は唐人墓特有の形式であるが、D形式はキリシタン墓碑との影響関係がみとめられる形式である。E・F形式は日本で発展した近世墓塔の形式である。墓碑の背後に置かれて墓丘の形態を模倣した蓋石には、切妻屋根形と尾端が丸くすぼまる亀甲形がある。切妻屋根形は18世紀にはいると地上に置く様式から基礎石の上に置く様式に変化するが、今回の調査では確認にとどめた。

A形式（図4①） 隅切方頭形は地中に直接基部を埋設する立碑で、正面観が方形でその頭部左右を45度に断ち切り、明確な稜線が付く。

B形式（図4②） 隅丸方頭形は基部を直接埋設する点はA・C形式と同じで、正面方形の頭部両角を丸く削り稜をもたない。側面の一部と背面荒削りのままで、中央部がやや厚くなる。縁帯を残すものと残さないものがある。

C形式（図4③④） 円頭形は頭部が半円形に整形され両側面との境に浅い稜が残る。縁帯を残すもの（④）とそうでないもの（③）がある。

D形式（図4⑤） 半円柱亀甲形はM27号で唯一知られるものだが、本来蓋石として使用される亀甲形の石材の正面を半円形に整形し、縁帯を残す彫窪みがある。M27号の場合は尾部が切断されたように裁たれている。正面が整形されていなければ亀甲形の蓋石に分類される。縁帯を残す正面に碑面をもち、その正面観はキリシタン墓地の分類による半円柱形板状伏碑の西日本型⁽⁶⁾にきわめて類似する。

E形式（図4⑦） 墓碑の正面観が三角頭形となり日本の板碑形墓碑の転用あるいは模倣されたものである。古くても17世紀の後半に出現する形態で、悟真寺の17世紀の墓碑では最もあたらしく出現する。

F形式（図4⑮） 笠付角柱形の日本近世墓碑の一形式である。宝珠、笠、断面方形の碑身、蓮華座と台石からなる。火燈形の内側に碑文を刻む。

G形式（図4⑱） 二段頂形は碑身円頭部が両側とも二段になり逆の稜が明瞭に走る。悟真寺の17世紀代の墓碑にはその例がないが、18世紀代の墓碑では多数を占めるので、ここでは写真のみを掲げる。

墓碑の型式要素 各形式は以下の型式要素を属性と

しており、時間的に変化する。

断面形 1627～1631年までに死亡した被葬者の墓碑の断面は背後に向かって平坦ではなくやや厚くなる(①～④)。背面は荒削りのままで凸凹が激しい。この断面形状はA形式からC形式まで共通し、中央部あるいは下部に向かって厚みを持つ点はA期の古い形態の特徴である。1640～1665年の墓碑では、断面は厚みが

なくなり平坦に仕上げるが、背面は荒削りのままである(⑥～⑩)。そのご1653年以後の墓碑では背面は平坦に整形されている(⑪⑫⑬)。断面が厚みをもつ1類、背面が平坦だが荒削りの2類、背面が平坦に仕上げる3類に分類でき、この順番で時間的に出現、変化する。

縁帯と火燈形 墓碑正面には彫窪みがおこなわれるものと施さないものがあるが、彫窪みの形状から以下

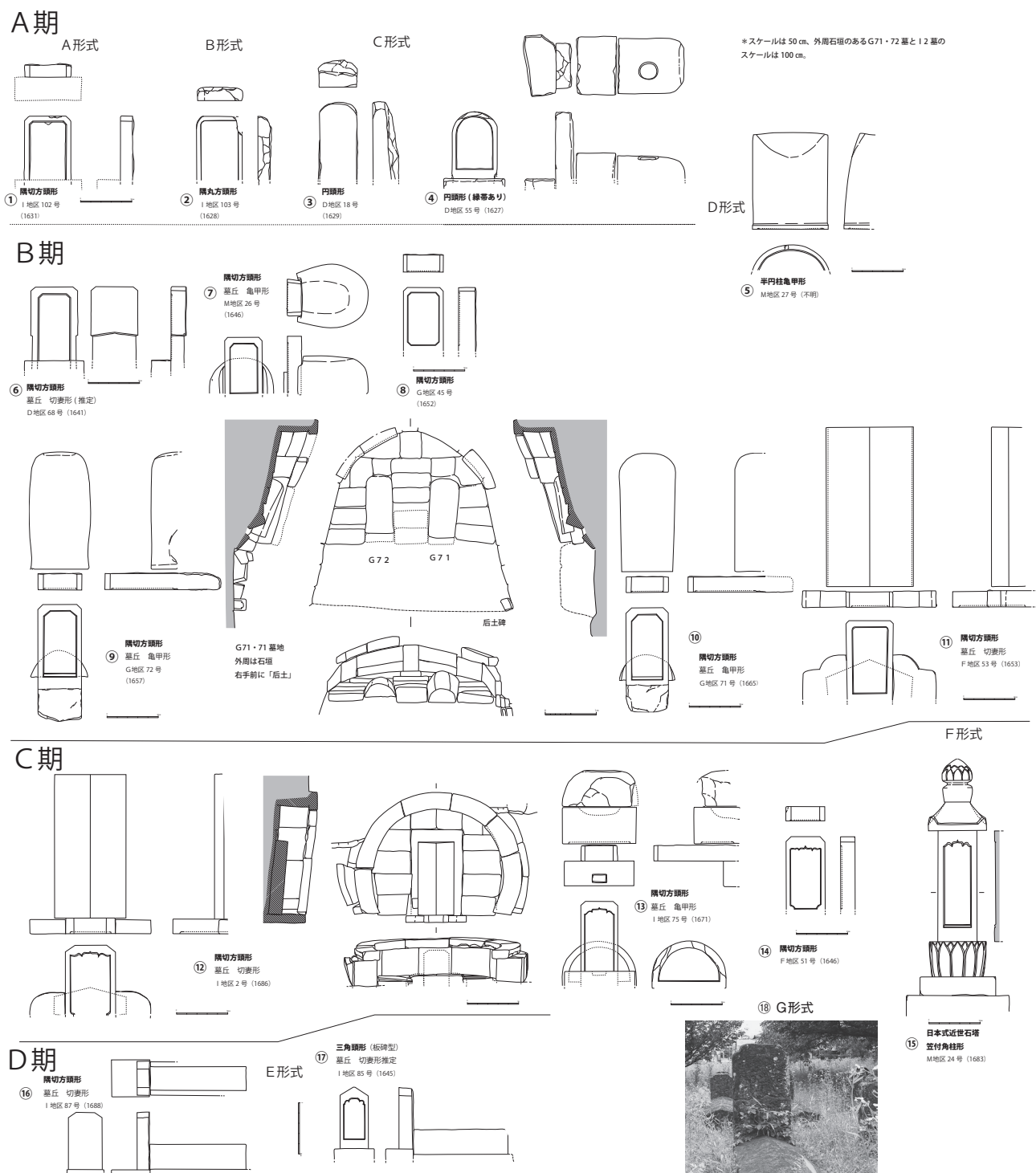


図4 悟真寺の唐人墓形式と変遷

に2類3種に分類できる。正面の輪郭線と平行して同じ幅の帯が巡るものを**縁帯a** (①～⑧)とし、正面形態と彫窪みの形態のバランスが崩れ、縁帯の幅が上部と側面、隅部で異なるものを**縁帯b** (⑨～⑪)とする。また彫窪みの形態が意匠化してイスラム風の窓の形に似た最上部がとがった**火燈形** (⑫～⑮)がある。

縁帯aは1627～1652年の墓碑に、縁帯bは1653～1665年の墓碑にあらわれ、火燈形は1671～1686年の墓碑とF形式に採用され、このデザインは日本の近世墓石からの影響である。

蓋石の形式分類 墓碑の背後の埋葬施設の上に置かれる蓋石については17世紀の悟真寺墓地においては以下の2種が存在する。本来土盛の墓丘が存在した可能性があるが、現在では確認できない。

亀甲形 墓碑の背面に接触する前端を半円形に整形し、尾部は丸く収束する。中央部を丸く膨らませるもの(⑦)、半円筒状に伸ばす(④⑨⑩⑬)ものなどの違いがあるが、形態差が大きく今回は細分しない。亀甲形の蓋石を1石で造形するのが通常であるが④や⑬のように2個の石を組み合わせるものもある。その場合はほかの石材の転用であり、大半の唐人墓碑が安山岩製であるのに④と⑬のみは砂岩であり、⑬のようにキリシタン墓碑と推定される石材に半円形の石材を後補して蓋石としている例もある。

切妻屋根形 横断面が屋根形で長軸中央に稜が1本通り、全面と背面は垂直に断ち切られて切妻形となる蓋石である。そのまま地面に置く大型のものと、長方形の基礎の上に載せる小型のものに分けられる。

亀甲形1石作りのものは1640年頃から出現し、切妻大型品も同じころから出現する。切妻小型品は1688年以後の新しい時期のものと考えられる。

墓碑の変遷(表1 図4) 以上の墓碑形式の盛衰と各型式要素の変化をもとに、17世紀の悟真寺唐人墓は以下の4期に変遷すると考えられる。

A期 1627(寛永4)年から1631(寛永8)年の死者に対する墓碑。その初めからA～C形式が存在する。埋葬後まもなく立てられた墓碑の特徴は以下の通り。断面形態は1類で厚みを持つ。正面には縁帯aを残す彫窪みがあり、唐人墓碑の特徴である意匠の約束が守られている。

④D55墓とI83墓は蓋石がいずれも後補された可能性がある。とくにI83墓は銘文に明の崇禎年号を刻んでおり18世紀の製作の可能性もある。したがってこの時期には蓋石はまだ普及していない可能性が高く、墓丘は土盛りであった可能性が残る。

B期 1640(寛永17)年～1665(寛文4)年の死者に対する墓碑。A形式が大半でC形式は1例(ただしその1例はC期に建てられたもの)、B形式は見られない。断面形態は2類で厚みがなくなるが背面調整は粗い。正面には縁帯aを残す唐人墓碑の伝統が守られ

ているが、1653年以後の新しい墓碑では縁帯の約束が崩れ、縁帯bが現れる。亀甲形と切妻屋根形の両者の蓋石が出現し、1660年代には⑨⑩G71・G72墓のように華南様式の外周石垣と前庭が設けられる。

この時期の死者の墓碑は⑭や⑰で明瞭のように、次のC期ないしD期に建てられた墓碑が増加する、B期の死者13例のうち7例が該当する。1世代あるいは2世代後の子孫が墓を整備して墓碑を建立あるいは作り直しを行っている可能性が高い。

C期 1671(寛文11)年から1686(貞享3)年までの死者に対する墓碑。墓碑形式は隅切方頭のA形式がほとんどであるが、M地区ではF形式の日本式近世石塔である笠付方柱形墓石が建てられる。A形式の墓碑断面形は背面を平坦に仕上げる3類で、正面の彫窪めは意匠化した火燈形が採用される。これは日本の墓碑のからの影響であると推定される。C期の死者6例中4例は同一時期の内すなわち死後ほどなく墓碑が建てられている推定されるが、2例はD期の墓碑である。

D期 1688(貞享5)年以後の死者に対する墓碑であり、18世紀の墓碑の大半が含まれ、今回は3基のみを実測したに過ぎず、今後さらに細分される可能性をもつが、今報告では一括する。A形式が残るが、B形式の隅丸方形が多くなり、特に頂部の平坦が狭まり円頭形に接近する。二段頂形のG形式が現れて後に主流になる。墓碑断面は平坦な3類である。正面の彫窪みがなくなり、火燈形も先端が消失したり、意匠が単純化したものが現れる。蓋石は亀甲形がほとんどなくなり、基礎石の上に小型の切妻屋根形を置く形式が大半になる。

以上の17世紀の墓碑に時期区分はA～C期とD期のごく初期は坂井2001の第1期に該当する。D期の大半は第2期に該当する。

悟真寺墓碑の諸問題

今回の悟真寺墓地の17世紀にたてられた墓碑の大半は長崎に居留帰化した明末清初の唐人墓であるが、今回の調査で判明した点、提起された問題を記しておきたい。

A悟真寺唐人墓の形成過程は、墓地を区画してその中に墓を列状に配置して密集拡大するキリシタン墓地のあり方⁽⁷⁾とは大きく異なり、単独あるいは夫婦の墓地が広い範囲のなかに離れて設けられ、初期の墓が墓地全体に点在する。時期がたつにつれてその間や新たな離れた場所に墓地が拡大している。

B創設期の墓の形態 1627年から1631年までの初期の墓碑には蓋石を伴う確実な例が知られていない。墓丘は土盛りであった可能性があり、蓋石が登場するのは1640年以後のB期からである。さらに華南様式の外周と前庭を持つ墓地はB期の後半にあたる1650年代以後に現れる。

C埋葬と墓碑建立の時期差 唐人墓は通常埋葬後時

間をおかず墓碑を建てるのが通例であるが、悟真寺の17世紀の墓碑では、碑文に刻まれた被葬者の死没年(埋葬の時期)と墓碑型式の年代に顕著な違いがあり、1世代あるいは2世代後の孫あるいは曾孫による墓碑建立と推定される例が多い。特にB期の埋葬にその例が多く、C期になって墓碑を建てる人の範囲が拡大し、先祖の墓地の整備が行われた可能性が高い。

D 唐人墓に転用されたキリシタン墓碑 調査目的の一つに新村出が1917年6月にこの悟真寺墓地でキリシタン墓碑として最初に報告した墓碑の探索があった。その墓碑は新村1918によれば図1のような半円形の墓碑正面に縁帯が付き、形状は蒲鉾型で3石からなっていたという。場所はオランダ人墓地の一角であった。そのご太平洋戦争において悟真寺は爆撃の直撃をうけロシア人墓地と唐人墓地の一角が被災し、戦後一部は整理されているようであり、今日その墓碑を確認することはできなかった。

しかしC期の墓碑であるI 75墓(図4⑬)の蓋石に奥行きが短いものであるが、キリシタン墓碑と考えてよい石材(半円柱形状伏碑)が墓碑の背後に使用されていた、1671年銘の墓碑はキリシタン墓碑の碑面を隠すように建てられ、尾部には亀甲形の石がおかれていた。唐人墓の墓丘として蓋石を造成した際、当時すでに廃棄されていたキリシタン墓碑を転用したものと推定される。同様な例はA期のD55墓(図4④)にもみられる。またM27墓(図4⑤)は墓碑が失われているが、蓋石に転用された大型のキリシタン墓碑であった可能性がある。

E 悟真寺墓地の前身 以上指摘した3例の墓碑は碑文あるいは文様によって断定することはできないが、形式的にキリシタン墓碑⁽⁶⁾と推定される。初期の唐人墓の蓋石として転用されているところからみて、その形式はいずれも1620年以前のキリシタン墓碑とおなじ形態であるところから、悟真寺墓地の場所に唐人墓に先立ってあるいは併存して、その一角にキリシタン墓地が存在した可能性を指摘できる。

今回の調査で、悟真寺墓地の唐人墓とオランダ人墓地以前のキリシタン墓地との接点となる手がかりが見つかったが、18世紀以後の墓地の展開を含めた全体的な見通しを得るには至らなかった。今後の課題である。

(附) 長崎市崇福寺墓地

崇福寺は黄檗宗に属し福建省出身の中国人の寺として知られている。今回十分な墓地の調査ができなかったので、概要のみをのべると、寺院背後の急斜面に何段もの平坦面を造成しそこに、墓碑と蓋石とがセットとなった唐人墓が平坦面に側面を並行させて十数基を単位としてならぶ。多くは長崎で客死した中国人船員の墓地であり。また崇福寺の黄檗宗僧侶墓には華南様式の影響をうけた墓が数多く存在する。1656年銘の墓碑を最古として1679(延宝7)までは日本年号を用い、

その後1730年代以後の墓は清国の年号を用い、その後現在まで中国人墓地として継続している。やや大型の墓には馬蹄形の外周施設が設けられているが、18世紀後半から外周が方形のコの字形に変化する。

- (1) 坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」『九州考古学』76 九州考古学会 註25の指摘。
- (2) 大石一久編2012『日本キリシタン墓地総覧』南島原市教育委員会
- (3) 新村出1918「慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑」『史林』3-1(のち『新村出選集』第1巻1943に収録)に記載があり、後に新村出・浜田耕作1923「京都市及其附近発見の切支丹墓碑」『吉利支丹遺物の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告7、に1917年調査の際の新村の略図が掲載された(図1)。
- (4) 長崎における外国人墓地については様々な関心から調査が行われている。近世から近代の西洋人墓地については、レイン・アーンズ、ブライアン・パークガフニ1991『時の流れを超えて—長崎国際墓地に眠る人々—』長崎文献社、木下孝2009『長崎に眠る西洋人』長崎文献社、が詳しい。
悟真寺のオランダ人墓地については、宮永孝1989「日本におけるオランダ人墓」『社会労働研究』35-2 法政大学社会学部学会、が詳しい。
唐人墓については唐通事の家系研究から長崎華僑の歴史研究の一環として唐寺の墓地調査が碑文の採録を中心におこなわれてきた。宮田安氏の先駆的な研究に、宮田安1979『唐通事家系論攷』長崎文献社、宮田安1982『長崎墓所一覽 風頭山麓編』長崎文献社、宮田安1986「崇福寺の唐人墓地」『長崎華商泰益号関係資料』第二輯 長崎華僑研究会、宮田安1987「興福寺の唐人墓地」『長崎華僑史稿(史・資料編)』第三輯 長崎華僑研究会があり、悟真寺の唐人墓については、竹内光美・城田征義1990『長崎墓所一覽 悟真寺国際墓地編』長崎文献社、李献璋1991『長崎唐人の研究』親和銀行が、基礎的研究である。
また宮下雅史2012「唐人屋敷と新地」『新長崎市史』第二巻近世編、長崎市には、中国人墓の概説がある。
- (5) 坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」前掲と、その基礎となった坂井隆1996「港市長崎の考古学」『東南アジア考古学』16 東南アジア考古学会がある。
- (6) 田中裕介2012「日本における16・17世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会
- (7) 田中裕介2012「キリシタン墓地の構造」『日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』

表 1 悟真寺墓地調査墓碑一覧

時期 区分	地区 No	墓碑 形式	属性	墓碑寸法 (cm)			墓丘	墓丘型式	蓋石寸法 (cm)			石材	外周 (cm)			銘文等	被葬者死没年 月日 (西暦)	墓碑製作 時期	損壊状況	備考
				高さ	幅	奥行			高さ	幅	奥行		構造	高さ	幅					
A期 (1627 ～ 1631)	D 55	立碑C	円頭 緑帯a	70以上	44	16	蓋石 (後補)	半円柱形	25以上	57	39	墓碑は安 山岩。蓋 石は砂岩	なし			浙江 紹興府山陰縣 夏江藤君之墓 寛永四年立	寛永4 1627	A期	頭部一部 欠失	浙江省紹興府山陰縣出身 半円柱型の蓋石はキリシタン墓碑の 型式に類似 亀甲形の背面に円形の浅い穴あり。 蓋石は後補か。 実測 (田中) 図4 ④
		供物台 (自然石)	9以上	60	29	亀甲形		23以上	54	63										
	I 101	立碑B	隅丸方頭 緑帯a	61以上	25以上	12	なし	—	—			安山岩	なし			清 ■ 寛永丁卯年八月十九日 魏次都之墓 寛永四年立	寛永4.8.19 1627.9.28	A期	縦半分欠	江蘇省常州府靖江県? (竹内・城田 1990) 実測 (田中)
	I 103	立碑B	隅丸方頭 緑帯a	62以上	44	13	なし	—	—			安山岩	なし			龍 寛永五戊辰歳六月一日 我謙清君墓 考男三孫四孫立	寛永5.6.1 1628.7.2	A期	右肩欠損	福建省漳州府龍溪県出身 実測 (田中) 図4 ②
	D 18	立碑C	円頭	74以上	37	26	なし	—	—			安山岩	なし			漳州 ■ 寛永六己巳卒於 振峯洪公墓 四月二十日巳時立	寛永6.4.20 1629.6.11	A期	完存	福建省漳州府龍溪県出身 実測 (田中) 図4 ③
	M 36	立碑C? 円頭?	円頭?	35以上	35	17	なし	—	—			安山岩	なし			浙江 ■ 寛永六年七月・ 西安游紹 男世・	寛永6.7 1629.7~8	A期	上下欠失	浙江省衢州府西安県出身 (竹内・城田 1990) 実測 (松園)
	I 83	立碑C	円頭	66以上	38	15~18	蓋石	亀甲形 (後補?)	18以上	72	115	安山岩	なし			龍 崇禎三年正月十二日 養純翁公墓 邑男廣仔連奇三孫立	崇禎3.1.12 1630	A期?	蓋石先端 欠失	墓碑は日本年号の使われなくなるD 期の製作の可能性も残る。 寛永7年 福建省漳州府龍溪県出身 実測 (田中)
B期 (1640 ～ 1665)	I 102	立碑A	隅切方頭 緑帯a	62以上	45	13	なし	—	—			安山岩	なし			京都 同 ■ 寛永八辛未十月初八日 清曾君墓 考男三孫五孫立	寛永8.10.8 1631.11.1	A期	完存	竹内・城田1990は遷を延、世を四の 誤刻とする。 福建省漳州府同安県出身 実測 (松園) 図4 ①
	M 26	立碑A	隅丸方頭 緑帯a	55以上	36	13	蓋石	亀甲形(墓 碑を嵌入)	37	63	69	安山岩	石材を方形に配置 手前に冢形の石配2基あり 後補の可能性高い			龍 寛永庚辰歳 故孝結義郭公墓 邑孝女招娘立	寛永17 1640	B期	完存	福建省漳州府龍溪県出身 宮田1979によれば唐通事初代賴川 藤左衛門の先妻の父の墓 実測 (李・田中) 図4 ⑦
	I 82	立碑C	円頭 方形+火 燈形	60以上	40	11	なし	—	—			安山岩	なし			清 ■ 生于萬曆己丑年五月初二■丙時 故孝敬黃陳君之墓 卒于寛永十七年五月初六■	万曆17.5 (1589) 生 寛永17.5.6 1640.6.25 没	C期	完存	前後の石は当初のものがかどうか不明 福建省漳州府出身 実測 (李桓)
	D 68	立碑A	隅切方頭 緑帯a	73以上	45	15	蓋石	寄棟形	30	30	(59)	安山岩 (供物台は 砂岩)	なし			清 ■ ■十四年■ 烏雄姚隆奇の墓 寛永十八年九月十三日立	(崇禎) 14寛 永18.9.13 1641.10.17	B期	蓋石一部 欠	福建省漳州府龍溪県出身 蓋石は本来のものではなく、切妻形 であったと推定される。墓耳もあつ たと推定される。 図4 ⑥ 実測 (松園)
		供物台		12以上	58	190														
	M 25	日本式 近世石 塔F	笠付方柱 形 火燈形	総高 153 以上	—	—	—	—	—			安山岩	なし			・ ・ ・ ・ 廿年 ・ ・ ・ ・ 林 不遷位 癸未七月六日	寛永20.7.6 1643.8.20	C期	上半欠失	竹内・城田1990によれば、戒名は「 真興庵居士」(于時寛永二十年)。 宮田1979によれば唐通事初代賴川 藤左衛門の先妻の墓 (実測 (田中))
	I 85	立碑E	三角頭形 (板碑型) 火燈形	60	27	13	蓋石	基礎	24	24	91	安山岩	なし			大明国龍武二年 崇明縣蔡貴文之墓 六月十一日立	隆武2.6.11 1645	D期	蓋石上部 欠失	正保二年 江蘇省蘇州府崇明県出身 墓碑の型式は17世紀末 実測 (田中) 図4 ⑦
	A 72	日本式 近世石 碑F	板碑型 火燈形+ 蓮華座	192 納突 あり	51	20~27	—	—	—			花崗岩 簡西御影	なし			于時正保祇生年国薩摩住人施主 南無阿弥陀仏上達法下及六道 乙酉六月十五日賴川藤左衛門尉立	正保2.6.15 1645.8.6	C期	碑は2つ に折れる	賴川藤左衛門は初代唐大通事 実測 (李桓)
		台石1段		23以上	69	71														
	F 51	立碑A	隅切方頭 火燈形	71以上	38	14	なし	—	—			安山岩	なし			正保三丙戌年 榮宇敬公墓 正月初八卒 考男萬祿祀	正保3.1.6 1646.2.21	C期	完存	歌華字の子息か。 実測 (田中) 図4 ⑭
	M 28	日本式 近世石 塔F	笠付方柱 形 火燈形	総高 205	—	—	—	—	—			安山岩	なし			慶安壬辰年 歸真露心室女墓 八月念九日	慶安5.8.29 1652.10.1	C期	完存	実測 (田中)
	M 23	日本式 近世石 塔F	笠付方柱 形 火燈形	総高 203	—	—	—	—	—			安山岩	なし			慶安壬辰年 歸真空華室子墓 九月二十五日	慶安5.9.25 1652.10.27	C期	完存	実測 (松園)
G 45	立碑A	隅切方頭 火燈形	62以上	39	16	なし	—	—			安山岩	なし			龍溪下許陳村 明耿養陳公墳 壬辰年孟冬立	承応元.10 1652.11	B期	完存	福建省漳州府龍溪県出身 実測 (田中) 図4 ⑧	
F 53	立碑A	隅切方頭 緑帯b	77以上	45	15	蓋石	切妻形	34以上	84	155	安山岩	なし			承応壬辰歳拾貳月 華宇敬公之墓 念貳日吉立 衆勸記	承応 元.12.22 1653.1.21	B期	完存	唐人墓地創建者の一人。 実測 (田中) 図4 ⑪	
	墓耳		44以上	42	16															
G 72	立碑A	隅切方頭 緑帯b	110	43	16	蓋石	亀甲形	26	60	114	安山岩	石垣 半円形 床石敷	70	330	220	明暦三年二月十八日 清 ■ 我欽榮公墓 考女進娘立 男勝右衛門七兵衛立	明暦3.2.18 1657.4.1	B期	完存一部 損壊	G 71号墓と外周を共有。 唐通事2代目賴川藤左衛門の実父 福建省漳州府龍溪県出身 実測 (田中) 図4 ⑨
G 71	立碑A	隅切方頭 緑帯b	102	41	15	蓋石	亀甲形	25以上	55	115	安山岩					寛文甲辰四年 歸真釋妙玄尼尊位 十一月廿二日考男勝右衛門七兵衛立	寛文4.11.22 1665.1.8	B期	完存	G 72号墓と外周を共有。 唐通事2代目賴川藤左衛門の実父の 妻 実測 (田中) 図4 ⑩
C期 (1671 ～ 1696)	I 75	立碑A	隅切方頭 火燈形	80以上	36	16	蓋石 (後補)	半円柱形	46	72	35	墓碑と供物 台は安山岩 蓋石2石は 砂岩	なし			寶島 寛文辛亥年臘月吉日立 明故孝華公之墓 考男尚恭奉祀	寛文11.12.1 1671.12.31	C期	完存	福建省泉州府同安県廈門出身 キリシタン墓碑を蓋石に転用 実測 (李・田中) 図4 ⑬
	供物台 (水鉢あり)		15以上	68	24	亀甲後半形		35以上	(75)	35										
	I 89	立碑A	隅切方頭 (断面三 角) 火燈形	67以上	45	16	なし	—	—			安山岩	なし			皇明 同安縣中在所彼抗社 故孝林公諱吉墓 辛亥年十二月十五日卒	寛文 11.12.15 1672.1.14	D期	完存	福建省泉州府同安県出身 切妻形蓋石の転用の可能性大 干支の読みは竹内・城田1990によ る。実測 (松園)
	M 24	日本式 近世石 塔F	笠付方柱 形 火燈形	総高 251	—	—	—	—	—			安山岩	なし			天和三癸亥年 釈妙順信女 七月八日去	天和3.7.8 1683.8.29	C期	完存	墓碑の上に別石ののが、それは欠失 実測 (李桓)
	I 95	立碑	方頭 火燈形	74以上	32	12	蓋石	切妻形	12	34	70	安山岩	なし			天和三年癸亥 歸真順空 齋 十月二十五日卒	天和3.10.25 1683.12.13	D期	完存	墓碑の上に別石ののが、それは欠失 実測 (李桓)
		供物台		7以上	71	35			基礎	22以上	32	66								
	D 29	立碑A	隅切方頭 火燈形	54以上	33	10	蓋石 (後 補?)	切妻形	16	44	57	安山岩	なし			■享三年 王廷輔墓 十月十七日	貞享3.10.17 1686.12.2	C期	完存	年号の復元は竹内・城田1990によ る。実測 (松園)
供物台			7以上	36	30		基礎	12以上	38	64										
I 2	立碑A	隅切方頭 火燈形	67以上	49	15	蓋石	切妻形	26	70	140	安山岩	石垣 半円形 床石敷	86~72	330	294	貞享丙寅年 福清楊廷楚之墓 孟冬吉日立	貞享3.11.1 1686.12.15	C期	完存	福建省福州府福清県出身 墓耳幅118cm 実測 (田中) 図4 ⑫
D期 (1688 ～)	I 87	立碑A	隅切方頭 火燈形	56	33	12	蓋石	基礎	25	23	92	安山岩	なし			福州 貞享五年 東嶺林尚官 卒於戊辰年八月二十六日	貞享5.8.26 1688.9.20	D期	蓋石上部 欠失	福建省福州府出身 実測 (田中) 図4 ⑬
		台石		11以上	43	30		切妻形	5以上	37	70以上									
	I 4	立碑B	隅丸方頭	56	24	14	蓋石	切妻形	11	36	67	安山岩	なし			長色 乾隆四年 皇清特贈先考陳君墓 ■月穀旦	乾隆4 (元文 4) 1739	D期	完存	実測 (田中)
		台石		11以上	43	30		基礎	23以上	24	70									
	A 40	記念碑 B	隅丸方頭	131	60	30	—	—	—			安山岩	なし			崎陽悟真寺骨塔碑誌 (中略) 日本宝暦十年歲次庚辰季秋穀旦 (側面碑文略)	宝暦10.9 1760.10	D期	完存	唐人合葬墓建設の碑 実測 (松園)
	台石			27以上	90	60														
	I 90	立碑B	隅丸方頭	57	25	13	蓋石	切妻形	11	37	99	安山岩	なし			乾隆四十五年 長泰縣徐義彰之墓 正月初十日故	乾隆45 (安 永9).1.10 1780.2.6	D期	完存	福建省福州府長泰県出身 実測 (松園)
台石			11以上	43	30		基礎 (2石)	29以上	30	92										
A 74	記念碑 C	円頭	135	33	22	—	—	—			安山岩	なし			悟真寺向有唐人塚 墓明清明英俊 共二百五十人 (中略) 同治4年乙丑吉月 (以下略) (側面碑文略)	同治4秋 1865		完存	元治2年 唐人合葬の碑 実測 (田中)	
台石			20以上	48	45															
M 27	半円柱 亀甲形 伏碑D	半円	25以上	74	95	亀甲形の墓丘を墓碑にしたもの			安山岩			なし 手前に冢形の石配1基あ り			不明	不明	A期以前	完存	亀甲形蓋石の変形 実測 (田中) 図4 ⑮	

○ 内は復元推定値

■は一文字読めず。

日付の換算は内田正夫編著1994『日本暦日原典』第4版 雄山閣による。

出身地は竹内光美・城田征義1990『長崎墓所一覧 悟真寺国際墓地編』長崎文献社

唐通事の家系については宮田安1979『唐通事家系論攷』長崎文献社による。



① I 102 墓

③ D18 墓

④ D55 墓



⑦ M26 墓



⑧ G45 墓



⑨ M27 墓



⑩ G71・72 墓



⑪ F 53 墓



⑫ I 2 墓



⑬ I 75 墓



⑭ M24 墓



⑰ I 85 墓

第3節 熊本県玉名市の唐人墓

田中 裕介

玉名市内には3基の唐人墓が現在知られている(図1)。伊倉の町の北の谷に所在する謝振倉墓と伊倉の町の内と云ってもいい町屋南の近接地に所在する郭濱沂墓(肥後四官墓)、旧天水町の丘陵尾根に単独で立地する林均吾墓である。いずれも近世初頭まで肥後北部の主要な海港であった伊倉とその周辺に位置する。伊倉は菊池川河口部対岸の高瀬湊と併称される港町で、港跡に近い台地上に唐人町の名称が残る。豊臣氏の蔵入地の後、関ヶ原戦後加藤清正領となり、唐人墓が作られた時代は加藤氏の時代で2代目忠広の代である。3基とも一箇所に集まることなく孤立して立地している。いずれの墓地も前面に河川を見下ろし背後に丘陵をひかえた見晴らしのよい尾根の斜面高所を選地しており、風水思想に合致した立地となっている⁽¹⁾。

郭濱沂墓は古く『肥後国志』に玉名郡伊倉に墓の存在と銘文を掲げる。その後『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(一)〈三〉』1987玉名市役所で略図が公開されている。謝振倉墓は以前から地元では知られていたが、注目されたのは1976(昭和51)年の発掘調査によるも

の⁽²⁾で、前後して林均吾墓も調査が行われたことが、明かになっている(第3節3荒木報告)。その後碑文を中心にした文献史の調査が進み⁽³⁾、被葬者は17世紀初頭に来日し、加藤氏の朱印船貿易などに従事した福建海商であることが明らかにされた。

そこで唐人墓の様式を調べるためこの3墓の石造物の現状調査をおこなった。現地調査は2012年12月16日玉名市内の3基の唐人墓の予備調査をおこなった後、実測図の整っていない郭濱沂墓と林均吾墓の調査をおこなった。前者については2013年2月16日に、後者は2月17日に行った。調査には、玉名市教育委員会に多方面にわたり、協力をえた。

玉名市の唐人墓の特徴は、謝振倉墓を除き墓碑の前の広場にあたる前庭が広いところにある。そのため側壁が大規模に構築されている。しかし墓丘と外周は埋没しているため内容は定かではない。その銘文からは郭濱沂墓は1619年、林均吾墓は1621年の埋葬で、1630年代に国内の唐人の長崎集住がなされたとすれば振倉墓もそれ以前の墓地と考えられる。長崎の墓地と対比できる唐人墓の最古の一群といえる。

(1) 原田昭一(大分県教育庁埋蔵文化財センター)より同様の指摘を受けた。

(2) 田添夏喜1977「玉名市伊倉中尾山報恩寺と振倉謝公墓」『熊本史学』50 熊本市学会

本史学』50 熊本市学会

田添夏喜1985「本堂山遺跡」『滑石小路箱式石棺 本堂山遺跡』(玉名市文化財調査報告6)玉名市教育委員会

(3) 森山恒雄・村上晶子2005「加藤政権の支配」『玉名市史』通史編上巻 玉名市、中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館



図1 玉名市内唐人墓位置図(荒木隆宏作成)

1 謝振倉墓

熊本県玉名市伊倉本堂山報恩寺墓地内で発見され、1976(昭和51)年に玉名市教委によって発掘調査された⁽¹⁾。その後報告書が刊行されている⁽²⁾。建立年代・建立者不詳の謝振倉の墓地である。

伊倉台地の北側に位置し、両側を谷と河川で挟まれた独立丘陵上の西側斜面に造られている。同じ丘陵上には中世寺院である伊倉の古刹報恩寺の跡地があり、13世紀から19世紀の一大墓地となっている。その一角のやや下った斜面で発見された。以下報告書をもとに墓地を記述する。

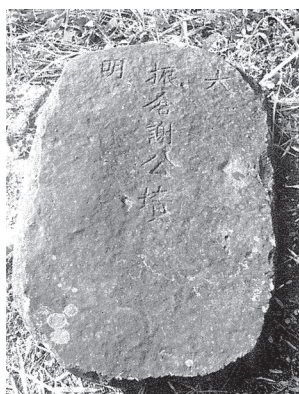


写真1 調査時の墓碑
(田添 1985 より)



写真2 謝振倉墓碑の現状



(1:20)
図2 謝振倉墓碑図面

墓碑と墳丘が調査され、墳丘からは夫婦と推定される成人男女2基の木棺墓が発見されている(図4、写真3)。いずれも伸展葬の遺体を長方形木棺に収容して埋葬したもので、男性木棺は漆喰製の郭で覆われ、蓋部分は切妻屋根形に整形されている(図3・写真3)。報告書ではその硬さを「セメント」と表現している。特に漆喰郭は唐人墓地であることの決め手の一つである。蓋は長さ2.6m幅1.3m高さ36cmの巨大なものである。

墓碑は正面のみを粗く整形した立碑形式で、基部には長く伸びてそのまま地下に樹立したことが写真1からわかる。高さ60cm以上1m近くになると推定される、幅53cm、厚さ22cmの安山岩製、その正面中央には「大明 振倉謝公墳」と刻まれている(図2)。発掘の時点で墓碑は当初の位置から離れていた。墓丘はすでに形をとどめていなかったが、漆喰郭蓋が地中から露出した発見状況から、土製の墳丘が存在したものと推定される。

第1号棺 漆喰郭で閉じられた内部には鉄釘止めした長方形木棺がはめこまれ、長さ1.9m幅0.4m深さ25cmと推計されている。木棺には2枚の鉄板が付属しており、報告者の田添氏は棺蓋に設けられた遺体に対面するための窓にもちいられた金具と推測している。頭を東に向けた成人人骨が1体伸展葬で葬られ、身長1.62m40歳未満の熟年男性と報告されている。副葬品なのか何らかの補強材と推定される金属環1点と鳥骨4点のほかは木棺を止めた鉄釘31点が出土した。

第2号棺 第1号棺の南側におよそ併行して葬られ

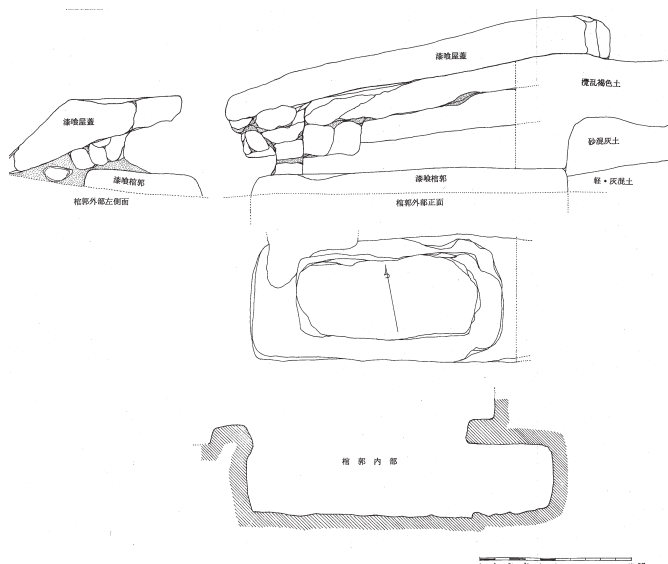


図3 謝振倉墓埋葬施設漆喰郭 (田添 1985 から引用)

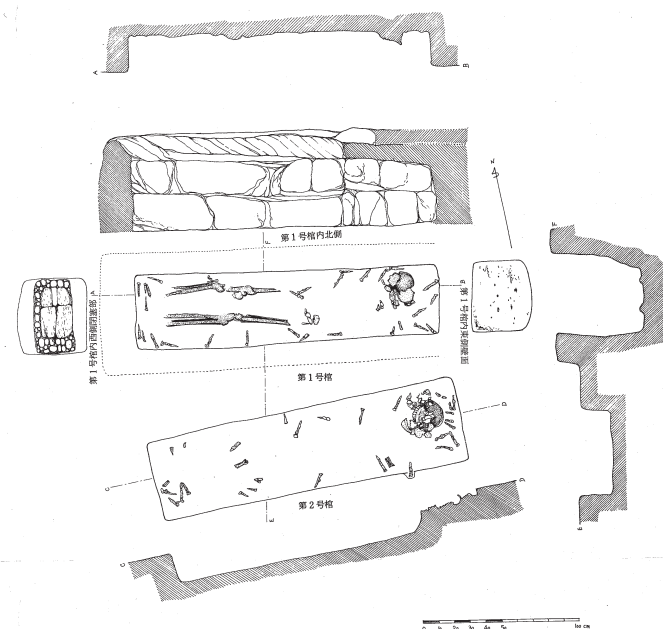


図4 謝振倉墓埋葬施設平面図と漆喰郭 (田添 1985 より)



写真3 調査時の謝振倉墓 (田添 1985 より)

た長方形の木棺である。木質は腐朽していたが28本の鉄釘の位置と痕跡から長さ2.0m、幅38cm、深さ20cm以上の木棺と推定されている。頭骨が遺存し、その位置から東頭位の伸展葬の成人埋葬と想定された。性別不明の40歳前後の熟年と推定されている。副葬品は特になかった。

報告ではこの2体の埋葬を謝振倉とその妻と推定しているが、当時の中国の墓地が夫婦の墓を並べる形式であるところから妥当な見解であろう。この2基の木棺は近接して埋葬されているところから見て同一墳丘下に埋葬されたと考えられるが、1号墓が漆喰郭、2号墓は木棺直葬であるところから、異時埋葬すなわち追葬を行ったものと推測される。

調査時の所見では外周施設や側壁あるいは前庭の痕跡は発見されていないので、中島氏が「福建南部様式」と区別して「中国式墳墓」と呼んだように華南様式の墓地ではない可能性も残している⁽³⁾。

- (1) 田添夏喜1977「玉名市伊倉、中尾山報恩寺と振倉謝公墓」『熊本史学』50 熊本史学会
- (2) 田添夏喜1985「本堂山遺跡」『滑石小路箱式石棺 本堂山遺跡』(玉名市文化財調査報告6 玉名市教育委員会)
- (3) 中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館

2 郭濱沂墓(肥後四官墓)

熊本県玉名市伊倉北方鍛冶屋町に所在する元和五(1619)年8月の命日をするす明国福建省海澄県三都出身の明人郭濱沂の墓である。現在墓地全体が玉名市指定史跡である。銘文から見て子息兄弟と考えられる郭国珍・国栄兩人が建てたものである(巻頭図版3)。

港町伊倉の市街が立地する台地南端の南向き斜面に立地し、足元は谷で川が流れている。墓碑の正



拓本
(玉名市 1999 年より)

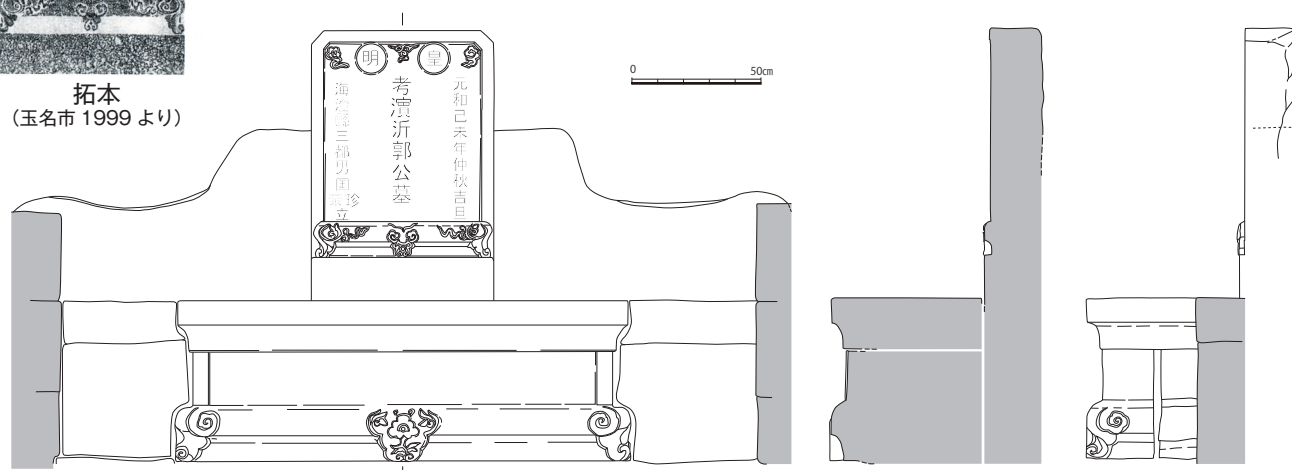


図5 墓碑正面 (1:30)



写真4 墓碑・墓耳・供物台

面をほぼ南に向けている。墓碑には正面右に「元和己未年仲秋吉旦」、中央に「考濱沂郭公墓」左に「海澄県三都男国栄珍立」と刻まれている。

石材はすべて同じ石材をもちい、玉名地域でもちいられる凝灰岩や安山岩とは異なって、硬質の砂岩質の石材が用いられている。詳しい石材鑑定はこれからの課題であるが、側壁の石材に認められる矢穴の痕跡は、同時代の日本国内の城郭や石造物にもちいられた痕跡とは大きさや形態が異なっている。この矢穴の特徴は林均吾墓とも同じであり、佐藤亜聖の研究⁽¹⁾を参考にすれば、中国福建省泉州周辺に類似の矢穴痕跡を見出すことができる。しかし墓碑には元和と云う日本年号が用いられており、石質自体は泉州産の輝緑岩とはことなっている⁽²⁾、石材そのものは中国からの搬入物と断定できないが、少なくとも中国福建の石工技術によって作られた墓であることは確実である。また墓碑や供物台の表面の仕上げには同時代の日本の石造物には観察できない細かい敲打による表面調整が行われている。

墓丘と外周 墓碑の背後には現在土製の円形墳丘があり植栽によって方形に区画されているが、この墳丘は指定以前の写真には存在しないので、指定後に整備



写真5 矢穴痕

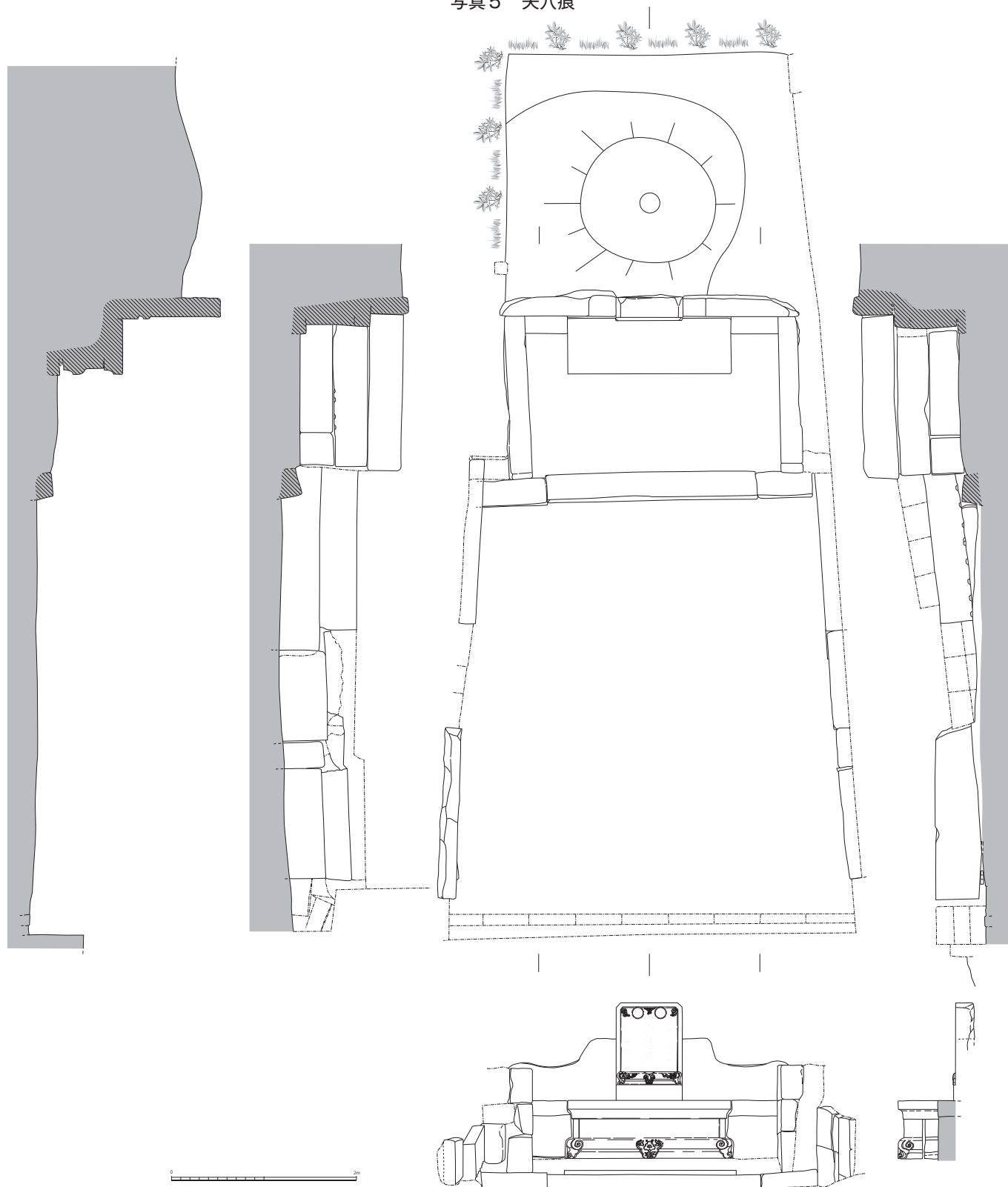


図6 郭濱沂墓（肥後四官墓）実測図

されたものである。墓丘の旧情は全く不明である。その周りの外周施設も現状では存否の手掛かりはない。

側壁と前庭（図5、写真8、9、11）側壁は左右二段に屈折している、墓碑に近い方を側壁第1面、遠い方を側壁第2面、墓碑正面に向かって左右を区別する。図5平面図の左上が左側壁第1面となる。前庭も墓碑に近い方を第1面、遠い方を第2面とする。墓碑正面から前庭端までは6.5mをはかり、端部は二重のブロック列で区画されている。本来南側の斜面に向かって開けていたはずであるが、現状では閉じられている。側壁は2面に屈折し、第1面左右は長方形の石材を三段ずつ横積にして高さ105～110cmに揃えて上面で長さ170～180cmを測る。奥壁は墓耳を除いて2段構成で下部に大型の石材を用い供物台を挟むように造形した左右対称の石材が配置されて20cmほど前方にせり出して墓耳との間に段を作る。

前庭も側壁の屈折部に一段の石段を配置することで高さを20cmちがえて二面に整備している。側壁と墓耳を乗せた奥壁に囲まれた前庭第1面は平面矩形で奥壁側が275cm、左右の側壁は150cm、石段の左右で270cmとなる。この空間の奥壁下部に一段石材が配置されその手前に供物台が置かれている。前庭の面を区切る石段の幅は360cm以上である。側壁第2面は左右とも長方形の石材を右に2段、左に1段積んでいるが、左側は石が持ち出されコンクリーブロックなどで埋められて、そこが低く出入りできるようになっている。第1面と第2面の間の石がそろっていないので、第2面左右両面の石垣は移動している可能性がある。前庭は段違い部の石段以外は土砂敷きである。

右側壁第1面上から2枚目に石材の下面に矢穴の痕跡が4カ所認められる（写真5）。長辺長さ4cm、短辺長さ3cm、深さ3cmである。左側壁第2面奥上位の石材下端にも約20cm間隔で矢穴の痕跡がある。長辺長さ4cm、短辺長さ2.5cm、深さ2.5cmである。ともに小型の矢穴である。

墓碑と墓耳（図4、写真4、10）墓碑は鋭利な隅切りを行った長方形で、下部は供物台の背後に隠れて測れないのだが現状では高さ106cm以上、幅71cm、厚さは21cmほどである。墓碑の天端の高さは前庭第1面から175cmほどである。碑面本体にも隅切りの縁帯を左右と上に残して碑面を一段掘下げる。悟真寺の縁帯aにあたる。碑面は研磨ではなく細かい敲打を施す。上端には中央と左右の雲気を丸彫し、その間に直径12cmの円文を浮き彫りし、そこに「皇」「明」を刻字する。碑面の下部は須弥座を表現し、左右の蝶足の内側と中央に左右対称の雲気表現を浮き彫りしている（写真13）。その下の台座部分まで一石である。墓耳は左右一対のせり上がりの波形に造形した平石を墓碑を挟むように配置する。上面は背後に向かって傾斜する。幅125cm高さ67cmである。

供物台（写真12） 全体として須弥壇を造形し、上框と軸部・下框は、上下に別石で、さらに軸部と下框は縦に区切られた石材を合わせている（写真16）。したがって供物台全体は三ないし四つの石材からなっている。全体の高さは63cm幅176cm、奥行きは59cmである。上框は二段、軸部は無文で正面左右に浅く柱の表現がある。下框の左右は反りの効いた蝶足にらせん状の雲気が正面と側面に1対彫られ、正面には花文が浮き彫りされている（写真15）。

まとめ 墓碑と両側の墓耳と供物台を中心に前庭と側壁からなる墓地の構成は、墓丘と外周が判明しないにも関わらず、華南様式の墓地の構造とよく一致する。その立地はほかの唐人墓と同様風水の観点から選択されている。さらに墓碑と供物台に見られる須弥壇の造形と、蝶足や雲気の浮彫表現、石材表面の細かい敲打による調整技法は17世紀初頭の日本の在来石造物には認められない表現である。また阿蘇溶結凝灰岩の本場ともいえる地域であるにもかかわらず石材は硬質の安山岩系あるいは砂岩系の石が利用されている。石材の産出地については今後の研究を俟たねばならないが、側壁の石材に認められる矢穴痕跡は1619年と云う年代からみて、佐藤重聖氏の指摘する中国福建の石工技術をもった石工によるものと考えられる。

ところで中島楽章氏によって⁽³⁾、肥後四官墓の被葬者「郭濱沂」は加藤氏の時代に伊倉に来航した華人海商で、出身は福建省漳州海澄県三都とされた。また墓は地元では「シイカンサン」の墓と呼ばれており、肥後四官とよばれた朱印船貿易家に比定されている⁽⁴⁾。

この指摘と、墓地の特徴を考え合わせると、肥後四官墓は被葬者「郭濱沂」の故郷の墓地を伊倉で再現するために石工を含めた墓地の選地を占う風水師を福建南部から招いて墓地を築造したという想定が可能となる。その際石材は日本で調達したのか、故郷から搬入したのかと云う問題が残るが、その問題は、今後の課題に残された。

- (1) 佐藤重聖2012「石材加工技術の交流」『寧波と宋風石造文化』汲古書院
- (2) 琉球王国時代に沖縄に中国泉州から輸入された石造物の破片を浦添市教委の御高配で実見した（田中・三谷）が、玉名の唐人墓の石材とは異なっていた。
- (3) 中島楽章2009「有明海の福建海商」『日本歴史』736 吉川弘文館
- (4) 森山恒雄・村上晶子2005『玉名市史』通史上



写真6



写真7



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16

3 林均吾墓

荒木 隆宏

1) 位置と環境

明人林均吾墓は、金峰山地から北西に延びる尾根筋先端部斜面に位置する。

現況では蜜柑畑として利用されている斜面の下部にあたり、墓碑の中央で標高9.5m、周辺道路からの比高差は5mほどである。丘陵一帯は、傾斜が急な東側斜面を除いて階段状の蜜柑畑となっており、戦後に大幅な地形改変がなされている。

現在の表記では「玉名市天水町部田見字城ノ平」に位置し、「米山（こめやま）」と呼ばれる地区に含まれる（P26図1）。北側の細長い谷間に「米山」集落があり、谷奥には「唐人口」の地名があったという⁽¹⁾。谷間には小川が流れ、谷の出口付近で尾田川と合流する。そこには小字「舟屋崎」があり、田邊哲夫は伊倉津まで船が漕上していた近世初頭頃の船溜まりの存在を想定している⁽¹⁾。なお、「米山」の由来について、朱印船貿易が行われていた頃に当地の海岸線で米を積み出していた事による、との言伝えがある⁽²⁾。現在では、近世～現代の干拓により海岸線は遠くはなれている。

周辺に中・近世墓は見当たらず、墓地として利用されてきた形跡は認められない。ただし、林均吾墓から東へ20mほど離れた谷間で斜面上から転落したような状態の自然石の板碑1基を確認した。風化のため判読し難いが、円の線刻と釈ではじまる戒名の銘が確認できる。この周辺200m四方は埋蔵文化財包蔵地は確認されていないが、尾根を400mほど南へ登った最高所には「経塚古墳」があり、付近一体は「赤崎城」が存在したと想定されている⁽³⁾。

2) 過去の調査

林均吾墓は、その子新作が元和7年（1621）に建立したものであることが、その墓碑銘から知られている。

この墓の存在は古くから知られており、近世の地誌類に記述がある。『新編肥後国志草稿』（享保13年、1728年）には立花村の項に「林均吾墓」として「当村の内大塚と云所に在唐人の墓と云り」と墓碑銘を記している。『肥後国誌』（安永1年、1772）ではさらに墓碑の法量を記し、「子孫当村の農家にありと云ふ」と伝えるが、現在、子孫の伝承が伝わる家は知られていない。『玉名郡誌』（大正12年、1923）には「先年悪徒ありて之を発掘せりと、石材等散乱墓石は叢中」とあり、この頃すでに荒廃していたらしい。

このように、墓碑の大きさや墓碑銘については古くから知られてきたが、墓域の形状や構造については注意されていなかった。そこで、2010年3月には、玉名市教育委員会により実測と周辺（20m×14m）地形測

量調査が実施された⁽⁴⁾。この調査では、立面図の作成に着手した時点で調査担当者異動のため中断し、平面図のみの作成に終わっている。現在、墓は玉名市指定史跡「明人林均吾墓」（2010年4月21日告示）として保護、管理されている。

本稿掲載の実測図は、この玉名市調査による平面図を基に、本研究メンバーにより2013年2月16日に作成した立面図を組合わせたものである。なお、平面図は以下に述べる過去の調査写真を参考に一部改変している。

これまで本格的な調査歴は皆無であるとの認識であったが、最近になって過去に発掘調査が実施されていたことが判明した。ただし、調査主体及び正確な調査時期や目的、内容は不明である。2012年、筆者らは別件の資料調査中、偶然に過去の調査写真を発見した。これは玉名市立歴史博物館ころもピアが保管する県立玉名高校考古学部資料中の写真アルバムに含まれていたもので、発掘調査中及び調査前のものとみられるスナップ写真19枚である（以下、「旧調査写真」という）。調査前とみられる写真と調査中の写真を比較すると原位置をとどめていないとみられる石材を移動させていること、現在は地中にある墓碑下部の石材などが露出していることから、掘削を伴う調査であったことがわかる。また、メジャーテープや水糸が張られていることが確認できるため、実測図も作成された可能性が高い。旧調査写真に写りこむ複数の人物は玉名高校考古学部員であったことが確認できたことから、彼らが在学中か卒業後の1970年代前半頃のものと推定される。詳細については今後の確認作業に期したい。

3) 墓の構造

墓の構造は部分的に不明な部分があるものの、その形状は中国福建省南部の様式と共通性を有するとされる玉名市伊倉北方所在の「肥後四位官郭公墓」（郭濱沂墓）に類似している。

北に面する斜面を利用して地面を凹字状に掘り窪め、中央に上辺が緩やかに湾曲する長方形の墓碑を立てる。墓域規模は現状で東西7m、南北7mを測る。

墓碑には出身地を表す「龍郡」及び「元和七年林均吾墓 男新作立」との銘が彫られている。墓碑の大きさは幅約36cm、現況地上高で約55cm、厚さ約16cmである。旧調査写真から本来の墓碑の高さを推定すると72～73cm程度となる。墓碑の下部には方形の基礎石が存在する。なお、現況では墓碑の中心が墓域を構成する石組みの中心線からやや左にずれている。旧調査写真により墓碑の基礎となる方形の石の中心からも左にずれていることが確認できるため、本来は中央に据えられていたものと考えられる。

墓域は墓碑を頂点として「凸」字状に左右2段の広がりを持つ。凸字の上半部にあたる墓碑前面の空間



全景



墓碑



正面

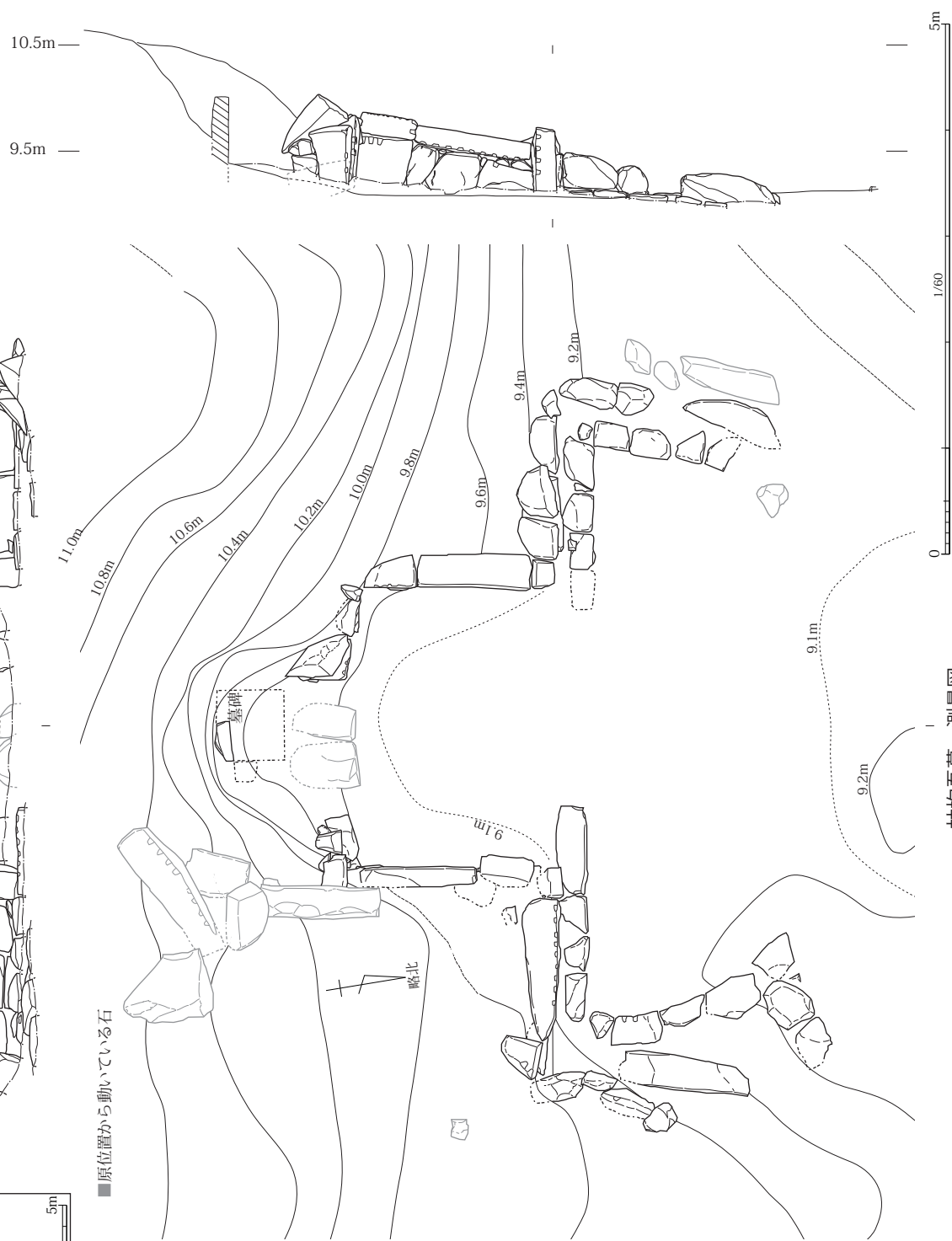
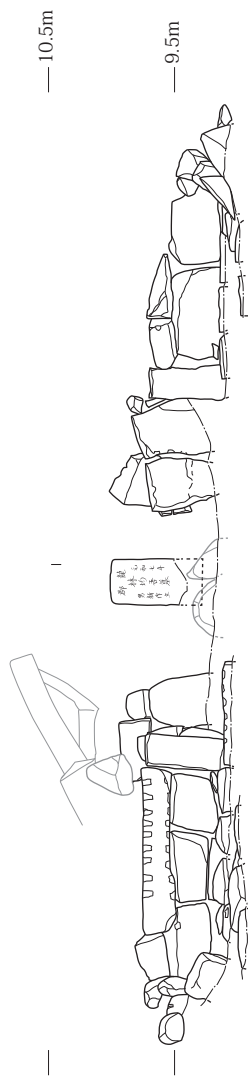
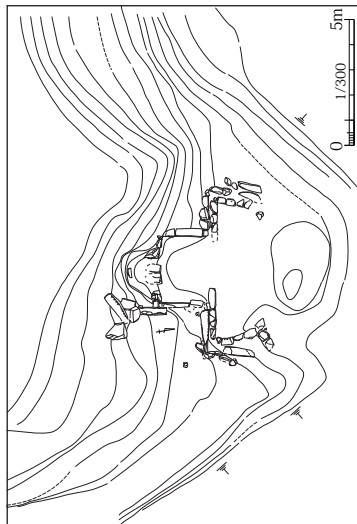


側面（東から）

熊本県玉名市林均吾墓（現在）



林均吾墓（1970年代前半頃）



林均吾墓 測量図

は2段の側壁に囲まれ方形の狭い前庭部を形成する。側壁の屈曲部に角柱状の石材が立てられているほか、概ね横長の石材を2段に重ね、手前側の広がり（前庭部）の内側にはさらに上部のみが地表に露出する石列が連なる。入口側が埋没しているため詳細は不明だが、内側に湾曲しながら囲み、横長の長方形を呈す前庭部を形成するとみられる。また、左側手前端部はくの字状に屈曲し、現在もこの墓への登り口として利用している小道の窪みに沿っていることから、墓本来の参道の痕跡を留めているものと考えられる。

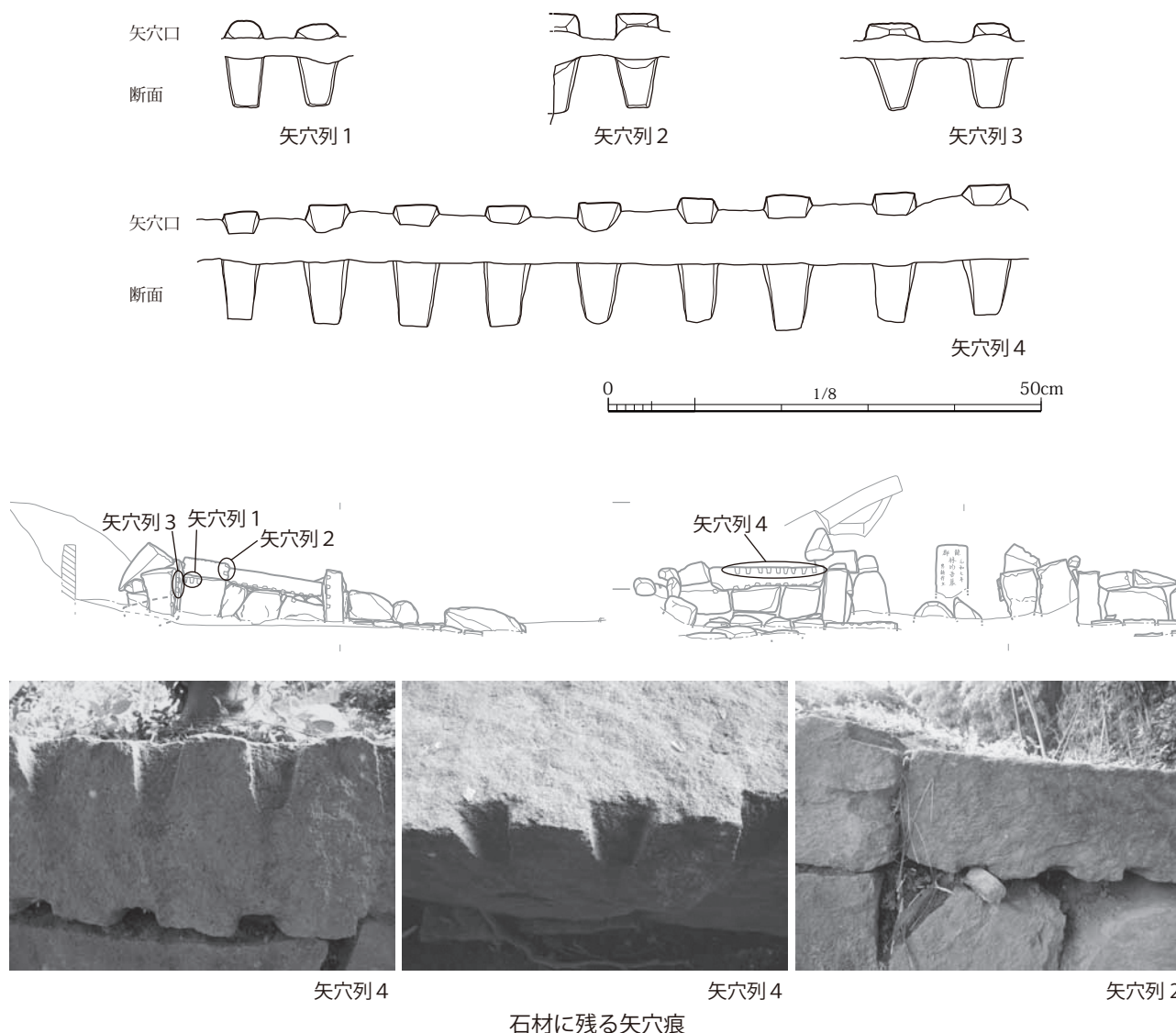
この前庭部の内側の石列は現状ではほぼ地中に埋没している状態であるが、墓が構築された当時は肥後四位官郭公墓のようにこの前庭部が一段低い空間であったとするならば、側壁を形成するものの可能性がある。

現況では、墓碑背後には空間が無く、すぐに墓域周辺と同じ斜面地になっており、墳丘や埋葬施設などの痕跡は認められない。

墓碑の手前両脇の部材は、現況では向かって右側は2石2段を配しているのに対し、左側は1石のみであり非対称である。旧調査写真中では左側にも2石存在

することから、左右対称の配置であったことがわかる。形状から、現在墓碑手前に倒れている2石がそれに相当するものとみられる。

この他にも、墓碑左手の墓域外に石材が散乱している。これらは墓域を構成する側壁に用いられている石材と同種の石材であり、明瞭な矢穴列が残る。なかでも柱状に加工された石材が2点あり、ほぼ同型の石材が側壁中3箇所に見られることから、同様の用い方をしていたと考えられる。現状では凸字の右肩部分の石材が乱れており、左手に比べ石材が少ないことから、本来この部分に用いられていたものの可能性がある。また、大きさ、形状とも多様な石を組み合わせる墓域全体を連続的に構築していながら、墓碑の周辺だけに石組みがみられない。現況で墓碑のすぐ脇に散乱しているこれらの石材は、墓碑周辺に配されていたものである可能性も考えられるが、旧調査写真では、その調査前・調査中ともに現在の位置に確認できない。そのため、旧調査時に原位置を留めていないと判断され墓域内からここへ積み上げられたのであるとすれば、その可能性は低いとみるべきだろう。現況と旧調査写真



の状況からすると、側壁も一部積み直し等を行っている可能性を否定できない。

なお、立面図には明らかに原位置を留めていないと判断した石材は省略している。

石材には明瞭な矢穴列が観察できるものが複数ある。これらは矢穴間隔が狭く、さらに矢穴の幅や深度が同時代資料と比較し小ぶりで特徴的であるため、立面図作成時に部分的ではあるが個別に実測図を作成した。

いずれも縦長台形状の断面形状を呈す。正面図の矢穴列（矢穴列4）は長側辺平均45ミリ前後（30～50ミリ）、最大幅平均50ミリ前後で、矢孔底の幅平均28ミリ前後（26～30ミリ）、矢穴深度は平均70ミリ前後（65～73ミリ）を測る。側面の矢穴列（矢穴列1～3）は長側辺で平均37ミリ前後（20～48ミリ）、最大幅が平均50ミリ前後（45～64ミリ）、矢穴底の幅平均23ミリ前後（16～27ミリ）、矢穴深度が平均58ミリ前後（55～64ミリ）を測る。

4) 林均吾と林三官について

地元郷土史家の中川斎は、この「林均吾」を朱印船貿易家として知られる「林三官」と同一視しており、『玉名郡誌』（大正12年、1923）や自らの著書⁽⁵⁾では玉名に残る3基の唐人墓について「四位官の墓」、「振倉の墓」とともに「三官の墓（林均吾墓）」として紹介している。また、玉名市北牟田の字「三官」について、唐人屋敷或いは墓所の跡ではないかと指摘した。

林三官は慶長9～12年（1604～1607）の間に5回にわたり渡海朱印状を得たことが知られる人物であり、現在、林均吾はその一族と考えられている⁽⁶⁾。林三官は、西洋（マカオ）、呂宋（フィリピン）・占城（ベトナム）などへ朱印船を出しており、広範に交易をおこなっていたが、慶長12年（1607）にはすでに死去したとみられている。また、「本妙寺文書」には、加藤清正の船で暹羅（シャム）へ渡った船主「林右」の名前がみえる。「三官」の地名は当該地北部に位置する玉名市伊倉の西方、字北牟田にあり、熊本市河内町船津にも「三官屋敷」という地名があったという。このことから林三官一族は、河内及び伊倉・高瀬地域を本拠に活動したと推測されている⁽⁶⁾。さらに、中島楽章は「龍郡」を福建省漳州付近の龍溪県と想定し、さらに林三官の本名が林耀吾であると指摘した上で、やはり林均吾との同族関係の可能性を考えている⁽⁷⁾。

本稿は荒木隆宏（玉名市役所）が執筆したが、末永崇（玉名市教育委員会）の協力、助言を得た。また、竹田宏司（玉名市役所）、村上晶子（玉名市立歴史博物館こころピア）、佐藤夕香（同）各氏からも協力を得た。

- (1) 田邊哲夫によれば、現在小字名としては残っていないが、宝暦14年（1764）2月『立花村田畑下名寄御帳』に「唐人口」とみえるという（田邊哲夫「菊池河口の湊の変遷について（私案）下」『高瀬湊関係歴史資料調査報告書』（2）玉名市 1988）
- (2) 『管内実態調査書 城北篇』熊本県警察本部警務部教務課 1959
- (3) 中村安宏編『天水町遺跡地図』天水町文化財調査報告第3集 天水町教育委員会 2004
- (4) 荒木隆宏「明人林均吾墓」『玉名市内遺跡調査報告Ⅶ』玉名市文化財調査報告第24集 玉名市教育委員会 2011
- (5) 中川斎『加藤清正公と菊池川の文化』樂只亭文庫 1927、中川斎『小天郷土史』天水町公民館 1953、『玉名郡誌』熊本県教育会玉名郡支会 1923
- (6) 森山恒雄・村上晶子「加藤政権の支配」『玉名市史』通史編・上巻 玉名市 2005
- (7) 中島楽章「有明海の福建海商」『日本歴史』第736号 吉川弘文館 2009

第4節 鹿児島県南さつま市坊津町泊^{とまり}の唐人墓

橋口 亘

1. はじめに

鹿児島県南さつま市坊津町泊には、唐人墓と伝えられる墳墓が残されている（坊津町郷土誌編纂委員会編1969）。本稿では、2004年8月に坊津歴史資料センター輝津館で開催された、海洋信仰史研究会公開研究会での発表資料（橋口亘2004）と、2005年7月刊行の『南日本文化財研究』No.1に掲載された拙稿「鹿児島県坊津町泊の唐人墓―南九州の港町に築かれた中国式墳墓―」（橋口2005）を基に、新知見の加筆と修正を加え、この唐人墓（以下「泊唐人墓」と記す）について、紹介と考察を行いたい。

2. 泊唐人墓

泊唐人墓については、『坊津町郷土史』上巻（（坊津町郷土誌編纂委員会編1969）が、「高さ一、直径一・五メートルの円型石で外部を囲み内部は盛土され、正面に銘碑あり唐人墓と伝えられている、珍しい円形の墓で当地では他に類例をみない。」と紹介している。

2004年、橋口（筆者）は、天理大学の藤田明良氏と共に『坊津町郷土誌』上巻に紹介されている泊唐人墓を、郷土誌の記載等を頼りに探索し、現況を確認した。同年7月、橋口は中国福建省福州市等で同地の亀殻墓を実見する機会を得、中国の亀殻墓や沖縄の亀甲墓等との比較から、泊唐人墓の特徴等について、前掲の拙稿（橋口2005）で考察を行い、下記の①～④を指摘した。

- ①墓前面中央の楕形石碑の存在などから、沖縄の亀甲墓とは系譜が異なり、福建省など中国東南部の墓碑を持つ墳墓から直接的な影響を受けた墓型式、亀殻墓の一種と考えられる。
- ②墓前面の壁が、石碑の左右に限らず石碑の上まで及び、石碑の上・左・右が壁で囲まれている点で、福建省福州市の琉球人墓（琉球人を葬った墓であるが形は中国式）などの形態に類似する。
- ③中国東南部などで、墓前面の壁の背面をなだらかな傾斜で墳丘方向へ落とす形状の墓を構築する地域との関連が考えられる。
- ④この種の中国式墳墓を築くレベルの唐人コミュニティが、薩摩坊津に存在した可能性を示唆するものである。

3. 形態的特徴

泊唐人墓の形態については、前掲の橋口論文（橋口2005）において、下記の①～⑥及び、後述するような特徴がまとめられている。

- ①墳丘を持つ。
- ②墓前面壁部分を除く墳丘周縁部は、階段状の帯（「三合土」製か）によって馬蹄形に囲まれている。
- ③墳丘上部付近の表面は、三合土で覆われているとみられる。
- ④墓前面中央に楕形石碑が設置されている。（石碑：縦が約64cm、幅が約27cm）
- ⑤墓前面に壁（「三合土」製か）が作られ、楕形石碑の周囲（上・左・右）を囲む。（壁：高さ約90cm）
- ⑥墓の前後方向幅は墓前面壁を含み約180cm、墳丘部分の高さ約65cm。

墓正面から向かって右半分の墳丘部分は、腐葉土等の堆積により埋もれ、詳細が確認できない状況である。

墓前面壁部分以外の墳丘周縁は、砂礫を多く含む硬質の部材（三合土：コンクリート状の建築材）で造られた階段状の帯で馬蹄状に囲まれていたとみられ、段が少なくとも2段は確認できる。帯を観察すると、墳丘のカーブに合わせて丁寧に曲面が作られている。墳丘上部付近については、腐葉土等の堆積のため、一見すると土が剥き出しの土壌のようにも見えるが、墳丘の上部付近には、割れた板状の三合土とみられる部材が確認でき、墳丘上部付近の表面も三合土で覆われていたとみられる。

墓前面中央の石碑は、やや赤味を帯びた石材で作られ楕形を呈している。碑面は風化が進み、碑文では「墓」とみられる文字がかるうじて確認できる。

周星氏が「沖縄の亀甲墓には墓碑がなく」（周星（何彬・小熊誠訳）1996）と指摘しているように、沖縄の亀甲墓の多くは墓前面中央に石碑を持たないため、泊唐人墓はこの点において、沖縄の亀甲墓よりも、墓碑を持つ中国の墓に類似すると言える。

泊唐人墓の楕形石碑の周りを囲む壁（高さ約90cm）の形状は、福建南部や台湾などの墓にみられる墓碑左右の墓耳に類する。ただし、周星氏の論文に紹介されている福建省金井鎮にある「三合土」製の「亀殻墓」などの墓耳が、墓碑の左右に限定され、墓碑頭部が天に抜けているのに対し、泊唐人墓の場合、左右に加え頭部に至るまで石碑の周縁が壁で囲まれており、この点では福建省福州市に所在する琉球人墓（琉球人を葬った墓であるが形は中国式）等がこの形状に近い。

一方で、泊唐人墓の石碑周囲を囲む壁の背面の形状は、非常に特徴的といえる。墓前方、表側の壁面が垂直に下方向へ落ちているのに対し、背面側はなだらかな傾斜で墳丘方向へ落ちている。この墓の系譜を辿るうえで、重要な属性と考えられる。

泊唐人墓の後方には、高さ数十センチの段差があって、墓が建つ平場よりも、墓の後方に広がる平場が一段高くなっている。墓の左には道が通っており、段差を登ると後方上段にも道が続いている。

墓の左右には、墓の建つ平場に比べてやや高くなった部分がみられ、墓の後方の段と左右の高まりを一連でとらえると、唐人墓の墳丘を後ろから遠巻きに囲む「塀」のようなものに相当する部分である可能性も考えられる。墓前方部には、「庭」相当のスペースが形成されている。現代製の花筒が置かれ、現在でも墓参対象となっている。

玉名の唐人墓では、墓周囲の表土面清掃によって、墓の周辺に構築された遺構が確認されたケースがあり（調査を担当された末永崇氏から図面・写真画像を交えてご教示いただいた）、泊唐人墓についても、こうした方法で遺構が確認できる可能性がある。

4. 立地

泊唐人墓は、泊川の方角（南方向）に下る舌状地形の先端部の上端付近に平場を設けて造成されており、唐人墓の正面はおおむね南向きとなるように構築されている。風水思想などによって、墓の構築場所が選定された可能性がある。

泊唐人墓の立地については、『坊津町郷土誌』上巻（坊津町郷土誌編纂委員会編1969）では、松下家墓地内とされているが、この松下家と泊唐人墓の関係については、詳細不明である。松下家は、承応（1652～1654）頃に財部から移住してきたと伝えられる泊衆中の一家で、噺などを輩出した家柄である。

泊唐人墓が残る山林の南側には、臨濟寺院の海印寺が所在していたとされる。泊唐人墓の近くには、中世の宝篋印塔の相輪部等が残されており、松下家が泊に移住してくる以前に、泊唐人墓の所在する地点付近が、すでに海印寺に関係する墓域であった可能性があり、松下家が泊に移住する前に泊唐人墓が築かれていたとすれば、海印寺に関係して泊唐人墓が築かれた可能性が高い。また、松下家の泊移住後に泊唐人墓が築かれた場合でも、泊唐人墓が、松下家ではなく海印寺に関係して築かれた可能性がある。

5. 構築年代

泊唐人墓の構築年代の推定は容易ではない。その大きな理由の一つとしては、日本国内他地域に残る唐人墓、例えば長崎に残る唐人墓や玉名に残る唐人墓とは形態的に異質な点が多いことから、単純に比較できないという問題が挙げられる。

後述するような、中国式墳墓を築くレベル（規模）の中国人コミュニティの存在を、泊に唐人墓が築かれる前提としたうえで、泊唐人墓がいわゆる「鎖国」体制完成後に築かれたと仮定すれば、「鎖国」体制完成後の坊津地域において存在は困難と思われる中国人コミュニティが、「鎖国」体制完成後にも坊津地域に存在した可能性を考慮しなければならなくなる。「鎖国」体制完成後の坊津地域にこのような中国人コミュニ

ティが存在した可能性を一概に否定はできないが、現状ではあくまで可能性の範囲にとどまる。こうしたことなどから、今のところ、泊唐人墓の構築年代については、暫定的に17世紀前期を中心とする中世末～近世初頭頃である可能性を考えておきたい。

6. 唐人墓をとりまく歴史的環境

文禄3年（1594）から翌年まで、坊津に配流された京都の公家、近衛信輔（信尹）の日記「三藐院記」には、「及晩唐人五六人來ル、詩を作カ、セテ見物」（「三藐院記」文禄三年五月廿五日条）、「午剋泊ノ南江唐人水サタウ、又塩・沙唐・ミリン酒ナト持参」（同六月廿六日条）など、坊津の信輔のもとを唐人が訪れ、作詩の披露や氷砂糖等を持参したことが記される（近衛通隆・名和修・橋本政宣1975）。こうした記述からは、文禄当時の坊津における唐人の活動がうかがわれ、信輔に作詩を披露した「唐人五六人」や、氷砂糖等を持参した「泊ノ南江唐人」などの記録は、泊唐人墓が築かれた歴史的環境・背景を考える上で大変興味深い（橋口2005）。

近世初頭における坊津地域と明国間の通航については、慶長5年（1600）に行われた坊津の鳥原宗安による浙江省への明人送還（渡辺2006）のほか、慶長13年（1608）には福建泉州の商人「許麗寰」が久志から帰航しており（鹿児島県1940）、また、慶長14年（1609）の坊津への唐船来航記録（異国日記刊行会編1989、松浦2007、橋口2010）なども知られる。

こうした記録は、泊唐人墓が築かれた歴史的環境・背景を考える上で重要であるが、単に当該地域における唐人（中国人）の存在という事象をもって中国式の墳墓が築かれるとは限らない。亡くなった唐人を中国式の墳墓に埋葬しようとする存在が無くては、中国式の唐人墓は築かれないはずである。橋口2005でも指摘しているように、少なくとも、中国式の墳墓を築くレベルの唐人（中国人）コミュニティが泊に存在したのではないかと考えられる。

7. おわりに

泊唐人墓については、墓の外郭プランの把握や構築年代の推定など、残された課題は多い。今後、実測図の作成等、さらに調査研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 異国日記刊行会編1989 『影印本 異国日記一金地院崇伝外交文書集成一』 東京美術
- 鹿児島県1940 『鹿児島県史』第二巻 鹿児島県
- 下野敏見1989 「東アジア葬・墓制小考―韓国の草墳と琉球の風葬、他」『隼人文化』第22号 隼人文化研究会
- 下野敏見1989 「東アジア葬・墓制小考―殯の問題

および韓国の草墳と琉球の風葬』『東シナ海文化圏の民俗』第三章三節 未來社

周星(翻訳:何彬・小熊誠)1996「椅子墳と亀殻墓」『南島文化』第18号 沖縄国際大学南島文化研究所

※周星1995「椅子墳與亀殻墓」『江浙漢族喪葬文化』付録(中央民族大学出版社)の翻訳

周星2003「福建省の亀殻墓と風水」『アジア遊学』第47号 勉誠出版

坊津町郷土誌編纂委員会編1969『坊津町郷土誌』上巻 坊津町

近衛通隆・名和 修・橋本政宣1975『三藐院記』史料纂集 続群書類従完成会 平文社

橋口 亘2004「鹿児島県川辺郡坊津町泊の唐人墓」海洋信仰史研究会公開研究会発表資料

橋口 亘2005「鹿児島県坊津町泊の唐人墓―南九州の港町に築かれた中国式墳墓―」『南日本文化財研究』No.1 『南日本文化財研究』刊行会

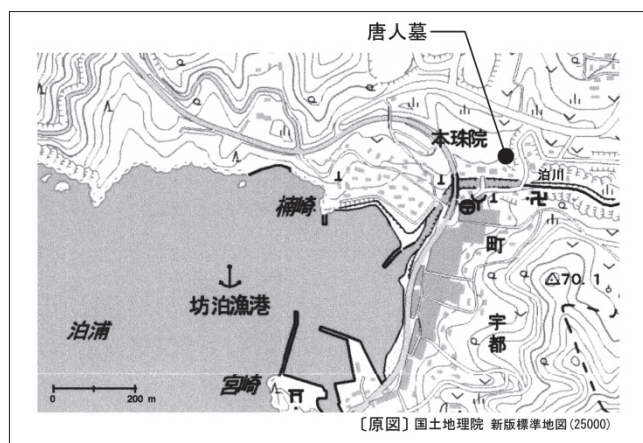
橋口 亘2010「慶長14年坊津来航の明船の積載品目」『順風往来―薩摩をめぐる東アジア海域交流史―』輝津館企画展図録論集 南さつま市坊津歴史資料センター輝津館

松浦 章2007『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版

渡辺美季2006「鳥原宗安の明人送還―徳川家康による対明「初」交渉の実態―」『ヒストリア』202号 大阪歴史学会

謝辞

本稿作成にあたり、唐人墓調査についてご快諾いただいた松下氏、本稿執筆の機会を与えてくださった田中裕介氏をはじめ、大石一久氏、李桓氏、荒木隆宏氏、末永崇氏、三谷紘平氏の各氏にお世話になりました。文末ながら記して感謝いたします。



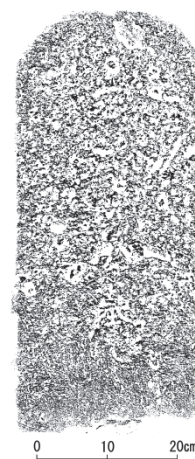
泊唐人墓 位置図



泊唐人墓 写真画像①(正面方向から)



泊唐人墓 写真画像②(正面方向から左方向から)



泊唐人墓 墓碑拓本



中国福建省福州市内の琉球人墓

第3章 華南様式の墓地

第1節 黄檗宗の墓地

三谷 紘平

はじめに

長崎を中心に西九州沿岸部にいくつか存在する唐人墓は、朱印船貿易などの流通の担い手であった中国商人が、自身の出身地である華南地方の習俗を持ち込んで建造した墓地様式である。近世初頭までは伊倉や坊津などの湊でも貿易が行なわれ、唐人町が形成されたが、寛永十二年（1635）に外国船の入港が長崎のみに限られると、唐人たちは長崎に居留するようになった。長崎唐人町を形成した彼らが自身や先祖の菩提供養のために母国から招請したのが、明末清初の中国仏教界において飛躍を遂げ、臨済正宗を称した黄檗宗の禅僧たちであった。中でも福建省福州県の黄檗山萬福寺住持であった隠元隆琦の渡来は日本仏教に大きな影響を与え、幕府の外護を受けて京都宇治に本山黄檗山萬福寺を開創するに至った。1000を超える末寺を持つ一大宗派に成長した黄檗宗は、明清の文化を取り入れており、また、招請された住持には華南地方出身の僧が多かった。そのため、渡来僧の開山墓には華南地方の墓地様式を踏襲したものがみられる。本稿では近世初頭の黄檗宗の展開とその墓地様式について報告する。

I 黄檗宗の展開

（1）長崎の黄檗寺院

長崎に居留した唐人は、出身地ごとに共同体を形成し、その中心に祠堂を設け、媽祖像を安置して航海の安全を祈願した。媽祖とは華僑が信仰した航海や漁業を守護する女神である。この媽祖堂に先祖供養などの仏教的機能が付与されることにより寺院としての性格を持つようになった。こうして成立したのが唐寺である。長崎に建立された唐寺には、南京出身者の興福寺、泉州出身者の福濟寺、福州出身者の崇福寺などがあつた。興福寺は元和六年（1620）に渡来した真円が、福濟寺は寛永五年（1628）に渡来した覚海がそれぞれ媽祖像を安置する小堂を結んだことが始まりとされるが、かれらは元来商人として渡来していたようで、長崎に居留する唐人たちのために寺院を開いたという。

初期の唐寺は共同体が信仰する祠堂にすぎなかったが、幕府によって寺請制度が設けられると、寺院として整備する必要に迫られた。唐人たちは、同郷から禅僧を招請し、唐寺を禅院として伽藍の建立や整備を行なった。興福寺には寛永九年（1632）に黙子如定が、福濟寺には慶安二年（1649）に蘊謙戒琬が、崇福寺には寛永六年（1629）に渡来していた超然が招請され、禅院としての形をなしていった。

（2）隠元隆琦の来日と黄檗山萬福寺の開創

長崎の唐寺には、住持の示寂のたびに中国から禅僧が招請された。しかし、正式な臨済宗の嗣法者の入寺には至らなかった。そこで、長崎唐通事や唐寺三カ寺の檀越らは、福建省福州府福清県の黄檗山萬福寺住持である隠元隆琦の招請に動き出したのである。隠元隆琦は明末清初の中国禅刹で勢力をのびし「臨済の再来」と絶賛された密雲円悟の禅風を師承した僧で、それまでの教禅一致の融合思想で行なわれてきた中国禅ではなく純粹化された臨済禅を継承していた。密雲の門派は太白山天童寺・金粟山広慧寺・黄檗山萬福寺などを拠点としており、隠元も師である密雲や費隱通容の後を継いで萬福寺に住していた。

隠元の招請には長崎興福寺三世住持であった逸然性融が招聘状を送り、承応三年（1654）に隠元は長崎に渡来し、興福寺に普山したのである。興福寺・崇福寺で住持を務めたのち、妙心寺派の摂津国普門寺に住した。隠元を普門寺に招いた龍溪性潜は、妙心寺の住持も務めた高僧であったが、中国純粹禅の師承者である隠元に師事した。そして、この龍溪が幕府に働きかけ、隠元のための一寺建立に結びつくのである。隠元は江戸にて将軍徳川家綱に謁見し、これが機会となって、万治三年（1660）に京都宇治の地が下賜され、翌年、徳川家綱を開基として黄檗山萬福寺が創建されたのである。隠元は開山第一世となり、中国明朝の伽藍様式や渡来仏師范道生による黄檗様彫刻が取り入れられた。萬福寺は隠元の後も、渡来僧が多く普山する黄檗宗の本山として勢力を大きくしていった。

II 黄檗宗の墓地形式

（1）萬福寺の塔所

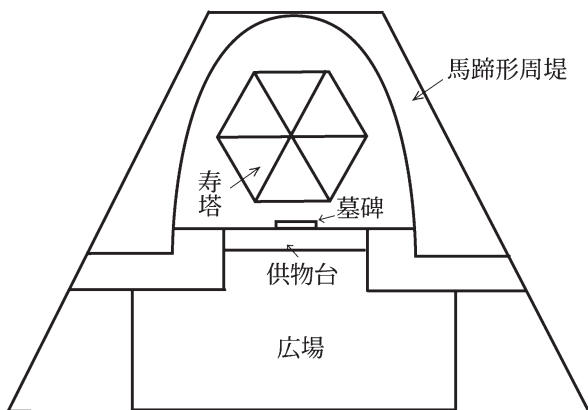
① 開山寿塔（隠元隆琦塔所）

隠元隆琦（1592～1673）は寛文四年（1664）に萬福寺住持を木庵に譲り、塔頭松陰堂に退隠した。その前年、自らの墳墓を築造し、寿蔵と名付けた。霊元天皇より真空塔の額を頂戴している。塔の構造は本瓦葺きの六角堂で、屋根は宝形造となっている。しかし注目したいのはその塔が建つ墳墓の形状である。この寿蔵は、重要文化財に指定されている。

まず、階段を上ると墓前の広場（祭祀場か）があり、広場は側壁によって二区に分かれている。奥の場には供物台があり正面に墓碑が建つ。墓碑には「開山隠元老和尚塔」と刻まれている。墓碑の後方に六角堂が建てられ、それを囲むように馬蹄形に石垣が積まれている。いわゆる唐人墓で言う所の墓亀・墳丘にあたる場所が六角堂となっており、現在開山堂に安置されている木造隠元隆琦倚像は本来この寿蔵に安置されていた。



萬福寺開山壽塔



萬福寺開山壽塔模式図

② 万寿院開山塔（木庵性瑠塔所）

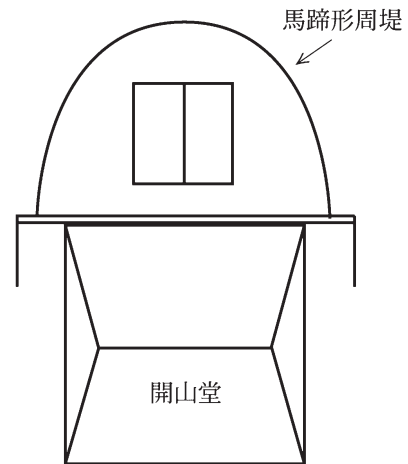
萬福寺二世住持の木庵性瑠（1611～1684）は福建省泉州の出身。隠元に嗣法し、師に招かれて明暦四年（1655）に渡来した。初め長崎福濟寺に住持し、摂津普門寺を経て萬福寺に入山した。延宝八年（1680）に席を慧林性機に譲り、塔頭万寿院に退隠した。天和四年（1684）に示寂し万寿院に葬られた。

万寿院の開山塔は方丈に開山堂が付随する一般的な禅宗寺院にみられる塔頭型式であるが、その開山堂が建っている場所が墓地の前庭にあたる。開山堂の中央奥には厨子があり木庵の頂相が安置されている。その



万寿院開山堂内部

後方には切石で積まれた墓の壁面が見え、ご住職の泰山智深氏の話では頂相の裏には石の扉（もしくは碑か）があるという。墓は後方が馬蹄状を呈しており中央に屋根がかけられている。開山堂が付随するため、詳細な墓地の様相はわからないが、正面に石の扉もしくは碑があるとすれば、後述する崇福寺普同塔や千年寺鐵堂和尚塔のような構造であると考えられる。



万寿院開山塔模式図

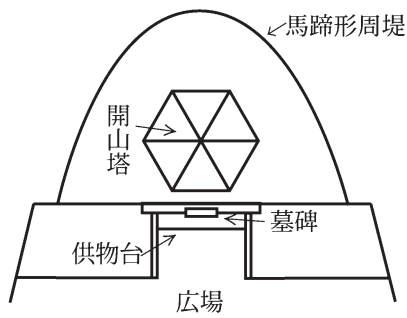
③ 獅子林院開山塔（独湛性瑩塔所）

四世独湛性瑩（1628～1706）の塔頭獅子林院も開山壽塔と同型式の墓地である。独湛は福建省興化府の出身で、隠元に随行して日本に渡来した。天和元年（1681）に萬福寺住持となり、元禄五年（1692）に獅子林院に退隠した。宝永三年（1706）に示寂。

開山塔は隠元の寿塔と同じく六角塔で、墓地の中央に建っている。二区の広場を有し、正面に供物台と墓碑がある。墓碑には「黄檗四世独湛老和尚塔」と刻銘があり砂岩製である。塔の後方は馬蹄形に石垣が積まれ、やはり華南様式の墓地の特徴をもっている。



獅子林院開山塔



獅子林院開山塔模式図

(2) 崇福寺の住職墓地

①住職墓地

長崎の崇福寺は寛永六年（1629）に福建省出身の商人たちにより招請された僧超然によって開かれた唐寺である。超然の後、百拙如理、道者超元が住持を務め、隠元隆琦が住持として招請されると正式に黄檗宗寺院となった。

境内には福州出身者の唐人墓地があり、華南様式の墓も多くみられる。崇福寺にて葬られた住持の墓地も同じく境内墓地に広がっている。様式としては、馬蹄形の周堤中央に墓碑を埋め込むタイプと、馬蹄形に空間を取り、空間の中央に和風の墓塔を置くタイプが見られる。



玉岡崑公大和尚塔



循本伝老和尚塔

崇福寺では、江戸時代を通じて一般人の墓は唐人墓なのだが、住職墓は、和風の墓塔が用いられるようになるようで、一般の墓とは区別されている。

②普同塔

住職墓地のなかにひととき巨大な墓があり、中央の碑に「普同塔」と刻まれている。元禄八年（1695）に唐僧千呆性佉が崇福寺を離れて本山萬福寺の六世に就任しようとするときに、崇福寺に残る弟子のため遺囑語を書いた。その中に僧はいちいち立塔せずし普同塔に入るように指示したという。そのため千呆派の僧たちはみなここに葬られたといわれている。

墓は背後に馬蹄形の周堤を持つ華南様式を示し、二区の広場が側壁で区切られている。正面には普同塔と刻まれた碑が埋め込まれ、碑の左の石には取手がつけられていることから、内部空間があることが推測される。おそらく墓室があって、取手のついた石は追葬するための扉だろう。碑の上に梁が横たわり蓮のレリーフが浮き彫りされている。周堤に囲まれた墳丘は漆喰で固められ中央に石製宝珠が置かれている。



(3) 千年寺の鐵堂和尚塔（巻頭図版3下）

岡山県津山市にある長継山千年寺は、美作国津山藩主森長継が、寛文八年（1668）に創建した黄檗宗寺院で、自身の寿塔として建立したという。長継は、隠元に深く帰依しており、萬福寺二世の木庵性瑫を開山と

して、木庵下十鉄の一人である鐵堂道融を二世住持として招請し千年寺を開いた。また、長継は鐵堂を開山として森家菩提寺の本光寺を建立している。

千年寺と本光寺の関係だが、黄檗宗の末寺をまとめた『延享末寺帳』では、黄檗山塔頭万寿院の末寺として、

一 末寺壺箇庵 作州西北条郡田野村 除地
長継山千年寺

一 末寺式箇所 作州西北条郡一宮村 除地
瑠璃山本光寺

とあり、それぞれが木庵の塔頭万寿院の末寺として列記されている。しかし、『天保末寺帳』では、

一 天保八年西四月 同
無住ニ付同郡西一ノ 同州同郡下田邑村
宮村本光寺 千年寺
役法用 相勤申候 無住

とされており、天保八年（1873）には千年寺が無住となったため、本光寺が寺役法用を兼務していたことがわかる。

現在も千年寺は無住であり、本光寺が管理しているのだが、この千年寺の奥に二世住持鐵堂道融の墓がある。現在津山市指定史跡である。墓は円墳のような形状で、墳丘の全面に切石が積まれており、中央には墓碑がはめ込まれている。墓碑はあたかも石室の入り口のように篋形に組まれた石に、それを塞ぐように扉状



にはめ込まれ、「元禄十五年歳次壬午 當山第二代鐵堂融和尚塔 九月二十有三日」と銘が陰刻される。墳丘は馬蹄状の周堤が一重廻らされ、全体的な形状は唐人墓や亀甲墓に共通する。萬福寺の塔頭にみた華南様式の墓はみな渡来僧の墓地であり、故郷の習俗から導入されたことが考えられるが、鐵堂は美濃出身の日本僧であることから、千年寺の墳墓は、隱元の系譜を引く黄檗僧として師の墓になったものと思われる。黄檗禅の聖地への憧れもあったのかもしれない。

おわりに

黄檗宗は江戸時代になって創出された新しい宗派である。伽藍様式・仏像彫刻・清規などすべてが中国明朝風の仏教文化が日本にもたらされたのである。その背景にあったのは、鎖国によって長崎をその居住地と定められた唐人による禅僧の招請活動にあったが、その際に基本とされたのが、同郷の出身者ということであった。特に福建省の福州や泉州の出身僧が多く渡来し、黄檗宗を開く隱元も福州出身者であった。京都府宇治の萬福寺に残る隱元や他の渡来僧の墓地が唐人墓に通ずる形状を呈していることから、中国では墓が宗教によって左右されるものではなく、習俗的なものであることが想定できよう。ただ、崇福寺の住職墓に代表するように、時代が下がるにつれ、馬蹄状の囲みはのこすも日本風の墓塔が用いられるようになる。中国の一般的な埋葬が土葬であったのに対し、僧は火葬とされた（隱元の徒である即非如一は火葬され分骨されている）ことや、いわゆる黄檗宗の禅僧がはじめは渡来僧ばかりであったのが、日本の僧が多くなっていくことなどが要因にあるのではないだろうか。

参考文献

宮田 安『長崎墓所一覽風頭山麓編』長崎文献社1982

竹貫元勝『近世黄檗宗末寺帳集成』雄山閣出版1990

『黄檗宗大本山萬福寺歴代住持集』黄檗宗布教師会編2011

楠井隆志「黄檗禅の時代」（『特別展黄檗OBAKU京都宇治・萬福寺の名宝と禅の新風』九州国立博物館2011）

野口善敬「明末清初の中国臨濟禅 黄檗禅出現の背景」（同上）

3. 墓における装飾文字

墓における対句や横軸にあたる装飾文字が図3に数字で示し、各内容は表1にまとめた。
内容を考察してみると、1と1'、4、6と6'、8

と8'、9はこの土地の風水的な意味について述べているものであることが分かる（写真4、5）。ほかは幸福、長寿、隆昌、先祖への思いなどの内容となっている。

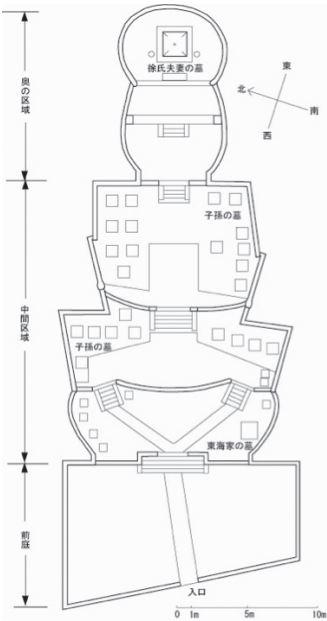


図2 東海の墓の平面図

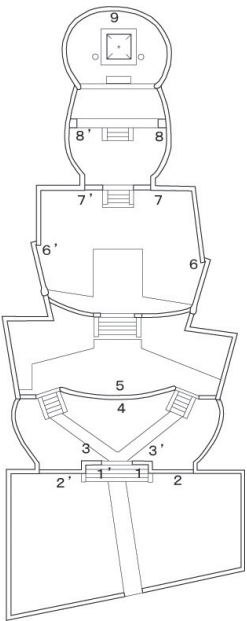


図3 装飾文字のある場所

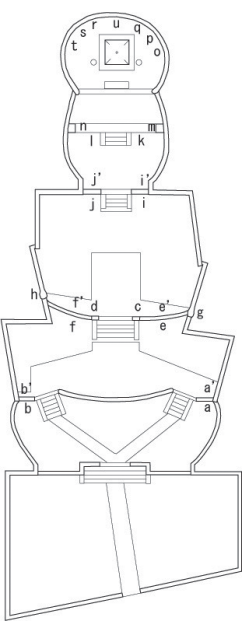


図4 紋様のある場所



写真2 徐敬雲夫妻の墓



写真3 楕円形の側壁に囲まれる形

表1 東海の墓における装飾文字

番号	漢文	字体	意味の解釈	備考
1 1'	萬年鼎戴山為案 一帶香崎海作砂	隸書	鼎のような山が「前案」をなし、山の連なりと海が「砂」をなす	「案」と「砂」は風水の概念で、周囲の構成的な意味を有する地形として名付けられる。
2 2'	福海流長不盡 壽山永代無彊	楷書	福は海のように途切れなくあり、不老長寿は山のように永遠に続く	幸福と長寿への願いを込めた句である。
3 3'	静観絢羅千古路 仰俯追思一念誠	草書	先祖のやって来た道を静観し、過去を記憶に銘じて忘れない	先祖への思いを大切にする句である。
4	江山正脈	行書	大地の正脈	「脈」とは風水の「龍脈」のこと
5	静鑒榮芳	行書	繁栄を鑑みる	繁栄を願う意
6 6'	坐向安然受福 兒孫自此榮昌	行書	良い向きにより、福が受けられ、これで子孫の代は自ずと繁栄、隆昌が続く	風水的な意味合いで、この墓の方角が良いと言っている。
7 7'	爲營寸地貽謀計 難報雙親罔極恩	楷書	小さな土地でもけちすれば、両親への恩返しができない	墓の建造に金銭を勘定し、けちすることが良くないという施主の理念を示すものである。
8 8'	地卜華山護衛佳 城龍自遠 澤流洑水朝宗東 浩世芙昌	隸書	華山（華岳山春徳寺）の地を選んで周囲の山による護衛が素晴らしく、背後の山は盛龍のように遠方から来ている。沢の流れが東海に流れ、これで永世の隆昌が続く。	龍脈に立地し、良い水を得るとは風水説でいう「藏風」、「得水」のことで、このような土地は将来において繁栄し続けるというである。沢の流れとは近くの鳴滝川のことではないか。
9	龍亦乘美	隸書	龍脈がまた優れており、これは美地である	この土地は龍脈に立地しているという。

4. 墓における紋様

紋様が施されている箇所は図4に表示している。装飾文字と同じく、各空間の入口に施される傾向が見られ、また、徐敬雲夫妻の墓の周りに集中的に見られる(写真8～13)。紋様の内容は表2にまとめ、そこに

意味についての解説を加えている。写真6は八卦の紋様で(図4のi)、7は狛犬の石造で(図4のg)、8は楽器の紋様(図4のt)である。楽器紋様の鼓(つづみ)は中国文様に見られず、江戸文様の影響が強いと考えられる。



写真4 「江山正脈」の装飾文字



写真5 「龍亦乗美」の装飾文字

表2 東海の墓における装飾文様

番号	内容	意味或いはイメージ
a	(正面) 松と竹、(裏面) 宝珠と祥雲	松：青々として、冬にも萎えない。強さの象徴。竹：まっすぐ強靱の象徴。
b	(正面) 梅と竹、(裏面) 宝珠と祥雲	梅：寒中に咲き、春を告げる。高潔、不屈の象徴。宝珠：永遠不滅の象徴。
cd	菊	菊：寒中に咲く。高潔の象徴
ef	八卦	八卦：自然万物の現象の象徴。風水的な意味では、邪気を退ける力がある
gh	僻邪(狛犬)	狛犬：中国では「僻邪」といい、邪気を退け、場所を守る
ij	八卦と宝ずくしの組み合わせ	宝ずくし：宝珠、宝巻、宝鑰、金囊、小槌、軍配、分銅、升などで構成される
kl	牡丹	牡丹：富貴の象徴
mn	蓮	蓮の花：極楽浄土と平和の象徴。蓮の実：清廉、多子の象徴。
o	松、竹、如意	如意：万事如意、万事順調の象徴
pq	石榴の実と石榴の花	石榴：多子、子孫繁栄の象徴
rs	桃と梅の花	桃：長寿の象徴
t	楽器(つづみと笛)	楽器：雅の象徴。つづみ(鼓)は江戸紋様である。
u	火炎宝珠と祥雲	祥雲：天上の世界の象徴



写真6 八卦の紋様 (i)



写真7 狛犬の咥形 (g)



写真8 楽器(鼓の革、鼓胴と笛)の紋様 (t)



写真9 梅の花 (s)



写真13 松、竹と如意 (o)



写真10 桃 (r)



写真11 石榴の実 (q)



写真12 石榴の花 (p)

5. まとめ

以上は、「東海の墓」の立地、空間形態、装飾文字と紋様などについて記述の形で明らかにしてきた。この墓の意匠面(立地、形態、文字と紋様など)が示した特徴は、施主のみならず、当時の長崎の在住唐人や中国人が有する考え方や当時の石造技術を知る重要な手がかりの一つであると考えられ、今後、他の事例と比較しながら分析を進めていきたい。

- (1) 宮田安、唐通事家系論考攷、長崎文献社1979、pp617-642
- (2) 李献璋、長崎唐人の研究、親和銀行1991、pp198-200
- (3) 東海安興、東海の墓について、長崎文化5、長崎文化社2011、pp32-40
- (4) 土成会による測量図は(3)の東海安興の論文に引用されているが、原図の所在は不明である。宮田安研究グループ(竹内光美、松井一男)による文字と紋様の解説は長崎歴史文化協会の研究会で発表されたことがある。
- (5) 李桓、範春艶「東海の墓」に関する調査研究—装飾文字と文様について、日本建築学会研究報告 九州支部 第51号、2012.3、pp441-444
- (6) 李桓、東海の墓にみる唐人墓の立地観、長崎総合科学大学地域科学研究所「地域論叢」2012.3、pp13-19

補注：文中の図及び写真はすべて作者による。

終章 総括

第1節 唐人墓とその造営

大石 一久

1 近世以前と近世以降の唐人墓

中国大陆と日本列島との交渉は有史以来非常に密接な関係にある。とくに九州西海岸部は地理的に近い条件もあって他地域以上に豊かである。しかも近世以前の中世にあっては、時代的な制約に左右されながらも両国の交渉は活発であった。それだけに日本側で亡くなったであろう中国人も多くいたはずだ。いたはずなのに、近世以前の唐人墓は皆無に等しい。

長崎県西海市の横瀬に唐人墓と伝えられている墓石がある⁽¹⁾。横瀬浦は、佐世保湾と大村湾が外海に繋がる湾口にあたり、近くの針尾城跡（小鯛城跡）からは多くの中国系貿易陶磁器や浙江省寧波の梅園石を素材にした石塔の一部（薩摩塔？）が確認できる。それほど中国との交渉が豊かな環境にあり、当地が中国大陆との海上ネットワークに繋がっていた地域であることはほぼ間違いない。

ただ、墓石自体は2種類の五輪塔の各部材を寄せ集めたものとなっており、1基分は14世紀後半から15世紀代の関西で制作されたものである⁽²⁾。この種の石塔は、同時期に大量に搬入される平戸島や対馬・五島列島などと同じ系譜をもったものであり、それと同じ流れで横瀬浦の五輪塔も建塔されたのではないかと考えられる。であれば、横瀬の唐人墓は、中国人が埋葬されたというよりも、中国大陆と交渉をもった日本人が埋葬された可能性が高いように思われる。

横瀬浦を抜けて大村湾内に進むと、現・大村市内の郡川河口部にあたる好武城跡やその外縁に広がる寿古遺跡で12～13世紀頃の貿易陶磁器が大量に出土しており、九条家領彼杵本荘における惣政所代所の可能性が指摘されている⁽³⁾。また、東彼杵町の白井川遺跡や岡遺跡などでは11世紀後半から12世紀後半をピークにした中国貿易陶磁器が多量に出土しており、とくに後者の白井川遺跡では「綱」墨書銘白磁碗が出土している。この「綱」は「綱」に通じ、楼楷田遺跡（松浦市）出土の白磁碗墨書銘「綱司」と同じく中国（宋）海商のリーダーや船団の船頭・資本家をさす「綱首」と解釈され、彼ら中国海商のリーダーらが実際に大村湾内（白井川遺跡）に渡来し居住していた可能性を高くしている⁽⁴⁾。

ところで、中国浙江省寧波の梅園石を素材にした薩摩塔は、現段階で郡川中流域の北東部にあたる龍福寺跡だけで確認され、その制作時期は12～13世紀ころと考えられる⁽⁵⁾。とくに薩摩塔建塔には環東シナ海世界で活動する中国海商が深く関わった奉納塔の性格

が濃く、その信仰には仏教信仰を軸に土着の信仰が大きく影響しているのではとの指摘がなされている^(註6)。この点から想定すれば、12～13世紀ころの大村湾内で最大の環東シナ海交易センター的な集積地が郡川河口周辺にあり、その宗教上の霊地的地所が龍福寺にあたっていたために薩摩塔が当寺にのみに奉献されたのではないかと考えられる⁽⁷⁾。

このように長崎県の大村湾とそこから外洋に繋がる横瀬浦だけをみても、中世における中国大陆との交渉は活発に展開されていたものと思われる。思われるが、中国人墓と考えられる確かな唐人墓は1基もない。もちろん、ここでいう墓は地上標識部分だけを指しており、本来、地上標識を伴わない埋墓だけの唐人墓があったのかもしれない。仮に埋墓だけの墓があったとしても、それを物語るような伝承ぐらいい残っていてもいいはずである。いいはずなのに、その伝承地すらない。であれば、近世以前の唐人墓はほとんど築かれていなかったとしても許されるのではないだろうか。

ところが、近世に入ると唐人墓が確認されてくる。各唐人墓の具体的な考証は本編収録の報告に委ねるが、現在までに坊津（鹿児島県）、伊倉（熊本県）、長崎市内（深堀、悟真寺）で亀甲墓形式を典型にした唐人墓が伝わっている。また、悟真寺の中国人墓地は近世初頭の寛永期から始まり、その伝統は華僑の御子孫によって大切に受け継がれ、現代の真新しい中国人墓も築かれている。とくに個人墓から家族墓を前提にした亀甲墓への変遷過程が認められる点で、悟真寺の中国人墓は貴重な情報を提供している。

現段階で紀年銘上最古の唐人墓は元和5年（1619）銘の「肥後四位官郭公墓」（郭濱沂墓）である。これ以降、中国（とくに福建省）と関係深い港市には唐人墓が築かれてくる。基数はさほど多くはないが、近世以前にはありえなかった現象である。何故に近世以降になると唐人墓が築かれてくるのか、その背景を仏教墓やキリスト教墓との比較を通して、墓自体に対する捉え方（死生観）の相違から考えてみる。

3 仏教墓・キリスト教墓・唐人墓の性格

伝統的な仏教墓や16世紀後半以降のキリスト教墓、それとここで問題にしている唐人墓とくに亀甲墓は、墓そのものに対する捉え方（死生観）が三者三様で基本的に異なっている。とくに唐人墓は他の二つと比較して異質であり、墓と死後の世界の関係は非常に濃い。そこに唐人墓を築造するに至る要因の一つがあったように思われる。

仏教墓とキリスト教墓は、墓自体はあくまでも仮の住まいであり、被葬者が永遠に墓地に規制されるものではない。

仏教墓の場合、死者は荒ぶるケガレの状態にある。そのため葬儀を終えると初七日、四十九日から新盆、

一周忌、三回忌、十三回忌、十七回忌、さらに三十三回忌や五十回忌の最終年忌を経てやっと死者の魂は清められ祖霊に昇華する⁽⁸⁾。この考えは柳田民俗学の定説であるが、要は最終年忌を終えると仏教墓は役目を終え、現世から完全に「あの世」送りになる。実際、地域によって多少の違いはあるものの、地上標識である立塔墓石の場合、最終年忌（主に50回忌）を終えると横に倒して墓としての役目を終了したことを示し、島原半島の一地域（南島原市有家町）では梢付塔婆をこしらえて墓地の片隅に立て年期終了の証しとしている。ただ、先祖崇拜等の観念の入り方によっては、地域ごとに仏教墓に対する様相が異なることはいうまでもない。そのため、最終年忌を終えたからといって墓としての役目を終了したというわけにはいかない地域もあり、そこに一族と仏教墓の関係に違いが見えてくる。

次にキリスト教の葬儀は、死者が祝福されて天国（パラダイス）に行くための儀礼である。いわば復活して永遠の生命を得るまでの一時的な住み処が墓であり、神のもとへ旅立つ儀式が葬儀なのである。だから葬儀は、この世での別れは寂しいが、祝福されるべき祝いの儀式なのである。当然、死者に仏教でいうようなケガレなどあるわけがない。仏教徒の葬儀に参列してキリスト教の信徒が一番驚くのは「清めの塩」だという。何で清めなければならないのか、その意味がわからないという⁽⁹⁾。

ここで、潜伏キリシタンを先祖に持つ現代のキリスト教徒からの聞き取りを紹介する。話者は、田平教会堂附属（平戸市）の瀬戸山墓地管理委員会代表を勤める田川忠義氏である。

「亡くなれば少し悲しいが、神に迎えられたのだから歓びである。悲しみより歓びの方が大きい。葬式は祝い事なんです。だから、葬式ではありったけのご馳走をする。刺身はもちろん、何でも出す。一般の祝い事と同じなんです。」

田川氏の発言は現代キリスト教徒の死に対する思いを述べたものであるが、この考えは初期キリシタン時代においても同じであったと考えられる⁽¹⁰⁾。

また、キリスト教墓地の特徴として、聖職者が墓地自体を祝別（聖別）して神によって選ばれた聖地とし、俗界と区別するために壁などで結界する点があげられる⁽¹¹⁾。この祝別の行為は墓地選定に重大な関心を寄せる唐人墓の場合と似通っているが、キリスト教墓と唐人墓との決定的な相違は、観念上、墓自体を被葬者にとっての一時的な仮の住まいと捉えるか、それとも永久に続く死後の世界と捉えるかにある。

ところで、仏教墓とキリスト教墓は死者に対する弔いの観念に違いが見られるものの、墓自体は「あの世」や「天国」に至るまでの一時的な仮の住まいであると捉える点で共通する。だから極端な話し、両墓ともに未来永劫にわたって墓自体を守り続ける必要はなく、

最終年忌や復活を迎えた後は墓としての意味づけは観念上消滅する。つまり、墓地を維持管理する子孫の役割は一定の期間内という期限付きなのだから、家族・一族が当地に未来永劫にわたってコミュニティを築かなくても墓地造営は可能ということになる。

それに対し、唐人墓は墓地選定と一族（宗族）のコミュニティの存在に全てがかかっているといっても過言ではない。それも単なる唐人の集住地（唐坊）という意味ではなく、死者に連なる一族のコミュニティである。なぜなら、万一、墓地選定をないがしろにして不適当な場所を選んだ場合は、子孫として最大の恥であり失態となる。そのために風水説を重要視するわけだが、唐人墓地の選定は後に残された子孫繁栄にも大きく影響するから、一族（宗族）コミュニティの存在が極めて重要な要素となる。

「龍穴を探す」とは、風水説の基本的な考えである。とくに霊山と龍穴は不可分の関係にある。霊山の山上には龍神が棲み、そこから龍脈と呼ばれる霊的なラインが流れて平野部との境目附近に龍穴が存在する。その龍穴がある場所は現世の人間はもちろん、死者の葬地としても最高の土地といわれ、墓地選定の最大の鍵となっている。しかも北、東、西を山に囲まれて南に視界が開け、東側から川が流れることを必須条件とする。長崎市夫婦川町の春徳寺にある「東海の墓」は、この風水説によって墓地選定がおこなわれた最適の事例である。李桓氏の論考「「東海の墓」にみる唐人墓の立地観」は、「東海の墓」に残る多くの文字情報と立地条件を風水説の立場から解釈して唐人墓の墓地観念を解き明かした労作である⁽¹²⁾。以下、氏の論考に従って唐人墓とその墓地観念を探ってみる。

「東海の墓」は、唐通事を勤めた東海家の祖徐敬雲夫妻に始まる亀甲墓形式の家族墓である。最初の徐氏は、その長男・徳政が1660年～77年の約17年間をかけて造営したといわれ、墓碑を取り囲む墓壁に多くの文字と装飾文様を残している。その情報を読み解いた李氏は、「東海の墓」造営に風水説による墓地選定が強く影響していると結論付けている。李氏によれば、墓壁に刻まれた「萬年鼎載山為案一帯香崎海作砂」は「萬年の山を「前案」とし、（左右の）連山や海を「砂」とする」と解釈し、「案」（前方の山）、「砂」（左右の山）ともに風水概念としている。また「江山正脈」の「脈」は風水の「龍脈」とする。さらに「龍亦乘美」の「龍」は立地の背後にある山をさす風水概念であり、実際には「東海の墓」の背後にある烽火山を指した概念ではないかとしている。結論として、李氏は「東海の墓は長崎における山と川を風水の見方において読みとり、その見地から立地を定め、また、その立地から周囲の景観を総括した。風水の良い土地を得るという立地観はこの墓からはっきり見られるものとなっている」としている。

「東海の墓」に見られる風水説重視の考えは、唐人

墓一般の墓地選定においても適応される観念だと思われる。では、何故に風水説に基づく墓地選定にこだわるのか。その最大の理由は、唐人墓は、上記した仏教墓やキリスト教墓とは異なり、墓地そのものが被葬者にとっての永遠の住み処と意味付けられ、一時的な仮の住まいなどというような有期的な墓ではないためと思われる。つまり、被葬者（先祖）にとって死後の永遠の世界が唐人墓そのものなのだから、万一、墓地選定をないがしろにして被葬者の永遠の住み処として不適当な場所を選んだ場合は子孫として最大の失態であり、しかも後に残された子孫の繁栄にも大いに傷が付くことを意味している。具体的には遺体が腐食しやすいような墓地は最悪のケースとなる。だから、墓地選定は、後に残された子孫とその一族コミュニティーにとって重大な関心事なのである。「東海の墓」でいえば、徐敬雲夫妻とその長男・徳政の間柄であり、子息の徳政はその両親徐敬雲夫妻のために風水説にもとづいた最高の場所を墓地として用意する義務があり、そのことが後に残された徳政一族の繁栄に繋がるのである。

4 唐人墓と死後の世界

唐人墓は、仏教墓やキリスト教墓などの一時的な仮の住まいという意識ではなく、唐人の被葬者にとっては永遠に続く死後の世界そのものである。当然、そこには末代まで墓を守り維持していく同族・同一血縁者（家族）とその一族コミュニティーの存在が不可欠となる。つまり唐人墓造営の大前提は、死後の世界（唐人墓）を未来永劫にわたって維持管理していく一族（同族）のコミュニティーが存在しているかどうかにかかっている。仮に一族のコミュニティーが出来上がっていなければ、たとえ渡航先の日本で亡くなったとしても現地に墓は築けなかったのではないか。その場合は、おそらく遺体を一族が待つ故郷まで運び、そこに墓地を築いたものと思われる。だから、近世以前の日本に唐人関係の墓がほとんど確認されないのは、たとえば東シナ海を舞台にした交渉があったとしても、渡航先の日本に唐人一族によるコミュニティーの存在が未発達であったためではないかと思われる。

ただ、ここで唐人墓といっているのは、唐人墓の典型である亀甲墓についてである。亀甲墓成立以前の墓形式がどういうものであったのかわからないが、この亀甲墓は中国本土で宗族（族譜）の成立に併せて築かれた墓形式ではないかと思われる。未調査のため推測の域を出ないが、中国で民間レベルまで宗族制度が定着し、かつ墓造営にかかる経済的余裕が整った時に亀甲墓形式の一族墓が出来上がったように思われる。つまり、九州圏内で確認される亀甲墓形式の唐人墓は、母国での宗族成立を受けて、一族（同族）のコミュニティーが渡航先（九州圏内）にも出来上がったことを示唆しているように思われる。

なにはともあれ、17世紀初期に急に唐人墓として亀甲形式の墓が登場してくるのは、現地における唐人一族のコミュニティーの成立と、亀甲墓自体に宗族関係が強く意識されてきたことと密接な関係があったように思われる。

上記の拙稿は、あくまでも仮説である。何故に中世・唐人墓の造営が見当たらないのかという素朴な疑問に対する一私案と考えていただき、今後のたたき台にいただければ幸いである。

- (1) 拙著「石塔類からみた中世・西海町の様相 ― とくに唐人墓から見た海上交易について」(『西海史談』第1111号 2001)参照。
- (2) 中央形式塔（日引石塔、花崗岩製塔）については、拙著「日引石塔に関する一考察 ― とくに長崎県下の分布状況から見た大量搬入の背景について」(石造物研究会会誌『日引』創刊号 2001)、拙著「平戸の中世・石造美術」(『平戸市史』自然考古編 平戸市史編さん委員会 1995)、拙著「日島の中世・石造美術」(『日島曲古墓群発掘調査報告書』若松町教育委員会 1996)、拙著「対馬の中世・石造美術（その一、その二）」(『対馬の自然と文化』1989、1990) など参照。
- (3) 満井録郎「中世彼杵庄の一考察」(『大村史談』第7号)、大村市文化財調査報告第28集『黒丸遺跡ほか発掘調査概報(Vol. 5)』(大村市教育委員会 平成17年)、大村市文化財調査報告第15集『寿古遺跡』(大村市教育委員会 平成2年) など参照。
- (4) 『東彼杵町誌 水と緑と道（上巻）』(東彼杵町教育委員会 平成十一年)、安楽勉編『岡遺跡』(東彼杵町教育委員会 昭和六三年)、安楽勉編『白井川遺跡』(東彼杵町教育委員会 平成元年) など参照。
- (5) 拙著「異質石塔にみる中世の大村湾・有明海の海運」(『大村市史 中世編』) 参照
- (6) 井形進「異形の石塔をさぐる ― 薩摩塔の時空」(花乱社選書 2012) など参照。
- (7) 前掲書「異質石塔にみる中世の大村湾・有明海の海運」参照
- (8) 岩田重則『「お墓」の誕生－死者祭祀の民俗誌』(岩波新書) など参照
- (9) 2007『復活の島－五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書』(長崎文献社) 参照。
- (10) 『日本キリシタン墓碑総覧』(編修・大石一久 企画・南島原市世界遺産室) 参照
- (11) 「1572年、イタリア人アレシャンドレ・ヴァラレージョ師が日本からの帰途、インドより、ポルトガル人のイエズス会の司祭らにしたためた書簡」(『十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅲ期第4巻』)の中で、宣教師が墓地の選定を行ったこと、墓地選定後は墓域を壁で囲い、墓地に大十字架を立て、諸聖人の祝日の日（11月1日）に墓地を祝福したことなどが記されている。
- (12) 李桓「東海の墓」にみる唐人墓の立地観」(『地域論叢』No28) 参照

第2節 キリシタン墓地と中国人墓その接点

田中 裕介

近世の中国人墓地は、これまで対外交渉史の分野における文献資料及び碑文からの研究が主であった。墓地への関心も近世を通じて中国文化を維持しながら帰化した唐通事研究の一環としておこなわれてきたため、その関心は被葬者の人物像にそそがれがちであった。

いっぽう遺構・遺物として今日まで残されているキリシタン墓と中国人墓は考古学的には別個のものとして認識されてきたが、概念的には列島に移住した唐人がキリシタンになるケースも史料上では知られている。とくに禁教令以前ではまれではない。その場合彼らの墓制はどのようなものになるのだろうか。中世の墓制から近世の墓制へと変転する時期に、宗教的な色彩の強いキリシタン墓と民族的な特徴をもつ中国人墓が日本の墓制にどのような影響をあたえたのか。

このような関心から考古学的方法をもちいて石造施設や石造墓碑を実測し、中国人墓の日本における変容過程を追求することによって、日本の仏教的墓碑およびキリシタン墓碑との考古学的な対比が可能となると考える。

キリシタン墓碑については、イエズス会を介してヨーロッパから直接的な影響のもとに伝わった要素と、東南アジアおよび中国からの影響による要素を判別することができれば、次のステップではインドから東南アジアにおけるキリスト教墓と中国人墓およびイスラム教墓との影響関係を明らかにし、日本のキリシタン墓碑の源流を考古学的に解明する一定の見通しを与えられるものと考えられる。

それは他面では戦国時代末期から近世初頭の鎖国から宗門改め制度の確立に至る歴史過程の中における、キリスト教徒や中国人移住者の動向を明らかにするのみならず、宗教的統一（キリシタンの禁圧、仏教への統制、儒教的要素の導入）の過程を、当時の遺構や墓碑などの石造物の考古学的研究をとおして解明する手掛かりを得ることでもある。

以上のような見通しのもとに行った基礎資料の集成の中で見えてきたものを以下に記す。

（1）キリシタン墓の調査から

今回の調査では立碑形式の十字架碑や粗製の伏碑など、日本中世の在来形式の石塔に系譜をたどれない石造物がキリシタン遺跡にもちいられていることを確認した。

第1章で報告した大分県豊後大野市・臼杵市所在の西寒田クルスバ遺跡と岡なまこ墓遺跡は、遺構の内容・石造物の種類はことなるけれども、臼杵市野津下藤キリシタン墓地と共通する石組遺構が存在することが明

らかとなった。西寒田クルスバ遺跡では伏碑の存在はまだ知られていないが、代わりに十字架碑が発見され、岡なまこ墓遺跡では多数の地元石材をつかった粗製の伏碑を報告した。ともに下藤遺跡の年代観から類推して近世初頭のキリシタン墓地であると考えられる。

キリシタン墓の調査の過程で明らかになったことは石組遺構の石材に、キリスト教改宗以前の仏教石塔群の石材を再利用し墓を構築している例が多いことである。これは、本来村共同体の宗教施設であった仏教寺院をそのままキリスト教施設につくりかえたため、無用あるいは功力を失った仏塔の石材を再利用したものである。このようなキリシタン墓が中世の仏教石塔群と混在する状況は、現在隣接地に神社と仏堂があり宝篋印塔や五輪塔の集積のそばにある臼杵市搔懐キリシタン墓群や、周囲に薬師堂や神社のある一角に存在する豊後大野市朝地町市万田磨崖十字架など数多く上げることができる。このように戦国期から近世初期の村共同体の宗教的結集の中心となっていた村の神仏空間に、キリスト教の墓碑や記念物が存在する場合が多く、それは村全体が宗教的な構造を保ったまま改宗したことを示す証左となろう。換言すればキリスト教徒が仏教を紐帯として村の惣堂を破却し、同じ場所に十字架あるいは教会を設けてキリスト教を紐帯とした村落結合の要となる施設としたのではなかろうか。この論点は原田昭一氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）の指摘であるが、西寒田クルスバ遺跡や、岡なまこ墓遺跡もまさに、その指摘のあてはなる例となろう。

戦国時代における豊後国の海部郡から大野郡にかけてのキリスト教への改宗は、大友宗麟がカトリックに改宗した1578年以後急速にすすむが、今回報告した墓地の所在する臼杵市から豊後大野市はとくに布教が活発であったところである。村落の仏教を中心とする宗教施設を、キリスト教の宗教施設に転換し、そこに墓地が設けられている。豊後での村落単位での転宗のあり方を示すものである。

（2）中国人墓の調査から

キリシタン墓碑の一型式である切妻形板状伏碑が、長崎市内の近世中国人墓の墓碑背後の蓋石に類似しているという坂井隆氏⁽¹⁾の指摘から始まったキリシタン墓と中国人墓の比較研究は、中国人墓の石造物としての定義を明らかにして、類似の墓地を全国に探索し、17世紀の中国人墓の分布をほぼ見通すところに行った。その現段階の成果をまとめておきたい。

華南様式の墓地と中国人墓 墓碑の背後の墓丘をもち、その周囲の半円形の外周と、方形の前庭をもうける独特の墓地様式は、明代の中国華南とくに福建省に起源を有する墓地様式⁽²⁾として、明国末期から清国初期にかけて東アジア、東南アジア諸国に伝播した。亀甲墓、亀殻墓などと学問分野の違いによって呼び方

が異なるが 本報告では華南様式の墓地と総称した。中国各地からと移住した中国人の墓として主として採用され、明代と清代の中国人に最も例が多いので「唐人墓」と日本では呼びならわされてきた。

しかしこの墓地様式は風水思想を背景にした中国の華南沿岸部の中国人の墓制と云う固有性を強く持つと同時に、宗教や民族の違いをこえて伝播するという特徴をもつ。長崎を筆頭とする九州各地の唐人町に近接した華南様式の墓地は渡来した華商の墓地でありまさに「唐人墓」という民族性をするべく表現するが、同じ様式は日本に渡来した黄檗宗の中国人仏教僧の墓地に、さらのその教えを受けた日本人仏僧の墓へと伝わる。いっぽうで儒教墓の一形式として日本人大名や儒者に受容される例もある。琉球では一部の上級士族の墓地として受容されるとともに、中国の福州で死亡した琉球国人の墓地もこの形式である。東南アジア各地の華僑の墓地にも広く採用されるが、ベトナムホイアンの日本人町近郊に所在する17世紀の日本人墓地にも採用される⁽³⁾。一方中国国内の華南では中国人イスラム教徒の墓制にも採用されている⁽⁴⁾。

このように華南様式の墓制は宗教の違いをこえて特定の中国文化を受け入れる諸民族に受容される一面をもち、17世紀の日本と琉球あるいは日本人と琉球人にとって魅力的な墓制であった。しかし日本近世には華南様式の墓制は、渡来中国人でありしかもキリシタンでないという宗教的に制限された唐人の墓としての性格を強めている。現在の筆者の理解は、「唐人墓」とは近世日本において仏教徒・儒教徒あるいは中国の民俗宗教を信仰し、キリシタンでないことを表明して渡来定住した中国人の墓とかんがえる。その多くが華南様式の墓制およびそこに遡源する墓地を採用したと考えられる。

「唐人墓」の立地の特徴 華南様式の墓地は風水思想に基づく選地をおこなう。そのため居住地からはなれた好地を選定し、墓域を買い取ったと考えられる。風水思想に基く選地がなされる墓は、実際に中国からの渡来人が葬られている場合がほとんどである。肥後玉名の3か所の唐人墓、薩摩坊津泊墓地や、長崎深堀の菩提寺墓地とくに呉五官墓など唐人町や寺院の墓地から離れた場所に孤立して立地するものは、風水による墓地選定がなされた可能性が高い。

長崎の悟真寺も広い墓域の中で、初期の中国人墓は集中隣接することなく一定の間隔を取って分散立地しており、位置の選択は基本的に風水思想に基づいて個人あるいは夫婦単位で行っており、十字架碑を中心に一定の区画を聖別し、信徒集団を順次年齢階梯に従って埋葬するキリシタン時代の墓地とは大きく異なっている。

これらの立地の特徴は、唐人が幕府によって長崎に集住させられた1630年代以後次第に影をひそめる。唐

人が住宅唐人として長崎市内に散居していた時期までは、唐人墓は長崎近郊に東海の墓を始め孤立して立地するものがみとめられるが、唐人屋敷が完成し唐人居住区への隔離政策が始まる1689年以後は墓地は、唐寺と呼ばれた崇福寺、興福寺、福濟寺、悟真寺など仏教寺院の共同墓地に集中し、個々の墓地の風水に基づいて選定することは許されなくなる。

日本年号の使用 坂井隆氏⁽¹⁾が早く指摘したように、17世紀の中国人墓には被葬者が明国出身と明記しているにもかかわらず、日本年号を用いている墓碑がほとんどである。日本年号は1619（元和5）年の伊倉郭濱沂墓と深堀呉三官墓から1670年代まで用いられ、以後清代の墓碑は清国年号を用いるようになる。いっぽうキリシタン禁制が発令された1614年以後は西暦（＝キリスト教暦）の使用は禁止されていたが、ホルトガル人やオランダ人など南蛮人や紅毛人には強制されなかった。しかしポルトガル人追放後の1640（寛永17）年9月平戸のオランダ商館では幕府により西暦年号の掲示された建物の破壊が命じられた。西暦の使用は全面的に禁じられた⁽⁵⁾。同時にオランダ人の長崎移転に伴って平戸近郊の墓地は廃止され、オランダ人墓地がのちに長崎悟真寺に設けられる。オランダ人の墓碑に西暦の使用が復活するのはのはその後1779年の出島商館長デュルコープ墓からである。

日本年号の使用はキリスト教徒でないことの間接的表現であると同時に、江戸幕府の支配への服従を表明するものであろう。しかしその服従は日本人化が条件ではなく墓地の様式から見て中国人としての民族性を保持したままの帰属が認められていたと推定される。ところで禁教令以前のキリシタン墓碑のほとんどが西暦よりも日本年号を用いていることが知られている。これまで被葬者が日本人であることを暗黙の前提にして当然視されてきたのであるが、この事実は唐人墓と共通する側面であり、禁教令以前の日本人キリシタン信徒もまた西暦よりも日本年号を用いることで「日本国」への帰属を表現していたのではなかろうか。

このような状態が変化するのは隔離政策がおこなわれた1689年からで、以後唐通事など帰化した唐人は墓制や姓名のうえで日本化が進行し、華南様式の墓地の遺制を残しながらも日本的な近世墓碑と戒名等の日本的表現に代わり姓名もまた日本風に改まっていく。いっぽう唐人屋敷に囲い込まれた唐人や日本を訪れる清国華商たちはあくまでも清国人と云う外国人として扱われ、墓制も唐人墓特有の形式が強制されて、その墓には清国年号が用いられるようになる。悟真寺や崇福寺・興福寺などんの18世紀の墓制がその典型である。唐人墓の様相は近世の日本に移住した中国人を日本社会がどのように受け入れたか、その関係を反映している。

渡来中国人石工の関与 玉名市伊倉の郭濱沂墓や長

崎市深堀の呉三官墓の墓碑本体や供物台のデザインや装飾あるいは表面調整の方法は同時代の日本の石造物には用いられていないことから、中国福建から石材の搬入あるいは石工の渡来を推定される。

さらにもう一つ重要な手掛かりとして石材を割り出す時の鑿挿入口である矢穴の痕跡が手掛かりとなる。日本の石材切り出し技法としての矢穴技法に関しては、最近研究が進み、森岡秀人・藤川祐作により大綱がしめされた⁽⁶⁾ それによれば日本国内の矢穴の形態は半島系タイプ、先Aタイプ、古Aタイプ、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプ、Dタイプに七分かれ、各タイプは基本的に新古の関係にあり、半島系からAタイプまでは矢穴口の長辺が10cm前後の大型で、BCDと次第に小型化することを明らかにし、Aタイプの矢穴が17世紀前葉元和寛永期の徳川による大阪城普請の標準であるとした。矢穴口長辺6cm未満短辺4～5cm深さ6cmの小型のCタイプは1670年を初現として江戸時代中期以後現代までに現れるとまとめた。今回報告された熊本県玉名市の郭濱沂墓や林均吾墓にもちいられた矢穴は森岡・藤川分類のCタイプに当たる。しかし年代は1620年前後のことである。そのころは大型のAタイプが盛行する時期にあたり、日本の矢穴編年には該当しない。

一方、中世の石造物の矢穴技法の遡源を中国にもとめた佐藤亜聖⁽⁷⁾ は中世の日本と中国の石造物の矢穴資料を総括的に4分類した。1類は森岡・藤川分類の先Aタイプにあたる矢穴口長辺8～10.4cmの技法で、日本と中国浙江省に多い。2類は同じく先Aタイプにあたる矢穴口長辺10.5cm以上の技法で、日本にのみ分布。3類は矢穴口長辺6cm以上で船底状舌状の断面形態を、中国の寧波中心に分布するとした。4類は矢穴口長辺6cm以下の長台形あるいはV字形断面の小型の矢穴で、泉州などの福建省に分布する。佐藤氏は4類の盛行した福建省に1・2類の矢穴が未確認な点から、以上の1～4類の矢穴の相違は年代的な新古ではなく、石材に適応した地域性とみなせる可能性を示唆した。

郭濱沂墓や林均吾墓の矢穴は佐藤氏分類の4類にあたると考えられる。碑文によれば被葬者は福建出身者であるから、佐藤氏の地域性の指摘に該当する。したがって玉名の唐人墓は福建省の石工によって作られた可能性をしめしており、被葬者の故郷の福建で製作した墓碑を中国から渡海搬入したのか、あるいは故郷から石工をよびよせて墓を製作したのか、はたまた当時福建の石工が日本で活動していたのか、いずれかは不明であるが、中国の石造技術と彫刻技術を身に着けた石工による墓碑を識別できる可能性を佐藤氏の研究はしめしたといえる。今後年代のはっきりした矢穴資料を集めることで、この可能性は積極的に解明できるであろう。

(4) 1620年前後の長崎—キリシタン墓と中国人墓の接点—

今回の調査によって近世初期の「唐人墓」の実態がわずかではあるが明かになった。その点とこれまで明らかとなったキリシタン墓との関係を比較してみよう。

年代 1620年前後 キリシタン墓碑の遺品で現在国内最古の例は1581（天正9）年銘の大阪府四条畷市千光寺礼幡墓碑である。そのご1601（慶長6）年以後九州と関西で、伏碑形の墓碑が用いられるが、1614（慶長19）年の禁教令以後、関西では墓碑の樹立はなくなり、禁教令の厳格な適用がおくれた九州ではその後もキリシタン墓碑が残り、長崎県では1622（元和8）年の川棚ジュリア墓碑を最後にほぼ1620年代に弾圧の強化に伴って姿をけす⁽⁸⁾。

いっぽう華南様式の墓地は1619（元和5）の熊本玉名郭濱沂墓と長崎深堀呉三官墓にはじまり、長崎悟真寺墓地でも1627年から唐人墓の造営が始まる。このように1620年前後をキリシタン墓が終焉し、かわって唐人墓に墓制が入れ替わるように盛衰するのは単なる偶然であろうか。

すでに1540年代から日本銀交易のため明人海商の日本への渡航が急増していた。各地に唐人町が形成されるようになる。しかし中国様式の墓地は現在のところ未確認である。日本で客死しても故郷に遺骸を持ち帰り埋葬していたのか。あるいは日本式の埋葬である仏教的な石塔を利用した埋葬が行われていたのだろうか。依然謎であるが、1619年以前に唐人の埋葬が行われていたことは確実である。1620年頃から突然唐人の埋葬が行われるようになったのではなく、それまでは中国風の墓地は作らなかったか、きわめて少数であったろう。今後1619年を遡る唐人墓の探索が当然行われなければならないが、1619年頃に九州各地の唐人町で唐人墓がいっせいに出現する現象は注目しなければならない。

中国人がキリシタンであれば、当然キリシタン墓碑で葬られる。キリシタン墓の碑文は多くが洗礼名であり、とくに銘文の少ない九州のキリシタン墓碑の被葬者が日本人に限られるという理由はなく、キリシタン墓碑の被葬者が中国人が含まれる可能性を考慮する必要がある。同時に1620年以前の中国人がすべてキリシタンであったとも到底考えられないから、悟真寺の創建が1598年と伝えられるように仏教寺院への中国人埋葬が行われた可能性も否定できない。日本で貿易する中国人がキリシタンであることを認めない幕府側の姿勢にたいして、中国人側が風水思想に基づく墓地を作りその祭祀を行うことで、キリシタンでないことを表明する一つの方法として採用した可能性を考えておきたい。

地域 接点としての長崎悟真寺墓地 そのばあい注目されるのは長崎市悟真寺墓地の状況である。悟真寺



図1 フランシスコ・グラシアス墓碑（大石 2012 より）

の17世紀の「唐人墓」では亀甲形の蓋石に砂岩製の半円形の石材を転用した墓石がみとめられた。その墓碑石の形状がキリシタン墓碑にきわめて似ており、唐人墓が作られる以前の1620年以前に現在悟真寺の墓域になっている一角にキリシタン墓地が存在していたと想定される。そのキリシタン墓地の被葬者の中に中国人が含まれていたことは想定しなければならないし、弾圧で破壊されたキリシタン墓地の跡地をふくむ広大な土地が中国人の墓地として与えられた可能性が高い。

墓碑形式 半円形立碑 悟真寺で唐人墓の石材に転用されていた墓碑は半円柱形板状伏碑の西九州型であるが、奥行き短い型式で、1600～20年頃のキリシタン墓碑には認められない形式である。いちばん近いのは大石一久氏が紹介された幕末に長崎大音寺に所在した1589年銘でポルトガル人墓碑である（図1）⁽⁹⁾。残された絵図によると幅78.8cm、高さ39.5cm、奥行き45.5cmの伏碑と云うより立碑に近い型式であることが大石氏によって指摘されている。

悟真寺 I 75墓の蓋石前部は図2のように、幅72cm高さ46cm、奥行き35cmで縁帯の有無に相違があるが、碑面を正面に持ち、半円形で奥行き短い立碑的な墓碑であることは同一である。この型式が記録のように16世紀にさかのぼるキリシタン墓碑であれば、長崎においてはポルトガル人などをふくむキリシタンの墓碑として日本の在来的石塔形式とはまったく異なるこのような半円形立碑形墓碑が採用されたといえる。

キリシタン墓碑としての切妻形伏碑と、中国人墓としての切妻形蓋石については、今回の調査で悟真寺墓地において最古の切妻形墓碑は1641年銘のD68墓がその存在を推定できるのみで、それ以上遡及できなかった。しかし1630年代以前と推定される伊倉謝振倉墓では漆喰製の切妻形郭蓋が発見されており、中国人墓の蓋石の一形式としてその初期から存在したことが予想される。キリシタン墓碑としての切妻形板状伏碑は1606年井出の口5号墓から1620年頃まで存続し島原半島に多く分布する。今のところ中国人墓の蓋石との年

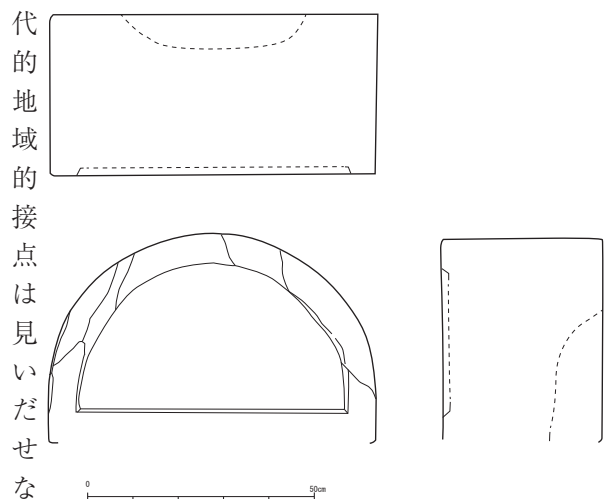


図2 悟真寺墓地 I 75墓 蓋石

い。しかし形態の類似は明確で、なんらかの影響関係があったことは長崎から島原、玉名が東西に連なる隣接地であるところからも想定しやすいところである。今後の資料の増加を待ちたい。

今回の調査研究によってキリシタン墓と唐人墓の接点がある程度明確になったと思う。1620年頃長崎およびその周辺において、民族を横断した宗教的な墓制（キリスト教的にも仏教的にも）から、キリスト教墓制を排除したうえで、民族の違い表現し日本への帰属を表明した「唐人墓」が成立し、そのような墓制における異民族の扱い方はその後、ポルトガル人を排除したうえで、オランダ人に適用されていく。オランダ人の墓が1640年代に稲佐すなわち悟真寺墓地に設けられたのは偶然ではなく、江戸幕府への帰属を表明した異民族として中国人と同等の扱いを行うという幕府の意思が表現されている。

- (1) 坂井隆2001「長崎悟真寺の唐人墓地」『九州考古学』76 九州考古学会
- (2) J. J. M. De Groot 1897 "The Religious System of China" Vol. III Brill ライデン（オランダ）
- (3) 坂井2001、岩生成一1966『南洋日本人町の研究』p 80～82 岩波書店
- (4) 呉文良（呉幼雄増訂）2005『泉州宗教石刻』p 190～202 科学出版社（北京）
- (5) 清水紘一1981『キリシタン禁制史』教育社新書
- (6) 森岡秀人・藤川祐作2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180 古代学研究会
- (7) 佐藤重聖2012「石材加工技術の交流」『寧波と宋風石造文化』汲古書院
- (8) 大石一久編2012『日本キリシタン墓碑総覧』南島原市教育委員会
- (9) 大石一久編2012『日本キリシタン墓碑総覧』P 196～197

キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の 外来墓制に関する基礎的研究

平成24(2012)～25(2013)年度科学研究費補助金
(研究活動スタート支援) 研究成果報告書
(課題番号 24820071)

発行日	2014(平成26)年3月31日
発行者	田中 裕介(研究代表者)
発行所	別府大学文学部 〒874-8501 大分県別府市北石垣82 TEL0977-67-0101(代表)
印刷	株式会社 クリエイツ